

一般国道23号中勢道路（6工区）建設事業に伴う

高井 A 遺跡発掘調査報告

1998・12

三重県埋蔵文化財センター

序

古来、河川は、流域に文化を発達させ、人々の生活や産業を支えてきています。鈴鹿市南部を流れる中ノ川は2級河川ではありますが、流域には古墳時代後期に徳居古窯跡群や稲生窯跡群というふたつの須恵器窯跡群があり、当時としては三重県下最大の窯業地帯となっていました。

さて、今回報告する高井A遺跡は、中ノ川左岸の丘陵裾部に立地する遺跡です。一般国道23号中勢道路建設に先立って調査され、奈良時代後期から平安時代後期の掘立柱建物と須恵器の他灰釉陶器・緑釉陶器などの遺物が見つかりました。須恵器に墨で書かれた「井於（施）」の文字は水に対する信仰を示すものです。

調査を終えたところにはやがて新しい道路が開通し新しい動脈として地域の文化を支えていくことでしょう。そのいわば代償として発掘された遺跡の膨大な記録を整理し報告書として世に公開していくことが、私どもに課せられた重大な責務であると考えております。本報告書が地域の歴史を解明する一助となることを念願するところであります。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただきました関係諸機関および地元の皆様に心からお礼申し上げるとともに、今後とも県民の皆様の文化財保護への一層の御理解と御協力をお願い申し上げます次第です。

平成10年12月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井 與 生

例 言

1. 本書は、三重県鈴鹿市徳田町字高井に所在する高井A遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局の委託を受け、平成4年に範囲確認調査（試掘調査）を、平成7年9月から平成8年8月にかけて本調査を実施した。また、整理・報告書作成業務を平成8年度から10年度に実施した。調査にかかる費用は、建設省中部地方建設局の全額負担による。

3. 調査は下記の体制で行った。

- ・調査主体 三重県教育委員会
- ・調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第二課第三係
- ・調査協力 鈴鹿市教育委員会・津市教育委員会
- ・現場作業 社団法人中部建設協会

現地調査業務 [平成7年度]

主幹兼調査第二課長	伊藤 克幸
主査兼第三係長	河北 秀実
主事	宮田 勝功・山本 義浩
技師	穂積 裕昌
主事	池端 清行・米山 浩之（津市教育委員会から派遣） 筒井 昭仁（鈴鹿市教育委員会から派遣）
調査補助員	川崎 志乃・田中 美穂（皇學館大学学生） 杉崎 淳子・中村 友子（奈良大学学生）
室内整理員	市川 嘉子・協業 輝美・黒川 敬子・太田 浩子 蒔田やよい・森川 綱代・鈴木 妙
研修生	Eric Chen（カナダ McGill大学）

[平成8年度]

主幹兼調査第二課長	山田 猛
第三係長	本堂 弘之
主事	宮田 勝功・山本 義浩
技師	水橋 公恵
主事	池端 清行・米山 浩之（津市教育委員会から派遣） 筒井 昭仁（鈴鹿市教育委員会から派遣）
調査補助員	井早 智代（カナダ Mount Allison University学生） 杉崎 淳子・坂下 真弓（奈良大学学生） 田中 美穂・池野 香代（皇學館大学学生） 森崎 豊（三重大学大学院生）・下畑 典正（龍谷大学学生）
室内整理員	市川 嘉子・黒川 敬子・太田 浩子・蒔田やよい 森川 綱代・鈴木 妙・新田 智子

整理・報告書業務 [平成9年度]

主幹兼調査第二課長	山田 猛
主査兼第三係長	本堂 弘之
主事	宮田 勝功
技師	西村 美幸・水橋 公恵
主事	池端 清行・米山 浩之（津市教育委員会から派遣） 筒井 昭仁（鈴鹿市教育委員会から派遣）
調査補助員	田中 美穂・池野 香代（皇學館大学学生） 酒井巳紀子（花園大学学生）・坂下 真弓（奈良大学学生） 石田 浩司（金沢大学大学院生）・下畑 典正（龍谷大学学生）

室内整理員	市川 嘉子・黒川 敬子・太田 浩子・蒔田やよい 森川 絹代・鈴木 妙・新田 智子
研 修 生	Noky Cheung (カナダ McGill University) (平成10年度)
主幹兼調査第二課長	吉水 康夫
主査兼第三係長	本堂 弘之
主 事	富田 勝功
技 師	西村 美幸
主 事	村木 一弥・山口 格(津市教育委員会から派遣)
調 査 補 助 員	酒井巳紀子(花園大学学生) 西脇 智広(泉學館大學学生)
室内整理員	市川 嘉子・黒川 敬子・太田 浩子・蒔田やよい 森川 絹代・鈴木 妙・新田 智子

4. 現地調査は、範囲確認調査を平成4年度に本堂弘之・小菅文裕・穂積裕昌が行い、本調査を平成7年度に筒井昭仁・宮田勝功が、平成8年度に筒井昭仁が担当した。
5. 本書作成にかかる報文執筆は、筒井昭仁が担当した。遺物写真撮影は本堂弘之による。
6. 発掘調査ならびに整理・報告書作成にあたっては、下記の方々に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同・敬称略)

八賀 晋(三重大学名誉教授)・磯部 克(県立松阪高校)・青木哲哉(立命館大学)・岡田 登(泉學館大學)・尾野善裕(京都国立博物館)・加藤真琴(多度町教育委員会)・新田 剛 藤原秀樹(鈴鹿市教育委員会)・平尾政幸 小森俊寛 上村憲章(財団法人京都市埋蔵文化財研究所)・福田明美(財団法人千葉県文化財センター)・二好美穂(奈良市埋蔵文化財調査センター)・渡江彰夫(東京大学)・小林秀(三重県史編纂室)・榎村寛之 人川勝宏(富宮歴史博物館)

7. 高井A遺跡については、既に『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅷ(三重県埋蔵文化財センター1996)、『同』Ⅸ(三重県埋蔵文化財センター 1997)、『中勢道路調査ニュース』No. 26・28にその調査途中の概要を報告しているが、本書をもって正式報告とする。
8. 本書に用いた地図および遺構平面図は、国土調査法の第VI座標系を基準とし、方位の表示は座標北をがす。
当該遺跡では磁北はN 6°40' W座標北から振れている。(平成9年度)
9. 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。
10. 本書に用いた遺構表示略記号は、下記の通りである。なお、遺構の名称・番号は、調査時点および調査途中の概報での呼称を踏襲せずに、新たに改称したものである。

S B 掘立柱建物 S D 溝・自然流路 S K 土坑 p 柱穴・小穴 S Z その他の遺構

11. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I 前 言	1
1. 概要と調査経緯	1
2. 発掘調査の概要	1
3. 調査の方法	2
(1)現地調査の方法	2
(2)資料整理の方法	2
II 位置と環境	4
III 発掘された遺構と遺物	11
1. 基本層序と遺構検出面	11
2. 遺構と遺物	11
(1)掘立柱建物	11
(2)柱列	27
(3)溝・自然流路	27
(4)包含層出土遺物	47
IV 遺構・遺物のまとめと考察	51
1. 弥生時代の遺物	51
2. 掘立柱建物について	51
(1)飛鳥・奈良時代～平安時代初期	51
(2)平安時代末期～鎌倉時代初期	54
3. S D30・31出土の土器	54
(1)S D30出土遺物	55
(2)S D31出土遺物	55
4. 「井於」と記された墨書土器	56
5. 包含層出土遺物	58

表 目 次

第1表 6工区遺跡一覧	2	第10表 出土遺物観察表4	63
第2表 周辺遺跡一覧1	6	第11表 出土遺物観察表5	64
第3表 周辺遺跡一覧2	7	第12表 出土遺物観察表6	65
第4表 掘立柱建物一覧	53	第13表 出土遺物観察表7	66
第5表 墨書土器一覧	57	第14表 出土遺物観察表8	67
第6表 器種別遺物数量	58	第15表 出土遺物観察表9	68
第7表 出土遺物観察表1	60	第16表 出土遺物観察表10	69
第8表 出土遺物観察表2	61	第17表 出土遺物観察表11	70
第9表 出土遺物観察表3	62	第18表 中勢道路内(8工区)遺跡概況	71

挿図目次

第1図	地区割り図	3	第30図	S A 26～29実測図	29
第2図	6 工区内遺跡位置図	3	第31図	SD30・31実測図・土層断面図 SD31遺物出土状況図	30
第3図	遺跡位置図	5	第32図	S D 30出土遺物実測図 1	32
第4図	遺跡周辺地形図	8	第33図	S D 30出土遺物実測図 2	33
第5図	調査区位置図	9	第34図	S D 30出土遺物実測図 3	34
第6図	遺構配置図	13～14	第35図	S D 31出土遺物実測図 1	36
第7図	A地区南側西セクション土層断面図	15	第36図	S D 31出土遺物実測図 2	37
第8図	A地区南側東セクション土層断面図	15	第37図	S D 31出土遺物実測図 3	38
第9図	A地区南東壁土層断面図 1	16	第38図	S D 31出土遺物実測図 4	40
第10図	A地区南東壁土層断面図 2	17	第39図	S D 31出土遺物実測図 5	41
第11図	B地区南東壁土層断面図	17	第40図	S D 31出土遺物実測図 6	42
第12図	S B 1 実測図、出土遺物実測図	18	第41図	SD32・33実測図、SD32出土遺物実測図	43
第13図	S B 2 実測図	18	第42図	S D 33出土遺物実測図	44
第14図	S B 3 実測図、出土遺物実測図	19	第43図	S D 34実測図、出土遺物実測図	45
第15図	S B 4 実測図	19	第44図	S D 35実測図、出土遺物実測図	46
第16図	S B 5 実測図	20	第45図	S K 36実測図、土層断面図 出土遺物実測図	46
第17図	S B 6 実測図	20	第46図	包含層出土遺物実測図 1	48
第18図	S B 7・8 実測図、出土遺物実測図	20	第47図	包含層出土遺物実測図 2	49
第19図	S B 9・10 実測図、出土遺物実測図	21	第48図	掘立柱建物棟方向 1	51
第20図	S B 11 実測図、出土遺物実測図	22	第49図	時代別掘立柱建物配置図	52
第21図	S B 12 実測図	23	第50図	掘立柱建物棟方向 2	54
第22図	S B 13 実測図	23	第51図	包含層遺物数量分布	59
第23図	S B 14 実測図	24	第52図	8 工区遺跡位置図	71
第24図	S B 15 実測図	24	第53図	六太 A 遺跡試掘坑位置図	71
第25図	S B 16 実測図	25	第54図	川崎遺跡・天塚古墳試掘坑位置図	72
第26図	S B 17 実測図	25	第55図	内垣内・山王・丸市遺跡試掘坑位置図	72
第27図	S B 18～20・S B 21 実測図	26			
第28図	SB22・SA23実測図、出土遺物実測図	28			
第29図	S A 24・25 実測図	28			

写真図版目次

P L 1	調査前風景		調査区全景	
P L 2	調査区遠景		B地区全景、S A 23～25	
P L 3	A地区全景		S B 2	
P L 4	S B 1		S B 4・5	
P L 5	S B 3		S B 7・8、S D 32・33	
P L 6	S B 6、S D 35		S B 12・14	
P L 7	S B 9～11・13・15		S B 17・18・20	
P L 8	S B 16・17・21		S B 21	
P L 9	S B 18・19		S D 30・34	
P L 10	S B 22、S K 36		8年度調査区全景	
P L 11	S D 31、S A 26～29			
P L 12	出土遺物 1			
P L 13	出土遺物 2			
P L 14	出土遺物 3			
P L 15	出土遺物 4			
P L 16	出土遺物 5			

I 前 言

1. 概要と調査経緯

中勢道路は鈴鹿市西玉垣町から一志郡三雲町に至る延長33.8kmの一般国道23号中勢バイパスの一環である。鈴鹿市、河芸町、津、久居市、麩野町、三雲町を通り、国道23号の交通集中の緩和とバイパス周辺の適切な土地利用の誘導を図り、中勢地域の経済発展に寄与することを目的に計画されたものである。

この計画地内の埋蔵文化財発掘調査については、昭和58年度に計画路線内の分布調査を行った。その結果をもとに、建設省中部地方建設局と三重県教育委員会が、埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い現状保存が困難な遺跡は事前に発掘調査を実施し記録保存を図ることとなった。

調査主体は三重県教育委員会、調査は三重県埋蔵文化財センターが担当している。また現地作業は、調査の円滑を期して建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に委託している。

事業の実施にあたっては、建設省中部地方建設局・三重県・中部建設協会の三者で昭和63年4月8日付けで「協定書」を締結し、事業を推進している。

平成3年までの調査は、工事計画に沿って9工区（津市）を優先させて実施してきたが、同年度には鈴鹿市内6工区の工事計画が明らかにされたため、これを契機に中勢バイパス全線の埋蔵文化財の現地確認調査を実施した。この結果に基づき、鈴鹿6工区を中勢道路埋蔵文化財発掘調査事業の対象地域に組み入れた「変更協定（第1回）」を、平成3年10月31日付けで締結した。その後、工事計画の進展に合わせて、平成5年9月7日付けで、「変更協定（第2回）」を締結し調査計画と道路建設事業との調整を図った。

高井A遺跡にかかる中勢道路予定地内の範囲確認調査は、平成4年度と平成7年度の2度にわたって行われた。設定した10カ所のグリットのうち8カ所で遺構が確認され、全てのグリットで遺物が認められた。出土遺物から、高井A遺跡は平安～鎌倉時代を中心とする遺跡であると考えられ、4,700㎡を調

査対象面積とした。その内、4,100㎡については平成7年度の調査、調査区内の市道部分については道路の使用状況から平成8年度の調査になることを余儀なくされた。

第1次調査は、平成7年9月5日～平成8年3月6日に行われ、掘立柱建物・溝・土坑等が検出された。その出土遺物から奈良時代後期～平安時代後期を中心とする集落であることが明らかとなった。

第2次調査は、残りの市道部分について平成8年5月13日に開始され、前回検出された溝の延長が確認された。遺構検出は前回の調査から予測できたことや、天候にも恵まれたことで順調に進み5月23日に終了した。最終の調査面積は、第1次調査区4,100㎡、第2次調査区450㎡で、合計4,550㎡であった。

2. 発掘調査の概要

高井A遺跡は布芸層群（第三紀層）からなる丘陵東端裾部に位置する。標高12m前後である。

調査は平成4年7月1日から7月8日にかけて、予備調査を行い、本調査は平成7年9月5日より開始した。予備調査では、緑釉陶器、灰釉陶器や山茶碗が出土し、遺構としてはピット、土坑が検出され奈良時代と平安時代から鎌倉時代を中心とする集落遺跡であると想定された。

調査区は市道によってふたつの地区に分けられる。東側をA地区、西側をB地区と呼称する。

細長い形の調査区であるA地区は高低差があり、上・中・下の3段に分けられる。調査区上段（A地区の東約1/3）では掘立柱建物と流路が、中段（A地区の中央約1/3上段との比高差2m以下）では掘立柱建物群と流路が検出された。流路は上段と中段の掘立柱建物を区画するように検出され2条とも、飛鳥時代から平安時代を中心とした遺物が確認され建物の時期と合致すると想定されよう。また、下段（A地区の西約1/3上段との比高差2m以上）でも掘立柱建物群が検出された。

出土遺物には、墨書土器（「井於」とほぼ共通し

た文字が見られる須恵器・蓋杯)をはじめ、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、土師器等が出土している。石製品には、砥石があり、柱穴からは柱瓦も出土している。

3. 調査の方法

(1) 現地調査の方法

地区設定 (大地区設定と小地区設定)

調査区の設定は国土地標に従い、100m区画の正方形を設定して大地区とし、さらにその内部を縦横それぞれ25等分して4mの方眼区画を設定し小地区とした。それぞれの表示は、大地区は各区画にアルファベットを与え、小地区は北西隅を表示の始点とし、南北を北からA～Yのアルファベットを、東西を西から1～25のアラビア数字を与え、ふたつの組み合わせで表した。さらに大地区の名称と組み合わせを示した。

遺構カードの作成

遺構の検出状況を記録するため小地区毎に1/40の略測図を作成した。記録のポイントは遺構の切り合い関係と埋土の種類・状況である。

実測図の作成

遺物の出土状況図は、各遺構毎に任意に基準点を設定して作成した。遺構埋土の土層図も、同様である。調査区外壁の土層図は各壁面毎の基準点(0m点)を設定して作成した。

各遺構の完掘状況・調査区内の地形測量は原則として空中写真測量で行ったが、第2次調査では調査面積も少なく、遺構密度も低かったため平板測量で行った。

写真撮影

遺構検出状況・遺構完掘状況・遺物出土状況・土

層堆積状況・作業風景はカラーリバーサル、モノクロネガ、カラーネガで共に撮影した。

通常の撮影は35mm判で行ったが、重要遺構の遺物出土状況・完掘状況・調査区全景等には35mm判のほかには6×9cm判や4×5インチ判も用いて、カラーリバーサル・モノクロネガ共に撮影した。

またこれ以外にも、現地説明会では35mmコンパクトカメラ(カラーネガ)や8mmビデオカメラを用いて状況の記録に努めた。

(2) 資料整理の方法

出土遺物

洗浄・注記の後、全体を遺構出土遺物とその他のもの(表採・遺物包含層等)に大別し、遺構出土遺物は各遺構毎に分類した。そしてそれぞれから実測可能な遺物をピックアップし、遺構出土遺物は各遺構毎に且つ遺物の種類別に、その他のものは遺物の種類別に、用紙を分けて実測した。実測済の遺物は実測図の登録番号順に遺構単位で整理・保管したが本書に実測図を掲載した遺物は、各遺構毎にまとめて遺物番号順に整理・保管し、報告書掲載の実測図との照合を容易にしている。

実測図

遺構実測図・遺物実測図共に、各遺構毎に分類した後全体に通し番号を付して整理・保管している。

写真

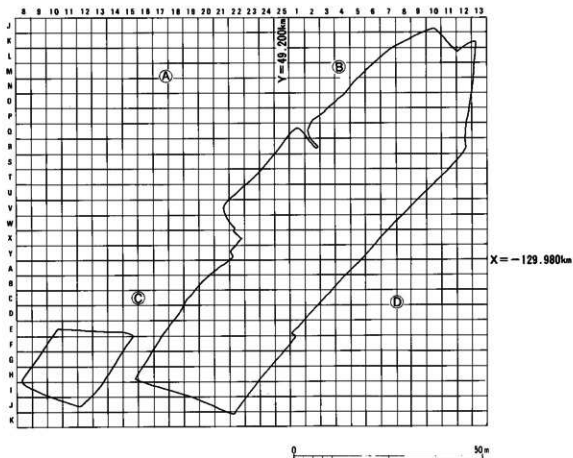
フィルムの種類毎、撮影順にファイルして保管している。またモノクロネガ・カラーネガには検索用としてベタ焼きを添付してファイルしている。

拓本

対応する遺物実測図に貼り付けて保管している。本書の図版作成にはコピーを用いた。

工区	遺跡名	調査対象面積(㎡)		調 査 年 度										
		範囲確認調査	本調査	昭和63	平成1	2	3	4	5	6	7	8	9	
		6	稲生遺跡	185	2,100				範	2,100				
6	7	南谷遺跡	176	1,300				範	1,300					
工区	8	間瀬口遺跡	96						範					
	9	拝原遺跡	64						範					
	10	高井A遺跡	96	4,550					範		4,100	450		
範囲確認調査		617					361	256						
本調査合計			7,950					3,400		4,100	450			

第1表 6工区遺跡一覧



第1図 地区割り図 (1:1,000) (A~Dは大地区名)



第2図 6工区内遺跡位置図 (1:50,000) (国土地理院1:25,000白子・鈴鹿)

II 位置と環境

〔地理的環境〕

三重県は南北に長く、風土的に北勢、中勢、南勢と呼称される。鈴鹿市は北勢地方の南部にあたり、東は伊勢湾に臨み、西は鈴鹿山脈の主稜に達する。市内の中央を1級河川鈴鹿川が、南側を2級河川中ノ川が東流して伊勢湾へと注ぎ、それぞれの流域には平野が開けている。

両河川は鈴鹿市国府の台地から続く丘陵を挟んで流域を分け平野を作っている。その丘陵の東端である鈴鹿市玉垣町付近では、伊勢湾を臨んで南北の平野がひとつに繋がっている。

今回報告する高井A遺跡は、鈴鹿山脈錫丈ヶ岳を源とする中ノ川が開拆した沖積地を南に臨む南部丘陵地（鈴鹿市国分町の愛宕山から南方へ、長法寺町・御園町に続く丘陵）の南端裾部にあたる。調査区は標高7m～13mの地点に位置する。地質的には、鮮新世第三紀の奄芸層群と呼ばれる層によって形成されている。行政上は鈴鹿市徳田町字高井に所在する。

〔歴史的環境〕

鈴鹿市は伊勢国の中心として栄えたところで、伊勢国府跡、国分寺跡、長者屋敷遺跡（初期国府跡）等の所在が確認されている。今回報告する高井A遺跡は、奈良時代後期～平安時代後期を中心とする集落遺跡である。

旧石器時代

中ノ川流域での人間活動の痕跡は、旧石器時代末まで遡る。しかし、遺物はいずれも表面採集であるため、石器の包含地層、使用した石器の組成等の詳細は不明である。遺跡は沖積平野を見おろす丘陵上や微高地に位置している。稲生町北方から野町付近の台地は、市内の他地域に比べ最も遺跡が密に分布している。蔽川山遺跡（3）では、ナイフ形石器や掻器等が出土している。今村遺跡（4）、北野遺跡（5）、山脇遺跡（6）でもナイフ形石器、掻器、縦長剥片が出土しており、この地に小規模ではある

ものの、集団の存在が想定できる。

縄文時代

縄文時代では、中ノ川右岸の南側丘陵台地上に所在する追谷縄文遺跡（7）がある。出土遺物には、前期の爪形土器、中・後期と思われる土器が少量と石器、並びに、その剥片が多量に出土している。郡山遺跡群では、西川遺跡（8）で中期末～後期初頭の堅穴住居2基が、末野A遺跡で堅穴住居1棟が確認されている。

弥生時代

前期弥生文化の伝播経路は、大和から雲出川流域の権現前遺跡、中ノ庄遺跡をへて、北上して上箕田遺跡の大集落を形成した。市内における稲作文化の伝播はこの上箕田遺跡を起点とするが、中ノ川流域で確認できる遺跡は、現在のところ、中期後半に入ってからである。北岸では、亀山市に近い長法寺から稲生付近にかけて土器が出土しており、高井B遺跡（2）では、弥生時代中期～後期の土坑3基が確認されている。南谷遺跡（9）でも弥生時代後期の堅穴住居2棟、土坑、溝等が見つかっている。さらに海浜部にほど近い磯山黒山遺跡（10）では、銅鐸が出土しており、周辺部に大規模な集落が存在したことが予測される。南岸では、郡山東遺跡（11）、染野遺跡（12）等があり畑遺跡（13）では、後期弥生土器が多数出土した。また郡山東遺跡（11）、松山遺跡（14）の方形周溝基は、階層分化の政治構造を具体的に示す貴重な資料である。

古墳時代

古墳時代前中期における中ノ川流域には、三角縁神獣鏡を出土した赤郷古墳（15）、粘土槨を内部主体とした経塚古墳（16）等首長の系譜が迎れるが、伊勢を代表する古墳集中地帯である鈴鹿川の流域の影響下にあり、首長基が発生する程度の地域勢力でしかなかったようである。

ところが、古墳時代後期になると、有力な遺跡の出現や、前代に比べて飛躍的な発展が見られるようになる。首長墓クラスでは、西高山1号墳（17）、同2号墳（18）と勢力的には変わらないものの、群集墳



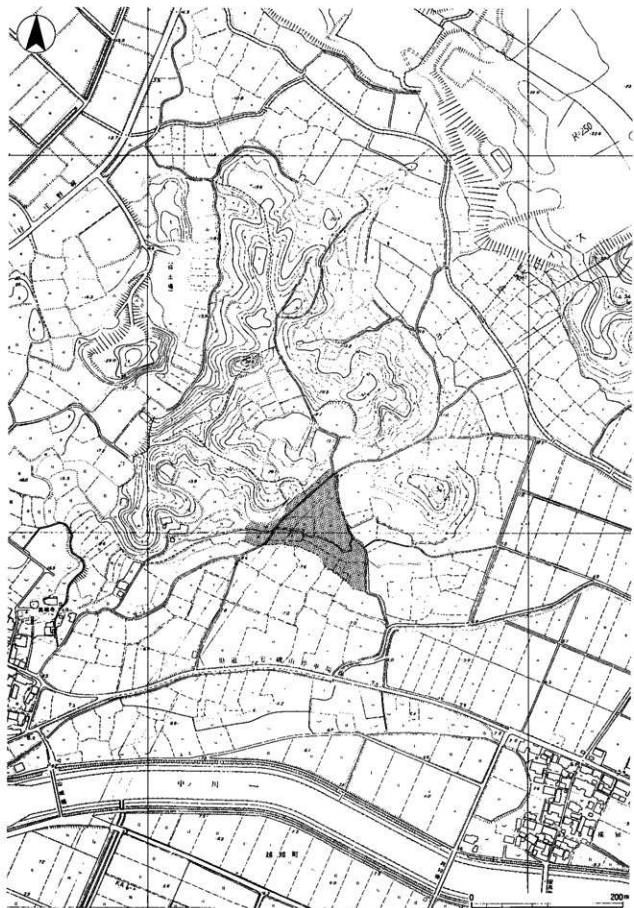
第3図 遺跡位置図 (1:50,000) (国土地理院1:25,000白子・鈴鹿)

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	備考
1	高井A遺跡	徳田町 高井	遺物包含地	弥生～鎌倉	
2	高井B遺跡	徳田町 高井	遺物包含地	古墳・鎌倉	
3	蹴山川遺跡	野町 蹴山	遺物包含地	先土器～縄文	
4	今村A遺跡	福生町 今村	遺物包含地	先土器～縄文	
5	北野遺跡	野町 北野	遺物包含地	先土器	
6	山越遺跡	福生町 山越	遺物包含地	先土器～縄文	
7	追谷縄文遺跡	郡山町 追谷	遺物包含地	縄文	『跡産市史』1巻
8	西川遺跡	郡山町 西川	遺物包含地	弥生～奈良	『郡山遺跡群発掘調査報告1』
9	南谷遺跡	郡山町 南川	遺物包含地	弥生	
10	磯山(黒丸)遺跡	磯山町 黒丸	銅器出土地	弥生	『三重考古図録』
11	郡山東遺跡	郡山町 塚越	遺物包含地	弥生～鎌倉	昭和55年発掘調査
12	染野遺跡	郡山町 染野	遺物包含地	弥生～室町	
13	畑遺跡	徳田町 畑丸尾谷	遺物包含地	弥生～古墳	昭和44年発掘調査 『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』
14	松山遺跡	郡山町 松山	遺物包含地	古墳・鎌倉	『郡山遺跡群発掘調査報告1』昭和50年
15	赤郷1号2号古墳	秋永町 赤郷	古墳	古墳	
16	経塚古墳	中瀬古町 松山	古墳	古墳	昭和41年発掘調査 『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』
17	西高山1号墳	郡山町 西高山	古墳	古墳	『郡山遺跡群発掘調査報告1』
18	西高山2号墳	郡山町 西高山	古墳	古墳	『郡山遺跡群発掘調査報告1』昭和50年
19	福生遺跡	福生町 福生山		古墳	
20	伊奈宮遺跡	福生町 楠本	遺物包含地	古墳	『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』
21	徳居1号窯	徳居町 玉野	古窯跡	古墳	
22	徳居2号窯	徳居町 玉野	古窯跡	古墳	
23	徳居3号窯	徳居町 玉野	古窯跡	古墳	
24	徳居4号窯	徳居町 玉野	古窯跡	古墳	
25	徳居5号窯	徳居町 玉野	古窯跡	古墳	
26	徳居6号窯	徳居町 壘	古窯跡	古墳	
27	徳居7号窯	郡山町 金井場1654-16	古窯跡	古墳	金井場窯跡
28	徳居8号窯	徳居町 大板1899-11	古窯跡	古墳	
29	徳居9号窯	徳居町	古窯跡	古墳	
30	徳居10号窯	徳居町	古窯跡	古墳	
31	徳居11号窯	徳居町	古窯跡	古墳	
32	徳居12号窯	徳居町	古窯跡	古墳	
33	徳居13号窯	徳居町	古窯跡	古墳	
34	徳居14号窯	徳居町	古窯跡	古墳	
35	徳居15号窯	徳居町	古窯跡	古墳	
36	徳居16号窯	徳居町 井垣	古窯跡	古墳	
37	徳居17号窯	徳居町 奥丹梅2426-7	古窯跡	古墳	
38	徳居18号窯	徳居町 奥丹梅2426-2	古窯跡	古墳	
39	徳居19号窯	徳居町 相越2375-4	古窯跡	古墳	
40	徳居20号窯	徳居町 相越2375	古窯跡	古墳	
41	徳居21号窯	徳居町 相越2375	古窯跡	古墳	
42	徳居22号窯	三宅町 大小3523	古窯跡	古墳	
43	徳居23号窯	三宅町 大小3523	古窯跡	古墳	
44	徳居24号窯	三宅町 馬渡	古窯跡	古墳	
45	徳居25号窯	三宅町 流3614	古窯跡	古墳	
46	徳居26号窯	三宅町 流3614	古窯跡	古墳	
47	徳居27号窯	三宅町 京北	古窯跡	古墳	
48	徳居28号窯	三宅町 京北	古窯跡	古墳	
49	徳居29号窯	三宅町 京北	古窯跡	古墳	

第2表 周辺遺跡一覧1

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	備考
50	徳居32号竪	郡山町 西高山	古竪跡	古墳	昭和56年発掘調査
51	徳居33号竪	郡山町	古竪跡	古墳	
52	徳居34号竪	郡山町	古竪跡	古墳	
53	稲生1～3号古竪	稲生町 稲生山	古竪跡	古墳	1・2号竪跡→昭和36年発掘調査 4号竪跡→「鈴鹿市史」1巻
54	茶臼山古墳群	中瀬古町 茶臼山198	古墳	古墳	
55	郡山大野古墳群	郡山町 大野	古墳	古墳	
56	北山古墳群	稲生町 折戸	古墳	古墳	「国鉄伊勢線関係遺跡調査報告」(1号墳)
57	郡山遺跡群				
	末野A・B・C遺跡	郡山町 末野	遺物包含地	A・C)古墳・鎌倉 B)古墳～鎌倉	B・C)「郡山遺跡群発掘調査報告Ⅰ」
	西高山ABC遺跡	郡山町 西高山	遺物包含地		B)一部跡地保存
58	国府推定地	国府町			
59	山ノ腰A遺跡	徳田町 山ノ腰	遺物包含地	弥生～鎌倉	
60	桜狭間遺跡	御園町 桜狭間	遺物包含地	弥生～鎌倉	
61	郡山西遺跡	郡山町 坂の山、宮西	遺物包含地	弥生～室町	
62	宮西遺跡	郡山町 宮西	遺物包含地	弥生～室町	
63	間瀬口遺跡	木田町 間瀬口、高畑、中道	遺物包含地	古墳・ 平安～安土	
64	伊奈富神社遺跡	稲生町 橋本	遺物包含地	古墳～鎌倉	
65	山ノ腰B遺跡	徳田町 山ノ腰	遺物包含地	古墳～奈良	
66	大塚山古墳	御園町	古墳	古墳	所在地不明
67	愛宕山古墳	国府町 西之城戸	古墳	古墳	『ふびと』32
68	権現山古墳群	御園町 権現山	古墳	古墳	所在地不明
69	稲生東遺跡	稲生町 河内浦～中村	遺物包含地	古墳～鎌倉	「稲生東遺跡発掘調査報告Ⅰ」1975
70	御園遺跡	御園町 川原塚内	遺物包含地	古墳～鎌倉	昭和59年発掘調査
71	長畑遺跡	御園町 長畑	遺物包含地	古墳～鎌倉	
72	長広B遺跡	御園町 長広	遺物包含地	古墳～鎌倉	
73	摩羅遺跡	長法寺町 摩羅	遺物包含地	古墳・鎌倉	
74	桑名塚内遺跡	長法寺町 桑名塚内	遺物包含地	古墳・鎌倉	
75	西塚内遺跡	長法寺町 西塚内	遺物包含地	古墳・鎌倉	
76	寺門遺跡	三宅町 寺門	遺物包含地	古墳～鎌倉	
77	門田遺跡	徳居町 門田	遺物包含地	古墳・鎌倉	
78	東代A遺跡	徳居町 東代	遺物包含地	古墳・鎌倉	
79	東代B遺跡	徳居町 東代	遺物包含地	古墳・鎌倉	
80	奥玉野A遺跡	徳居町 奥玉野	遺物包含地	古墳～鎌倉	
81	奥玉野B遺跡	徳居町 奥玉野	遺物包含地	古墳～鎌倉	
82	岡B遺跡	徳居町 岡	遺物包含地	古墳～鎌倉	
83	船ヶ谷A遺跡	越知町 船ヶ谷、西ノ谷	遺物包含地	古墳～鎌倉	
84	船ヶ谷B遺跡	越知町 船ヶ谷	遺物包含地	古墳～鎌倉	
85	山越知南遺跡	郡山町 西堀、谷端	遺物包含地	古墳～鎌倉	
86	西川西遺跡	郡山町 西川	遺物包含地	古墳～鎌倉	
87	別所遺跡	三宅町 別所	遺物包含地	古墳～室町	
88	口玉野A遺跡	徳居町 口玉野	遺物包含地	古墳～室町	
89	口玉野B遺跡	徳居町 口玉野	遺物包含地	古墳～室町	
90	千里ヶ丘遺跡			奈良～鎌倉	
91	橋門B遺跡	三宅町 橋門	遺物包含地	平安～鎌倉	昭和61年発掘調査
92	橋門C遺跡	三宅町 橋門	遺物包含地	平安～鎌倉	
93	長法寺遺跡	長法寺町 権現	遺物包含地	平安～鎌倉	
94	長法寺城跡	長法寺町 古里	城跡	室町	「神戸地方平原郷土史」『鈴鹿市史』1巻
95	三宅城跡	三宅町 志此	城跡	室町	「神戸地方平原郷土史」『鈴鹿市史』1巻

第3表 周辺遺跡一覧2



第4図 遺跡周辺地形図 (1:5,000)

や中小古墳は非常に充実するようになる。集落についても、稲生遺跡(19)や伊奈富遺跡(20)は、この時期に活発な集落形成を開始する。また、郡山遺跡群のように前代からある集落の拡大・再編がみられるようになる。こうした古墳時代後期以降の当地域の発展には、中ノ川左岸では須恵器の埴輪窯で知られる稲生山窯址群(53)、右岸では累下最大級の徳居古窯址群(21)～(52)で須恵器生産の操業開始が密接に係わっていると考えられる。県内でも、北勢の員弁川流域や海蔵川流域、南勢の外城田川流域等にも古窯址群は存在するが、中ノ川流域ほど多数集中する地域は見当たらない。この地域は古墳時代須恵器生産の一大中心地であったといえる。当然ながら集落の増大は共同体での有力農民層の数を増加させることになり茶臼山古墳群(54)、郡山大野古墳群(55)、北野古墳群(56)等のような群集墳を発生させたのである。また、群集墳は郡山遺跡群(57)を囲むように位置しており、同遺跡群がこの地域の中心的位置を占めていたことも窺える。

このように集落と古墳群・窯業生産とが深く結びつき、一つの古代社会を形成していることが、この

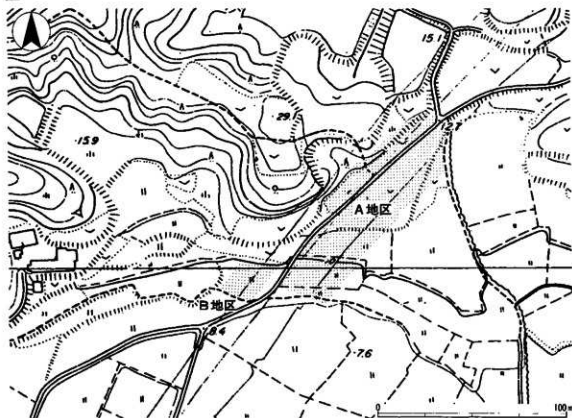
流域の大きな特徴である。こうした特徴が「郡山」という地名が示すように律令社会において奄芸郡衙成立の大きな要因ともなっていくと考えられよう。

奈良・平安時代

鈴鹿川や中ノ川流域の丘陵、台地に壮大な古墳を築造したこの地方豪族らは、大和朝廷の支配下にあっても、多くの土地、人民を私有していた。しかし大化の改新以後、律令制度の下に中央政府の支配下に置かれることになる。

伊勢国府は、地名により鈴鹿市国府町付近(58)とし、同町内に方八町の国府城が推定されている。また、長者屋敷遺跡は鈴鹿の関に伴う軍団跡と想定されていたが、1991年には、鈴鹿市教育委員会によって同遺跡の発掘調査が始められ、土壌の高まりが版築によってできている建物基壇であることがわかり、それらの形態から初期国府政庁の建物であることが確実となった。

鈴鹿市域に相当する伊勢国は鈴鹿・河曲・奄芸の三郡にわたるが、中ノ川流域は奄芸郡の北部に属する。右岸台地上の郡山は、奄芸郡衙の所在地として有力視されており、その南方一帯には古墳群も多く、



第5図 調査区位置図 (1:2,000)

郡山遺跡群もその一角にある。郡山遺跡群内の末野B・C遺跡では、飛鳥・奈良時代～平安・鎌倉時代に至る建物が合わせて144棟ちかく見ついている。また、同遺跡群内の西川遺跡は、縄文時代に開発され、途中大きな歴史的空間を置いて律令制度の整備に伴って再び、盛時を迎える。特に菟芸郡衙推定地から1km以内に位置し、郡山遺跡群の集落と同様に早くから律令体制の村落の中に組み入れられたと考えられる。

菟芸郡衙について、現在は地名の点から郡山説が有力である。また、郡山集落の東西を限る道路が、北方沖積平野の糸里線と同一方向であることに注目し概ね方三町の郡衙跡を想定し、さらに集落中央北の酒井神社境内約一町を郡衙域とする説もある。また、当社所蔵の文献に、保延五年（1139）栗真庄の

田三反を郡山新宮に寄進するとあり、荘園社会の一端を垣間見ることができる。

中世

こうした中ノ川流域の発展の様子は、菟芸郡の式内社13座のうち7座が市内のこの流域にあることや、稲生町に所在する伊奈富神社の社格にも表れている。伊奈富神社は菟芸郡の式内社の首位に列し、権大神社とともに「国史見在社」であり、『三代実録』貞観7年（865）には、従四位下を授けられている。また神仏習合思想による神宮寺もおそらく8・9世紀ごろには建てられていたらしく、弘法大師のゆかりのある「菩薩堂」、古式庭園としての「七島の池」等が境内にはある。

いずれにしても、この流域の歴史を窺い知る資料である。

（註）

- ① 『鈴鹿市史』第1巻 鈴鹿市 1980年
- ② ①に同じ
- ③ 中森成行『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅰ』鈴鹿市教育委員会 鈴鹿市遺跡調査会 1983年
- ④ 中森成行「Ⅴ 西川遺跡の調査」『郡山遺跡群Ⅰ』鈴鹿市教育委員会 鈴鹿市遺跡調査会 1983年
- ⑤ 小曾文浩「Ⅲ. 南谷遺跡」「南谷遺跡・稲生遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター 1995年
- ⑥ ⑤に同じ
- ⑦ 『第3回鈴鹿市埋蔵文化財展 中ノ川流域の考古学』鈴鹿市教育委員会 1993年
- ⑧ ⑤に同じ
- ⑨ 伊藤克幸『稲生東遺跡発掘調査報告』鈴鹿市教育委員会 鈴鹿市遺跡調査会 1975年
- ⑩ ③に同じ
- ⑪ ①に同じ
- ⑫ 真田幸成「第5章 蘇原古墳」『国史伊勢関係遺跡発掘調査報告』鈴鹿市教育委員会 1966年
- ⑬ ③に同じ
- ⑭ 小玉道明「第3章 伊奈富遺跡」『国史伊勢関係遺跡発掘調査報告』鈴鹿市教育委員会 1966年
- ⑮ ①に同じ
- ⑯⑰ ③に同じ

Ⅲ 発掘された遺構と遺物

1. 基本層序と遺構検出面

遺跡は丘陵裾部に存在し、後世の農地造成による削平や盛土が著しく、既に遺構検出面が露出している調査区や、遺構検出面に至るまでかなり厚い堆積土がある調査区等、全体で一定した層序は存在しない。そこで調査区とその地形も含めて、北から土壌の堆積状況を以下に記述し、層序全体を大きく捉えたい。なお、色調の注記は掘削後暫く時間を経たものである。

調査区は南北に細長く、現況は階段状の畑及び水田である。なお、南端では市道に分割されているため、ここでは、東側の調査区をA地区、西側をB地区と呼称する。A地区北部の東壁面の土層を観察すると暗茶褐色土（耕作土）・褐灰色シルト・暗黄褐色粘質シルト・褐灰色砂質土・灰褐色砂質土・淡黄色シルト（地山）と斜面からの流入による堆積と考えられる層が確認できるが、実際は削平、土取りが著しい所もあり、表土直下で遺構が検出された。

最も掘立柱建物に集中した中央付近では、暗褐色シルト・褐灰色シルト・暗灰色シルト（遺物包含層）・淡黄色粘質土（地山）といった土が堆積している。表土から遺構検出面までは60cm～80cmである。

これら一連の堆積層は階段状の農地造成によってかなりの盛土や削平を受けており各層の堆積状況は断続的にしか違うことができない。

調査区南部では、耕作土とそれに伴う盛土の下に北斜面から繰り返し流入した土が堆積し、表土から検出面までは平均で2m～3m、最深4mにも及ぶ所もあった。東壁面の観察では、攪乱土・青灰色粘質土（床土）・褐灰色シルト（旧耕作土）・暗褐色シルト・暗茶褐色粘質シルト（遺物包含層）・黒青色粘質土（遺物包含層）・暗緑黄色シルト（地山）といった土が堆積している。南端部の一部では、2時期にわたる検出面が確認された。東壁面の観察では、第29層（暗茶褐色粘質シルト）・第30層（黒青粘質土）上面で検出された。これは、前述の通り北斜面から流入した土壌が地形に沿って厚く堆積した

ためと、遺物包含層は基本的には、さらに上位部から流出してきたものと思われる。

2. 遺構と遺物

検出された遺構は、複数時期にわたるとみられる遺構も存在するので、ここでは遺構を遺物と共に各種類毎に記述し、時期別の遺構の状況については結語で総括的に記述する。また、出土遺物についての記述は形態の特徴及び成形技法に重点を置き、分量・調整技法などについては遺物観察表にまとめた。

なお、検出された主な遺構は掘立柱建物22棟（建て替え等未考慮）、柱列7条、土坑1基、溝6条（自然流路を含む）等である。

(1) 掘立柱建物

S B 1 A地区の上段付近で検出された掘立柱建物である。桁行4間以上(7.8m)×梁行2間(4.2m)の南北棟である。棟方向は、N27°Wに振れるようである。側柱のみで構成される。柱間は、西妻側が2.0+1.9+2.1m、東妻側が2.1+1.8+1.8+2.1m、梁行は2.1mの等間である。

柱掘形のプランは、重複で形の崩れたものもあるが、基本的には円形(約30～70cm)である。一部柱根が残るピットもある。

柱穴からの出土遺物には、土師器、製塩土器等の細片や、須恵器長頸瓶(1)がある。

S B 2 A地区の中央付近で検出された掘立柱建物である。桁行4間(8.7m)×梁行2間(4.2m)の東西棟である。棟方向はE4°Nに振れるようである。柱間は桁行が東から1.8+2.1+2.4+2.4m、梁行は北から2.1+2.4mである。側柱のみで構成される。

柱掘形のプランは、重複で形の崩れたものもあるが隅丸方形(約50×60cm)と円形(約50cm～60cm)である。

柱穴からの出土遺物は土師器、須恵器杯蓋の口縁部等の小片で、図示できる遺物はない。

S B 3 A地区の中段付近で検出された掘立柱建物である。桁行5間(8.4m)×梁行2間(4.2m)の東西棟である。棟方向は、E13°Nに振れるようである。

側柱のみで構成される。柱間は桁行・梁行ともに2.1mの等間である。

柱掘形のプランは円形(約30~40cm)である。

柱穴からの出土遺物には土鍾(2)、土師器、須恵器・杯身等の細片がある。

SB4 A地区の下段の東端付近で検出された掘立柱建物である。桁行4間(7.2m)×梁行2間(4.2m)の南北棟である。棟方向はN10°Eに振れるようである。側柱のみで構成される。柱間は桁行が1.8m、梁行は2.1mの等間である。

柱掘形のプランは円形(約40cm)である。ほとんどの柱穴で柱根が残っている。

柱穴からの出土遺物は土師器製の口縁部、須恵器杯の細片で、図示できる遺物はない。

SB5 A地区の下段の東端付近で検出された掘立柱建物である。桁行2間(3.9m)×梁行2間(3.6m)の東西棟である。棟方向は、E10°Nに振れるようである。柱間は桁行が東から1.8+2.1m、梁行は南から1.5+1.8mである。

柱掘形のプランは円形(約30~50cm)である。柱穴からは土師器の細片が出土しているが図示できる遺物はない。

SB6 A地区の下段付近で検出された掘立柱建物である。桁行2間(3.3m)×梁行2間(3.0m)の東西棟である。棟方向はE15°Nに振れるようである。柱間は桁行が1.65m、梁行は1.5mの等間である。

柱掘形のプランは円形(約20~50cm)である。

柱穴からの出土遺物は、土師器、須恵器・杯蓋の口縁部等の細片が出土しているが図示できるものはない。

SB7 A地区の下段付近で検出された。調査区南壁にかかっているため、全体のプランは確認できなかったが、南北棟と想定するならば、桁行3間(4.2m)×梁行2間(4.0m)以上の掘立柱建物である。棟方向はN15°Wに振れるようである。柱間は桁行が1.5+1.2+1.5m、梁行は東から1.9+2.1mである。

柱掘形のプランは円形(30~40cm)である。SB8、SD32と切合関係にあり、古い順にSD32、SB8、SB7となる。

柱穴には根石が残るピットがある。

出土遺物にはミガキ痕が見られる土師器小片や、

内面にかえりの有しない須恵器杯蓋(3)がある。

SB8 A地区の下段付近で検出された。調査区南壁にかかっているため、全体のプランは確認できなかったが、南北棟と想定するならば、桁行3間(3.3m)×梁行1間(4.0m)以上の掘立柱建物である。棟方向はN15°Wに振れるようである。柱間は桁行が1.8+1.5m、梁行は4.0mである。

柱掘形のプランは隅丸方形(約60×70cm)と円形(約80cm)がある。SB7、SD32と切合関係にある。

柱穴からの出土遺物は土師器の破片であり、図示できる遺物はない。

SB9 A地区の中段東付近で検出された掘立柱建物である。桁行5間(10.5m)×梁行4間(8.7m)の東西棟である。棟方向はE15°Sに振れるようである。柱間は桁行が2.1mの等間、梁行は南から2.1+2.4+2.4+1.8mである。

柱掘形のプランは円形(約30~40cm)である。柱穴には、根石が残るピットもある。

出土遺物には土師器、須恵器、製塩土器、山茶碗の小片がある。灰釉陶器(4)は素地の皿である。

SB10 A地区の中段東付近で検出された掘立柱建物である。桁行6間(12.6m)×梁行3間(6.6m)の東西棟である。棟方向はE10°Sに振れるようである。柱間は桁行が西から1.8+2.4+2.4+2.4+2.1+1.5mで梁行は南から2.4+2.1+2.1mである。

柱掘形のプランは円形(20~60cm)である。

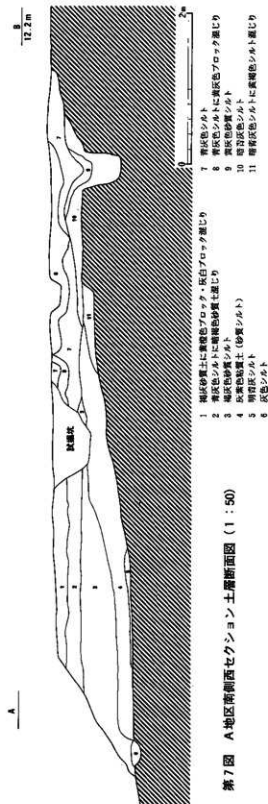
柱穴からの出土遺物には土師器皿(6)、須恵器、灰釉陶器の小片があり、緑釉陶器(5)は内面にミガキ痕、底部外面に三叉トチン痕が残る。碗、もしくは皿である。型的には猿投窯編年の井ヶ谷78号窯式~黒笹14号窯式、都城出土土師器型式編年(平安京)II-古に併行しよう。埴輪(7)は片口をもつ素焼のものである。内面には赤褐色の鉄分が付着する。

SB11 A地区の中段東付近で検出された掘立柱建物である。桁行5間(10.5m)×梁行4間(8.1m)の東西棟である。棟方向はE7°Sに振れるようである。柱間は桁行が2.1mの等間、梁行は南から2.4+1.8+1.8+2.1mである。

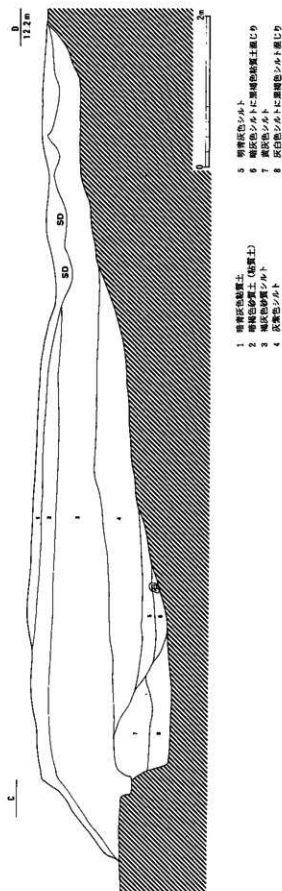
柱掘形のプランは円形(約40cm)である。



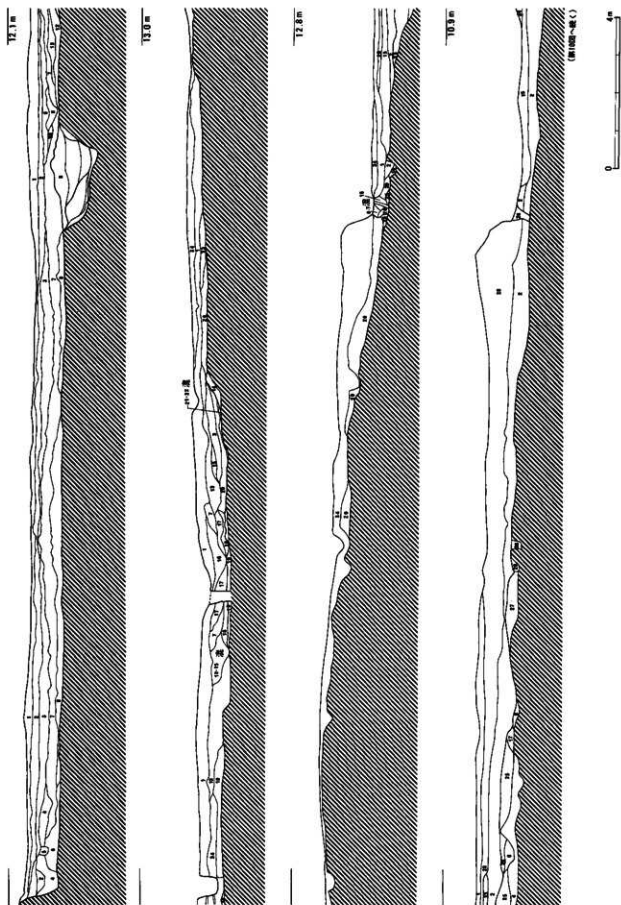
第6図 遺構配置図 (1:400)



第7図 A地区南側西セクション土層断面図（1：50）

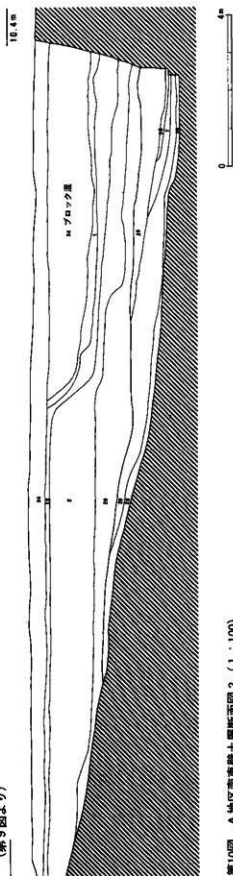


第8図 A地区南側東セクション土層断面図（1：50）

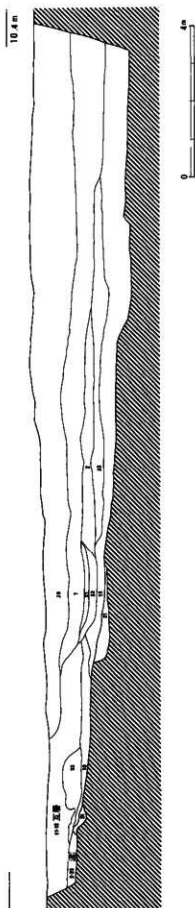


第9图 A地区南某层土層断面图 I (1 : 100)

(第9図より)



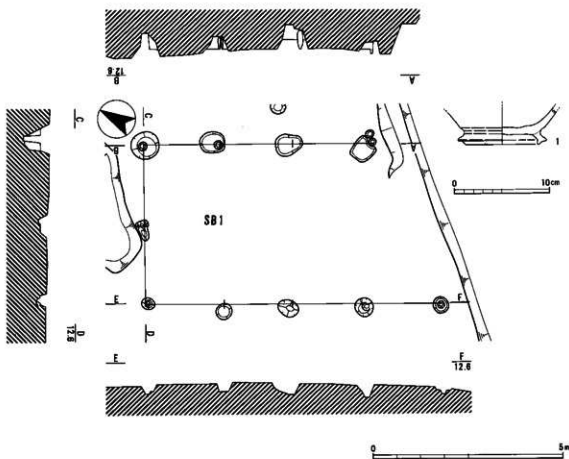
第10図 A地区南東部土層断面図2 (1:100)



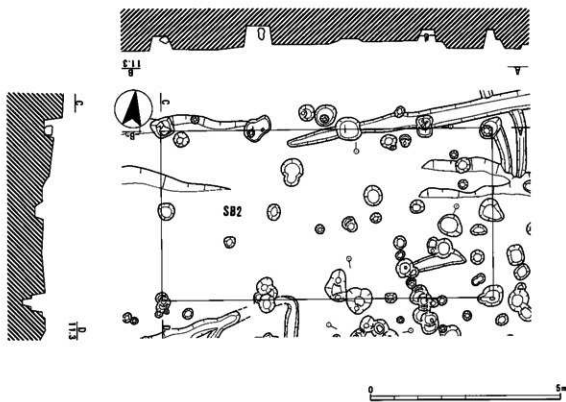
- 1 耕作土 暗赤褐色土
2 灰褐色シルト
3 暗褐色粘質シルト
4 暗褐色砂質土
5 暗赤褐色シルト
6 暗褐色砂質土
7 暗赤褐色土
8 灰褐色粘質シルト
9 暗褐色粘質シルト
10 暗褐色砂質土
11 暗褐色砂質土
12 灰褐色土
13 暗赤褐色シルト
14 暗褐色粘質土
15 暗赤褐色粘質土
16 暗赤褐色粘質シルト
17 暗赤褐色粘質シルト
18 暗赤褐色粘質土
19 暗赤褐色粘質シルト
20 暗褐色粘質土
21 暗褐色粘質土
22 灰白色粘質土
23 暗赤褐色粘質土
24 暗赤褐色粘質土
25 暗赤褐色粘質シルト
26 暗赤褐色粘質土
27 暗赤褐色粘質土
28 暗赤褐色粘質土
29 暗赤褐色粘質シルト
30 暗赤褐色粘質土
31 暗赤褐色粘質土
32 暗赤褐色粘質シルト
33 暗赤褐色粘質シルト
34 暗赤褐色粘質土

第11図 B地区南東部土層断面図 (1:100)

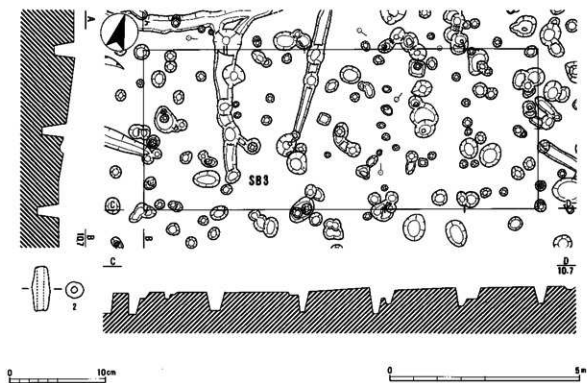
土色 (第9図～第11図共通)



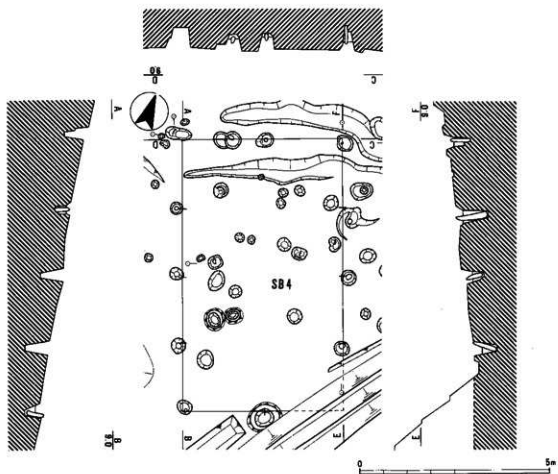
第12圖 SB 1 实測圖 (1 : 100)、出土遺物实測圖 (1 : 4)



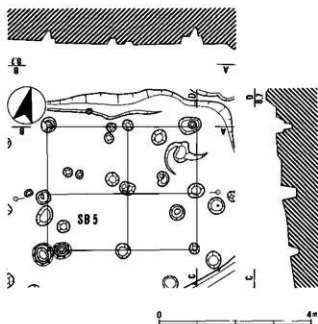
第13圖 SB 2 实測圖 (1 : 100)



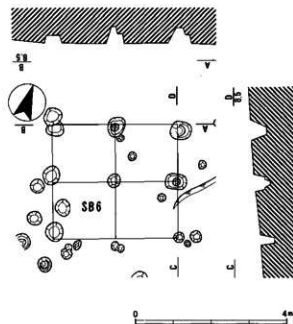
第14図 SB3実測図(1:100)、出土遺物実測図(1:4)



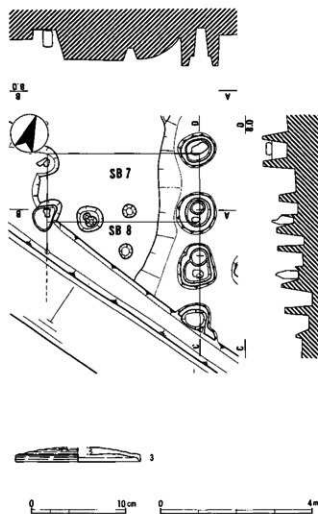
第15図 SB4実測図(1:100)



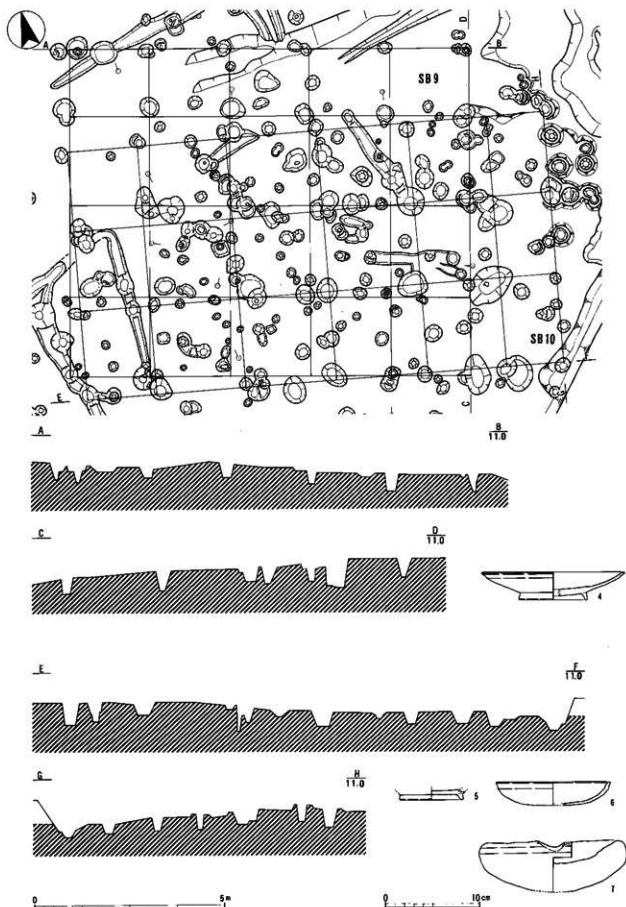
第16圖 SB 5 実測図 (1 : 100)



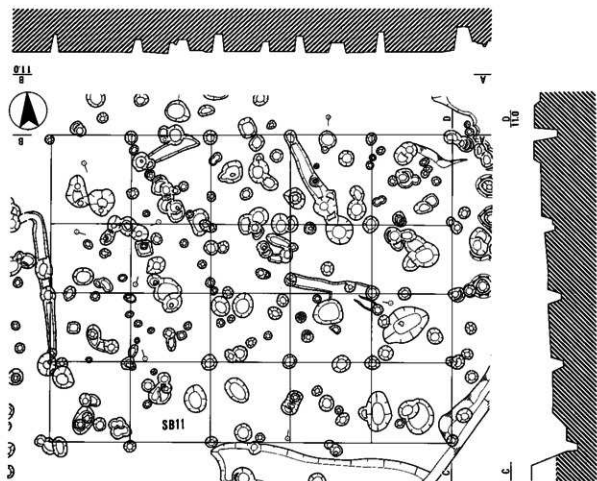
第17圖 SB 6 実測図 (1 : 100)



第18圖 SB 7・8 実測図 (1 : 100) 出土遺物実測図 (1 : 4) [3 : SB 7]



第19图 SB9・10实测图(1:100)、出土遺物实测图(1:4) [4:SB9, 5~7:SB10]



柱穴には柱根、根石の残るビットもある。

出土遺物には土鍾、土師器、製塩土器（8）、須恵器、灰軸陶器、瓦（9）等の小片がある。

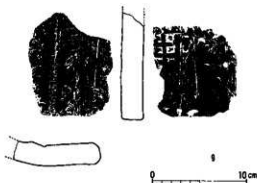
SB12 A地区の中段付近で検出された総柱建物である。桁行3間(6.0m)×梁行2間(3.4m)の南北棟である。棟方向はN9°Wに振れるようである。柱間は、桁行が北から2.4+2.1+1.5mで、梁行は西から1.8+1.6mである。

柱掘形のプランは円形（約20～30cm）である。

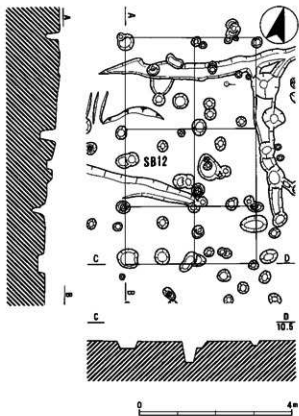
柱穴からの出土遺物には土師器、製塩土器、須恵器、漬け掛けで施軸された灰軸陶器・碗、段皿等の小片があるが図示できるものはない。

SB13 A地区の中段付近で検出された掘立柱建物である。桁行3間(6.3m)×梁行2間(3.3m)の南北棟である。棟方向はN9°Eに振れるようである。柱穴は側柱のみで構成される。柱間は、桁行は2.1mの間で、梁行が西から1.8+1.5mである。

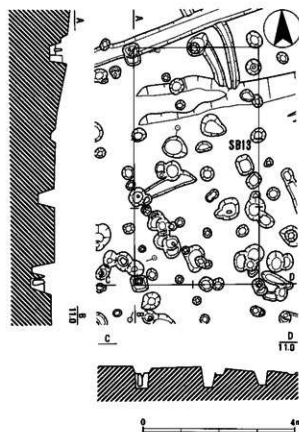
柱掘形のプランは基本的に隅丸方形(40×40cm)であるが、円形気味に検出されたものもある。



第20図 SB11実測図（1：100）
出土遺物実測図（1：4）



第21図 SB12実測図 (1:100)



第22図 SB13実測図 (1:100)

柱穴からの出土遺物は土師器、須恵器、山茶碗等の細片で図示できる遺物はない。

SB14 A地区の中段付近で検出された総柱建物である。桁行2間(4.2m)×梁行2間(3.5m)の南北棟である。棟方向はN12°Wに振れるようである。柱間は桁行が2.1mの等間で、梁行は西から1.8+1.7mである。

柱掘形のプランは、円形(約30×40cm)である。

北西、南西の柱穴は検出されなかった。柱が残らない構造(台石をもつなど)の柱が存在したのかもしれない。

柱穴からの出土遺物は土師器、製塩土器、須恵器灰釉陶器等の細片で図示できる遺物はない。

SB15 A地区の中段付近で検出された総柱建物である。桁行4間(8.7m)×梁行2間(4.5m)の東西棟である。棟方向はE12°Sに振れるようである。

柱間は桁行が西から2.1+2.1+2.1+2.4mで、梁行は南から2.1+2.4mである。

柱掘形のプランは円形(約20~40cm)である。

柱穴からの出土遺物は須恵器、漆付着土器、ロゴロ成形土師器、鉄滓等の細片で図示できる遺物はない。

SB16 B地区の中段付近で検出された総柱建物である。桁行4間(6.9m)×梁行3間(4.2m)の東西棟である。棟方向はE-Wに振れるようである。

柱間は桁行が西から1.8+1.5+1.5+2.1mで、梁行は北から1.5+1.2+1.5mである。

柱掘形のプラン円形(約20~40cm)である。柱穴には柱根が残るものもある。

北東、南西の柱穴は検出されなかった。柱穴が残らない構造の柱が存在したのかもしれない。

出土遺物は土師器、須恵器、山茶碗等の小片で図示できる遺物はないが、山茶碗は斎藤氏の編年(以下「斎藤編年」)のVII-3型式、藤澤氏の編年(以下「藤澤編年」)の第5型式に相当する。

SB17 B地区の下段付近で検出された総柱建物である。桁行4間(7.2m)×梁行2間(3.6m)の東西棟である。棟方向はE-Wに振れるようである。柱間は桁行、梁行ともに1.8mの等間である。

柱掘形のプランは隅丸方形(約50×60cm)、円形(約40cm)ともにある。遺物は出土していない。

SB18 B地区の中段東端付近で検出された掘立柱建物である。桁行3間(5.4m)×梁行2間(3.6m)の南北棟である。棟方向はN7°Eに振れるようである。側柱のみで構成される。柱間は桁行、梁行ともに1.8mの等間である。

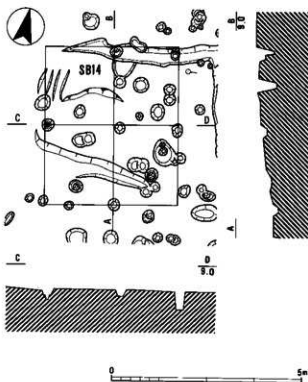
柱掘形のプランは隅丸方形(約50×60cm)、円形(約30~50cm)ともにある。

検出されなかった柱穴が1ヵ所ある。遺物は出土していない。

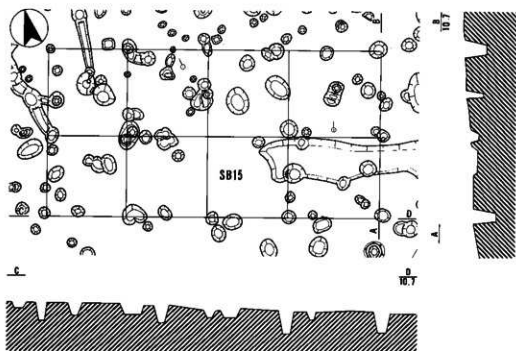
SB19 B地区の上段東端付近で検出された。調査区西壁にかかっているため、全体のプランは確認できなかったが、南北棟と想定するならば2間(3.0m)×1間(1.5m)以上の掘立柱建物である。棟方向はN7°Eに振れるようである。柱間は桁行、梁行ともに1.5mの等間である。

柱掘形のプランは円形(約30~50cm)である。遺物は出土していない。

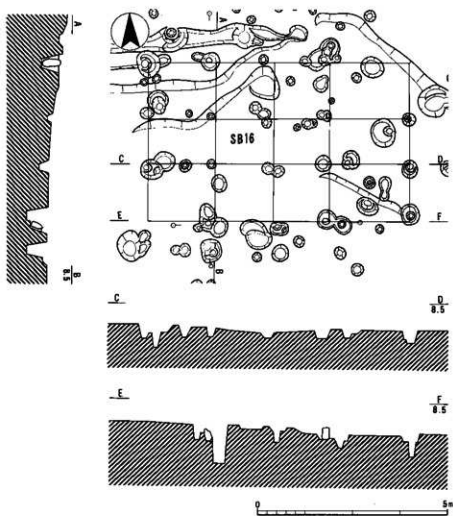
SB20 B地区の下段東端付近で検出された。調査区西壁にかかっているため、全体のプランは確認で



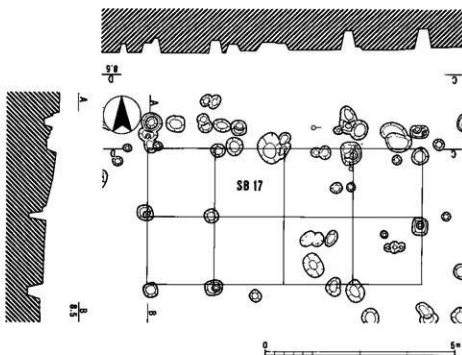
第23図 SB14実測図(1:100)



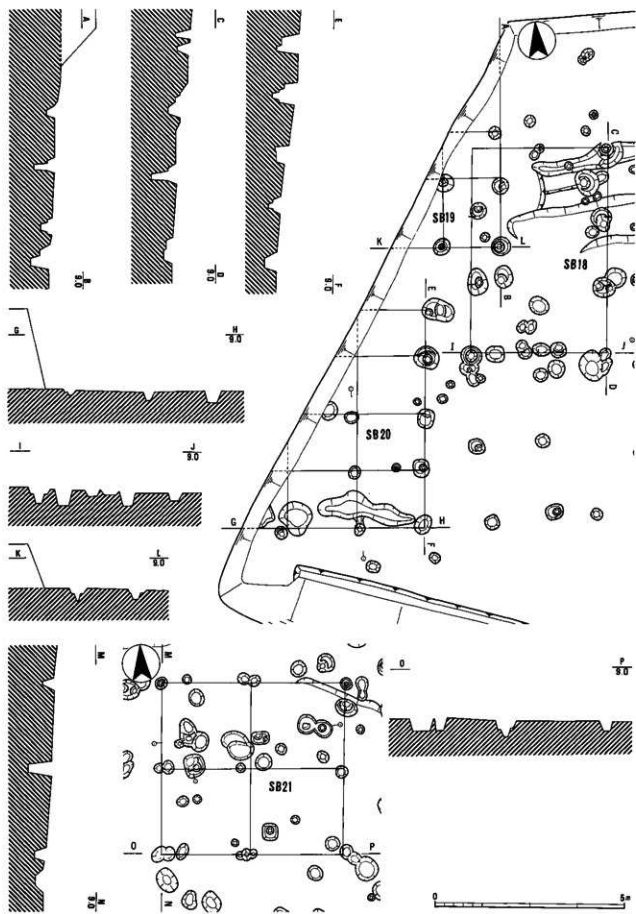
第24図 SB15実測図(1:100)



第25图 SB16实测图 (1 : 100)



第26图 SB17实测图 (1 : 100)



第27圖 SB18~20・SB21実測圖(1:100)

きなかったが、南北棟と想定するならば、4間(5.7m)×2間(3.6m)以上の掘立柱建物である。棟方向は、N7°Eに振れるようである。柱間は、桁行が北から1.2+1.5+1.5+1.5mで梁行は1.8mの等間である。

柱掘形のプランは円形(約30cm)である。遺物は出土していない。

S B21 B地区の中段付近で検出された総柱建物である。桁行2間(4.8m)×梁行2間(4.5m)の東西棟である。棟方向はE6°Nに振れるようである。柱間は桁行が2.4m、梁行は2.25mの等間である。柱掘形のプランは円形(約30~40cm)である。

柱穴からの出土遺物は土師器、須恵器、山茶碗等の小片で図示できる遺物はない。

S B22 B地区の北東端付近で検出された。調査区東壁にかかっているため全体のプランは確認できないが、東西棟と想定するならば、桁行3間(6.6m)×梁行3間(5.7m)以上の掘立柱建物である。棟方向はE5°Sに振れるようである。柱間は、桁行が西から2.1+2.1+2.4m、梁行は1.8+2.1+1.8mである。

柱掘形のプランは円形(約30~40cm)である。

柱穴からの出土遺物は土師器、須恵器等の小片で図示できる遺物はない。

(2) 柱列

S A23 B地区の北東端付近で検出された。東西4間(9.0m)×南北3間(7.5m)以上のL字型を呈する。柱間は、東西列が西から2.1+2.1+2.4+2.4mで南北列は南から2.1+1.8+3.3mであるが、南北列の北から1間目は3.3mと他より広く、柱間・間数には不確定要素が残る。南北列の方向はN15°Wである。

柱掘形のプランは、円形(約30cm)である。柱穴からの出土遺物は山茶碗(10)のみで器壁は全体に厚く底部外面に板状圧痕、切痕が明瞭に残存する。藤澤編年⁵第4型式に相当する。

S A24 B地区の北西付近で検出された。東西4間(7.2m)以上で柱間は西から1.5+2.1+2.1+1.5mである。

柱掘形のプランは基本的には円形(20~40cm)である。東西列の方向はE5°Sで、S A24と平行関係

にある。遺物は全く出土しなかった。

S A25 B地区の北西付近で検出された。東西3間(7.4m)以上で、柱間は西から2.4+2.4+2.4mである。東西列の方向はE5°Sである。

柱掘形のプランは基本的には円形(20~40cm)である。遺物は全く出土しなかった。

S A26 A地区の中央北付近で検出された。東西2間(4.2m)以上で、柱間は2.1mの等間である。

柱掘形のプランは基本的には円形(20~40cm)である。東西列の方向はE9°SでS A28と平行関係にある。S A26と柱穴が重複するが、切り合い関係は確認できなかった。遺物は全く出土しなかった。

S A27 A地区の中央北付近で検出された。東西3間(6.3m)以上で、柱間は2.1mの等間である。

柱掘形のプランは基本的には円形(20~40cm)である。東西列の方向はE12°Sで、S A27と平行関係にある。遺物は全く出土しなかった。

S A28 A地区の中央北付近で検出された。東西4間(7.6m)×南北2間(4.2m)以上でL字形を呈する。柱間は東西列が西から2.1+2.1+1.6+1.8mで、南北列が2.1mの等間である。

柱掘形のプランは基本的には円形(80~40cm)である。S A29の東西列に一部重複みられるが切合関係は不明である。

東西列の方向はE12°Sである。遺物は全く出土しなかった。

S A29 A地区の中央北付近で検出された。東西4間(7.8m)×南北2間(4.2m)以上でL字形を呈する。柱間は東西列が西から2.1+2.1+1.5+2.1mで、南北列が2.1mの等間である。

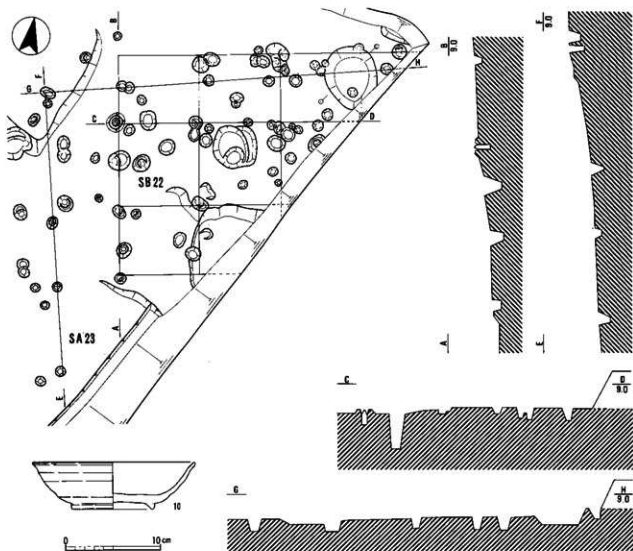
柱掘形のプランは基本的には円形(20~40cm)である。

東西列の方向はE9°Sである。遺物は全く出土しなかった。

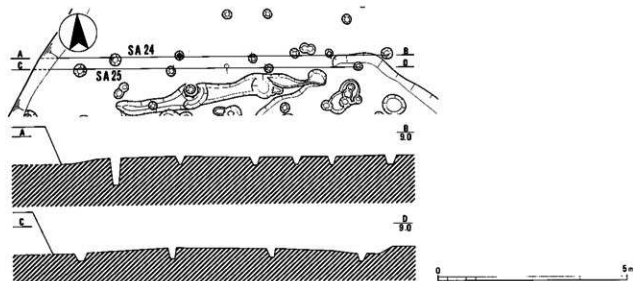
(3) 溝・自然流路

S D30

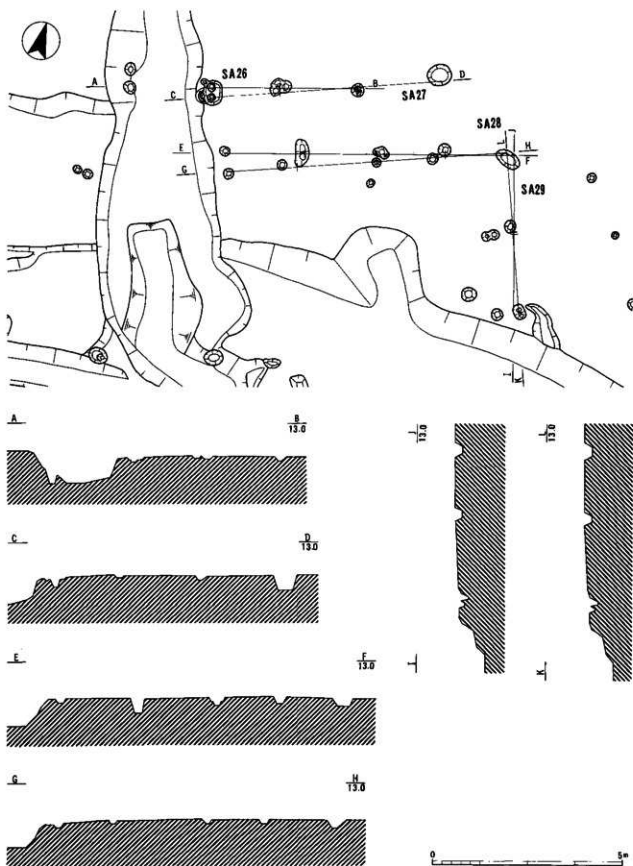
概要 A地区の北部で検出した。北西から東流する自然流路で、長さ18m、最大幅3.5m、検出面からの深さは2.0m~2.3mである。さらに調査区外へ延びる。埋土は堆積、流出を繰り返し平安時代の中頃には埋没していたと考えられる。



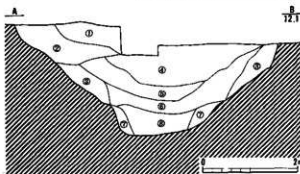
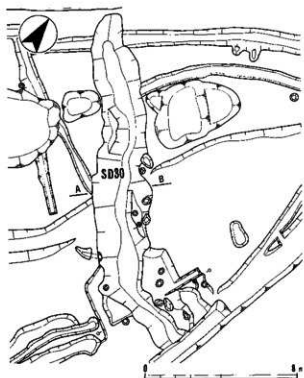
第28図 SB22・SA23実測図 (1 : 100)、出土遺物実測図 (1 : 4) [10 ; S A 23]



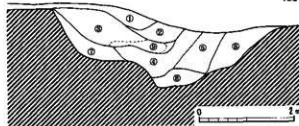
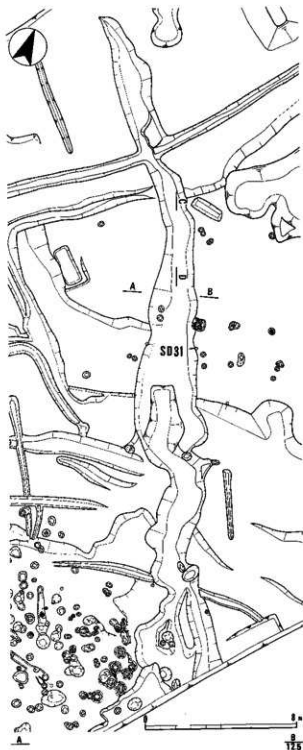
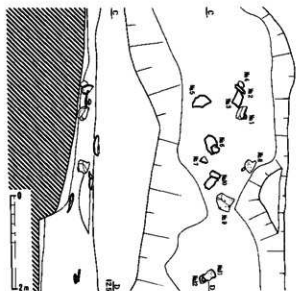
第29図 S A 24・25実測図 (1 : 100)



第30圖 SA26~29実測圖 (1:100)



- ①暗褐色粘質土 (土器・炭灰人)
- ②暗褐色粘質土 (土器・炭灰人)
- ③黄灰粘質土
- ④灰白・黄灰砂質土層じり
- ⑤灰白砂質土
- ⑥暗褐色粘質土層じり
- ⑦黄灰粘質土
- ⑧暗褐色粘質シルト
- ⑨暗褐色シルト



- ①黄褐色砂質土
- ②暗褐色砂質土
- ③灰白砂質土
- ④暗褐色シルト
- ⑤灰褐色シルト層じり
- ⑥暗褐色粘質シルト
- ⑦黄褐色シルト
- ⑧暗褐色粘質シルト
- ⑨土器残片

第31図 SD30・31実測図 (1:200)、土層断面図 (1:80)、SD31遺物出土状況図 (1:80)

遺物出土状況 調査当初、3カ所にトレンチを設定して断面観察を行い、各堆積単位毎の分層発掘を試みたが、上層で2条に分流し、下流で1条になるなど、複数の流れが重複しており、1つの堆積単位を安定的に追うことはできなかった。但し、調査時の所見では、古い時期の遺物も新しい時期の遺物も混在して出土していた。それでも壁に貼りつくような状態で出土したものとしては弥生土器・細頸壺(13)土師器・高杯(20)・甕(23)・鍋(27)須恵器・杯身(39)・横瓶(49)等がある。

出土遺物 かなり多くの遺物が出土した。弥生土器・土師器・須恵器の土器類のほか、石製品も存在する。

弥生土器(11~14) 11は、小片であるが、垂流造貫川式壺の口縁部の一部で、弥生時代前期末に位置づけられるものである。12・13は細頸壺で口縁部形態は受口状になる。12は口縁部外面にクシ目刺突痕、13は凹線文を施す。14は口縁端部があまり発達していない広口壺である。

土師器(15~30) 15は碗である。底部から口縁部にかけて内湾しながら長く立ち上がり、口縁端部を丸く納める。口径は11cm強で7世紀前半に想定される。

16・17は杯である。平坦な底部から体部が内湾して立ち上がり口縁部端部は外反する。

18・19は皿である。口縁端部が内側に肥厚して丸く納める。18は底部外面はミガキ調整、内面には螺旋状暗文が施される。

高杯(20)は脚部に8面体の面取りが施される高杯である。脛部はハの字状に緩やかに延び、端部下方にやや肥厚して面をつくる。

甕(21~25・28~30)は口縁部が「く」の字に屈曲して端部外面に面をもつ甕である。口縁端部を上方に積み出し、外面に面をもつもの(21~24・29・30)や口縁部は断面方形で、端部外面に明瞭な面をもつもの(25)がある。22は肩が衰わずにやや垂直気味に延びる胴部に、大きく水平近くまで外反する口縁部が付く。口縁端部は上方に積み上げられる。28~30は口径13~16.4cmの小型の甕である。28の口縁は頸部から内湾気味に立ち上がる。口縁端部は尖るようにおわる。30は体部外面に縦方向と、底部外面に

横方向のハケ調整を施す。体部内面は縦方向に板ナデする。30以外はいずれも口縁部の破片のみで器面の残りも悪く、調整の不明瞭なものが多い。大半は体部をハケ調整する8世紀から9世紀前半のものであろう。

26・27は把手の付く鍋である。体部外面は縦方向、内面は横方向にハケ調整される。26は、頸部が外反し、口縁端部が上方に積み上げられ、端部外面には凹線がめぐるものである。把手は断面長円形を呈する。27は、緩やかに外反する頸部と上方に積み上げられた口縁端部、及び口縁端部外面には面をもつものである。把手の断面は扁平である。

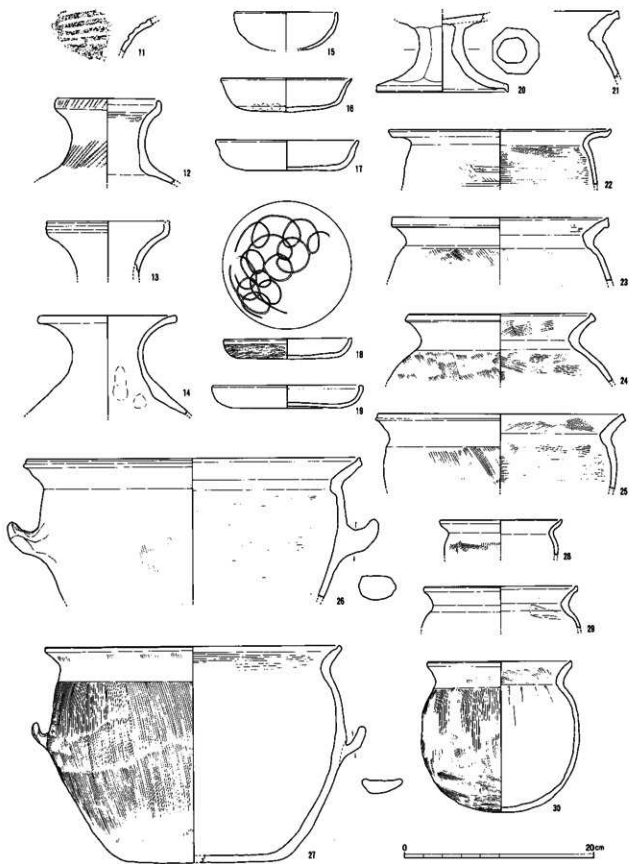
須恵器(31~55) 杯H(31・32・34)の内31・32は杯蓋である。天井頂部はやや高くて丸く口縁端部は内側に段を成さず細く尖るよう終わる。天井部外面はへら切り後、弱くナデている。34は杯身である。受部は立ち上がり短くやや上を向く。底部外面はへら切り後弱くナデている。

杯蓋(33)はかえりを有しない杯蓋である。やや扁平化した宝珠つまみをもつ。平坦な天井部をもち、口縁端部は折れ曲がる。天井部外面を2/3クロケズリする。内面に「井於」と考えられる墨書が見られる。

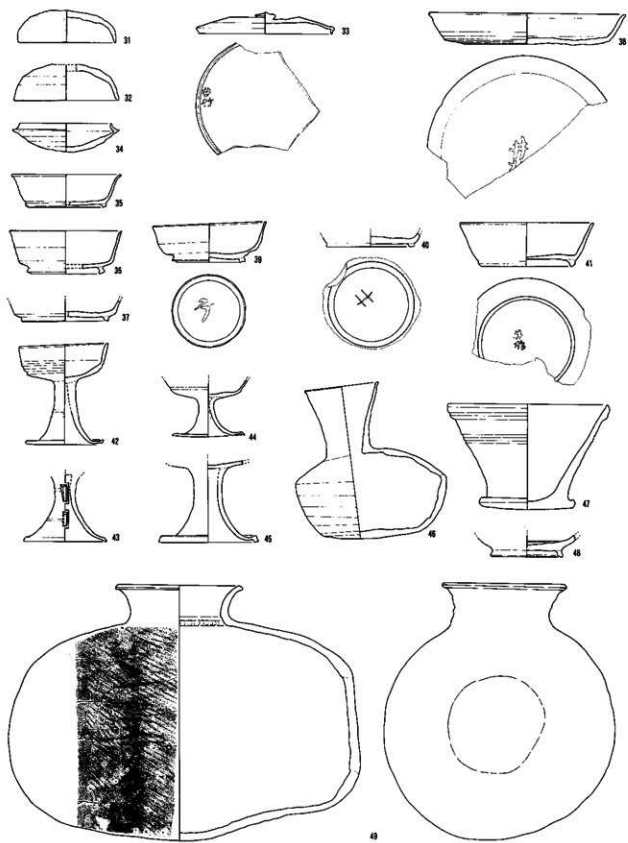
杯(35~37・39~41)は有台杯である。35は体部がやや外傾し、口縁端部はよく外反する。底部と体部の境には内端接地の高台が付く。36・39は体部が直立気味に延び、高台が底部と体大部の境より内側に付けられる。39には判読は不明であるが底部外面に墨書がみられる。40は底部のみの破片である。外面にへら記号が付けられる。41は内端接地の高台が体部と底部の境に付く。底部外面には「井於」と考えられる墨書が見られる。

皿(38)は底部外面をクロケズリする。体部は外傾して立ち上がり、口縁端部をやや外反させる。底部外面に「井□」の墨書が見られる。

高杯(42~45)は無蓋と思われるタイプで、透かしを穿ったものと穿たぬものがある。42は杯部下方と脚部中央にまあい沈線を2条巡らしている。脚部端部は上方に積み上げられ、外面に端面をもつ。43の脚部は2段2方に細長く透かしを穿たれている。44の杯部は平らな底部と明瞭な稜をなして直線的に外



第32图 SD30出土遺物実測図1 (1:4)



第33圖 S D30出土遺物實測圖2 (1:4)

傾して立ち上がる体部をもつ。脚部は短く、元は細いが裾はよく広がっている。

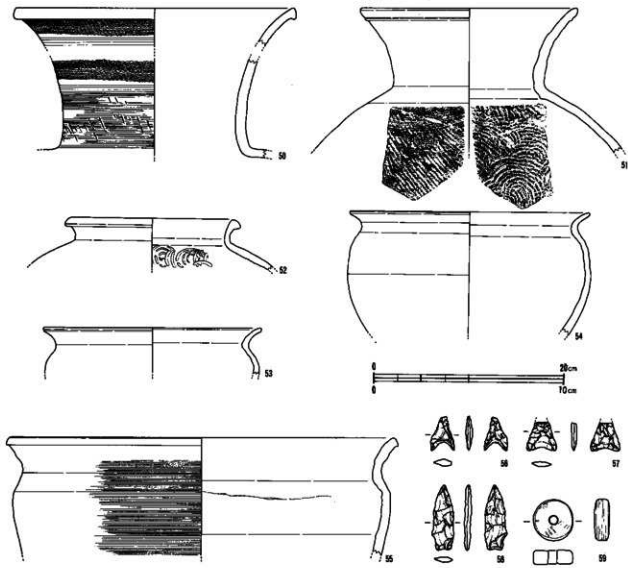
平甕(46)は口径7.8cmを測る。わずかに外反しながら大きく開いた口頸部をもつ。体部に綾をもち、底部はロクロケズリされる。猿投系編年の岩崎17窯式期から岩崎41窯式期に相当しよう。

鉢(47)は、口縁端部を肥厚させ外面に縁帯をつくり、体部外面には2条の沈線が施される。底部の円盤は、大きく外側へ張り出した安定感のあるものである。

縁軸陶器(48)は碗である。体部は内湾気味に立ち上がっていくものと思われる。見込みに二重の凹線をめぐらす。底部に補修痕が残る。猿投系編年の折戸53窯式期、都城出土土器型式編年の平安京III中に併行しよう。

横瓶(49)は口径12.7cmを測る。横長楕円形の体部に、強く外反した口頸部をもつ。体部外面には平行タタキ、内面には同心円および円弧状の当て具痕を残す。

甕(50~55)は口頸部が長く外反する大型の50・51と口頸部が短い52~55がある。50は口縁端部が垂下する広口甕である。頸部外面上部には沈線と波状文が施され、頸部下段ではカキメが施される。51の口縁部は外面に縁帯をつくる。体部外面は平行タタキ後カキメが施され、内面には同心円の当て具痕が残る。52は口縁端部が丸く肥厚した口縁帯を形成する。53・54は、頸部からよく外反する口縁部もち、口縁端部は丸く納まる。体部は丁寧にロクロナデ調整される。55は口径41cmの大型の広口甕で、体部はカキメ調整される。



第34図 S D30出土遺物実測図3 (50~55; 1:4、56~59; 1:2)

石鉢(56~58) 56は凹基無蓋式のサスカイト製である。側縁は上部が直線的で下半が外に張り出すものである。脚部の形態は尖鋭若しくはかなり先細りになるもので、素材面を僅かに残す。57は凹基無蓋式のサスカイト製である。側縁は直線的で、脚部の形態は、あまり先細りせず丸みをもつものである。扱いは浅い。先端部を欠く。58は下呂石製で長さ3.41cm、幅1.15cmを測る。平基無蓋式であろう。

紡錘車(59)は滑石製である。直径3.25cm、重さ22.0gを測る。側面に擦った跡が残る。

SD31

概要 A地区の中央北行近で検出した。北西から南東方向へ流れる自然流路で、長さ36m、最大幅7m、最小幅1.5m、検出面からの深さは1.0m~1.5mを測る。さらに調査区外へ延びる。埋没は堆積、流出を繰り返して、埋没は中世と考えられる。

遺物出土状況 SD31についても、3ヵ所にトレンチを設定して断面観察を行い、各堆積単位毎の分層発掘を試みたが、1つの堆積単位を安定的に追うことはできなかった。調査時の所見では、上層では中世の遺物が多く出土し、中層から下層にかけては、古墳時代末期、飛鳥時代、奈良時代の遺物が混在して出土していた。但し、中層から下層にかけて出土した土器は、小片が非常に多かった。

出土遺物 テンバコで20箱以上の遺物が出土している。種類・器種としては、土師器・皿・杯身・甕・甔、須恵器・蓋杯・甕・甔・壺・瓶・硯、緑釉陶器、灰釉陶器等がある。この他に土師、籬羽口等の土製品や管玉、砥石、石鏃等の石製品も出土した。また、須恵器の蓋杯の出土量の多さが目立つ。

土師器(60~105) 柄(60・61・64~66)には平坦な底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部が丸く納まる60・61・64・66や、口縁端部が尖り気味に納まる65がある。64・66の体部内面には暗文が確認できるが、風化により不明瞭である。

杯(62・63)は平坦な底部から体部を直線的に外方に立ち上げ、口縁端部を丸く納める。

皿(67~70)は口縁端部が内側に肥厚して丸く納まる67・68・70と、口縁端部が内側に肥厚しない69がある。67の底部外面にはミガキが見られるようであるが、風化により不明瞭である。

壺(71)は口径11cmを測る。丸みをもつ体部と直立する口縁部をもち、口縁端部上方には面をつくる。体部外面はケズリを施し、ナデ調整する。

甕(71~101)は、器形の形態、調整は風化もあり不明瞭であるが体部外面を縦方向または斜め方向、内面を横方向にハケ、若しくはナデ調整を施す。頸部から口縁部の形状により、大きく甕Aから甕Cに分類した。主になるのは甕Aである。甕Aは、外反する口縁部、上方に擠まみ上られた端部、及び端部外面に面をもつもの(72~84・91・93~95・98~100)である。このうち72~76は口径15~16cmを測る小型の甕である。74・77~79・82~84・91・94・98・100の体部内面にはヨコハゲが施され、72・73・75・80・81・99の体部内面はナデ調整が施される。また、80は口縁部を尖り気味に外方へ引き出すものであり、91の口縁端部は外側に肥厚するものである。

甕Bは、口縁部が「く」の字に屈曲して、端部外面に面をもつもの(85~90・92・96・97・101)である。90・92・96・97・101の口縁端部は上方に擠まみ上げられ、85~89の口縁端部は上下に肥厚する。

甕Cが102で口縁部は短く、体部径に比べて口径の小さいものである。体部内面には板状工具によるナデ調整が見られる。

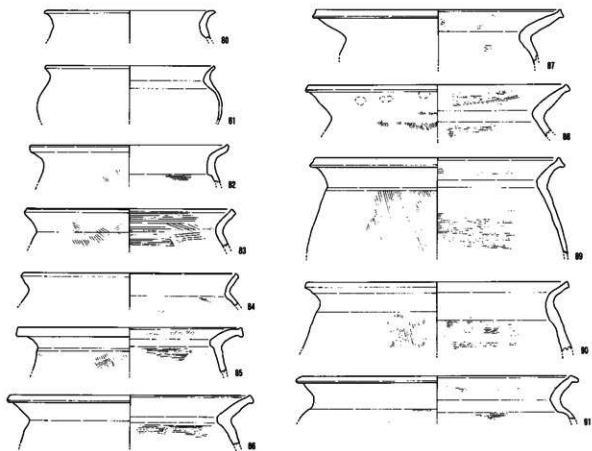
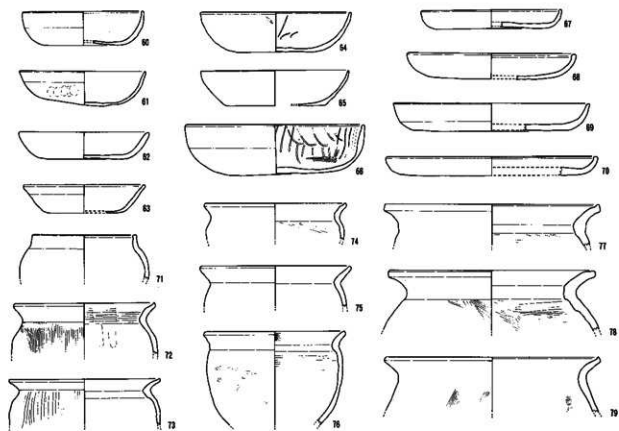
鍋(103・104)には、口縁部が大きく水平近くまで外反して上方に引き上げられる103と、短く屈曲する頸部、擠まみ上げられ口縁端部、及び端部外面に面をもつ104がある。

甔(105)の口縁部内面は横方向にハケメを施し、ヨコナデで調整する。外面はハケ調整した後、ユビオサエする。

須恵器(106~192) 杯(106・107)は杯Hである。106は天井部と口縁部との境にあまい接をもち、天井部の1/3はロクロケズリされる。107はやや平坦な天井部をもち、ヘラ切り後ナデ調整される。

蓋(108~124)は製宝珠つまみをもち内面にかえりを有しない杯蓋である。天井部から口縁部の形態により、大きく蓋Aから蓋Cに分類した。

蓋A(108・113~115・118)は天井部から屈曲して口縁部に至り、端部を折り曲げる。このうち108・113・118はやや反り上がった天井部をもつものである。



第35图 SD31出土遗物实测图1 (1:4)

蓋B (110・111・120～122・124)は口縁部まで障笠状に広がり、口縁端部を折り曲げる。

蓋C (109・115・119・123)はやや平坦な天井部から口縁部に至り、水平に引き出され端部を折り曲げる。

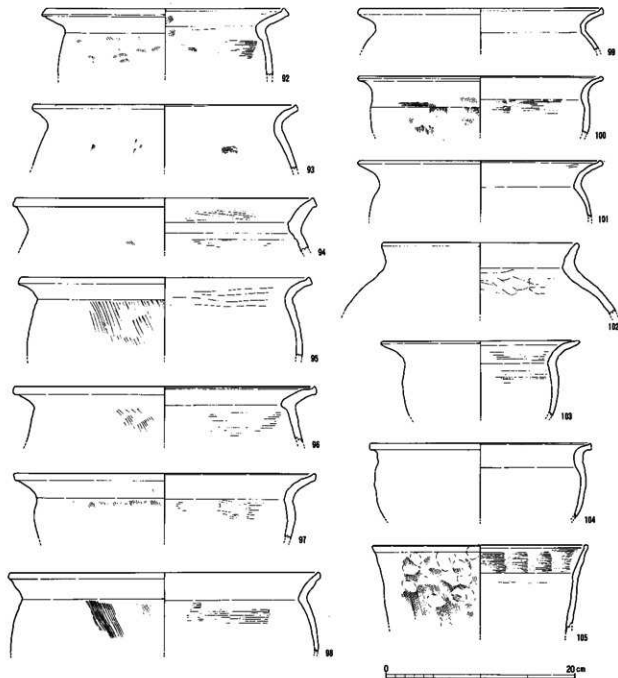
杯(125)は杯Hのタイプ、杯(126～130)は無台杯である。

杯H(125)の底部外面はヘラ切りのまま、若しくはヘラ切り後弱くナデ調整するものである。受部の立ち上がりは短く内傾する。

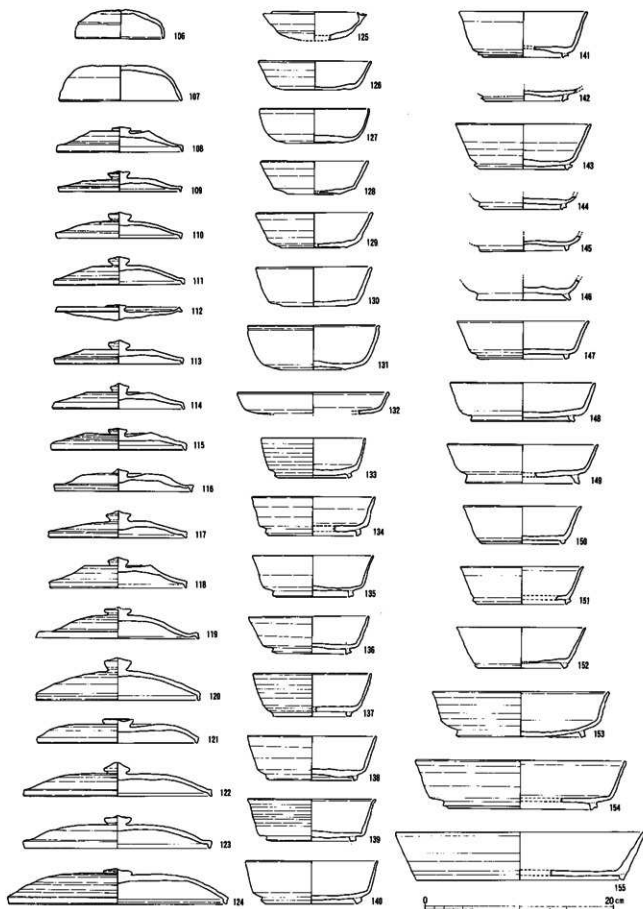
杯(126～130)のうち、126の底部外面には粘土紐巻き上げ痕が残る。幅は約1.0cmである。体部は外傾して、口縁端部は丸く納まる。127はやや厚手の平坦な底部をもち、体部は内湾する。器壁は薄く、口縁端部は丸く納まる。128～130は底部外面を糸切り後、ロクロケズリする。体部は直線気味に外傾し、口縁端部は丸く納まる。

碗(131)の口縁部外面には沈線が施され端部上面に面をもつ。金属器を模したものと想定される。

皿(132)は口径15.9cmを測る。平坦な底部から、



第36図 S D31出土遺物実測図2 (1:4)



第37图 S D31出土遺物実測图3 (1 : 4)

やや外反して口縁上部上面に面をもつ。底部外面はヘラケズリされる。

杯(133~154)は有台杯である。杯部の形態から杯A~杯Cに分類した。

杯A(133~136・139・140・153・154)の体部は外上方に延び、高台は底部の内側に付けられ腰部が張り出している。猿投窯編年の岩崎41号窯式から岩崎25号窯式に相当しよう。口縁端部がやや外反する134・135・139・153、底部外面を板ナデする140、底部が下がる153がある。

杯B(137・138・141・143・147~149)の高台は、体部と底部との境よりやや内側につける。体部が口縁部まで内湾気味に延びるもの(137)、体部から直立気味に延びるもの(138・143・148・149)、口縁部が緩やかに外反するもの(141・147)がある。148・149の高台は「ハ」の字に開き、断面方形を呈する。外端接地である。岩崎25号窯式から鳴海32号窯式に相当しよう。

杯C(150~152)の体部は直立気味に延び、口縁端部は外反する。高台は底部と体部の境に付く。猿投窯編年の岩崎41号窯式から岩崎25号窯式に相当しよう。

壺(155)は口径26.4cmを測る。体部は直線的に外傾し、口縁端部はやや尖るように終わる。高台は底部と体部の境に付く。底部内面は、不定方向にナデ調整される。

杯(156~161)には底部外面に墨痕が見られる。このうち、156の底部外面には「井井」、157の底部外面には「井□」、160・161には「松」、162には「井」の墨書が確認できる。

杯(163~168)はヘラ記号が見られる杯である。無台杯(163~165)と、有台杯(166~168)がある。163の底部外面と166の底部内面に「×」状のヘラ記号が、164・168の底部外面に「V」状のヘラ記号が、165・167の底部外面には「一」状のヘラ記号が見られる。

蓋(169)は短頸壺の蓋であらう。口径9.0cm、器高1.2cmを測る。平坦な天井部は口縁部まで水平に延び、端部は折れ曲がる。扁平なつまみをもつ。

170・171・173は長頸壺である。口縁端部が上方に引き上げられ端部外面に面をもつ170、受口状の

口縁部をもち、2段接合になる171がある。173は肩部に稜をもち、頸部には2条の沈線を施す。猿投窯編年の高蔵寺2号窯式期に相当しよう。

短頸壺(172)は肩部に稜をもち、底部外面をヘラ切り後ナデ調整する。

壺(174)は口頸部から外反した口縁部が上下に肥厚し、端部外面に面をもつ。

甕(175・176)は口頸部片である。175の口頸部は外反して端部が垂下する。外面に沈線と波状文をもつ。176は口縁部を「く」の字に外反させ、端部外面は中くぼみ状を呈する。

円筒状須恵器(177)は径約32cmの円盤部に径17.5~19.5cmの円筒状の脚部をもつ。円盤のほぼ中心に径4.2cmの円孔があり、脚部には長方形の透かしを四方に穿つ。脚端部は外反し、縁帯をもつ。円盤部の外面はロクロケズリされ、一部に煤が付着する。器台とも想定できるが、用途は不明である。

円面鏡(178)は脚部片である。縦方向に長方形の透孔が等間隔にあく。

横瓶(179)は口縁部である。外反気味に延び端部は断面方形を呈し、端部に面をもつ。

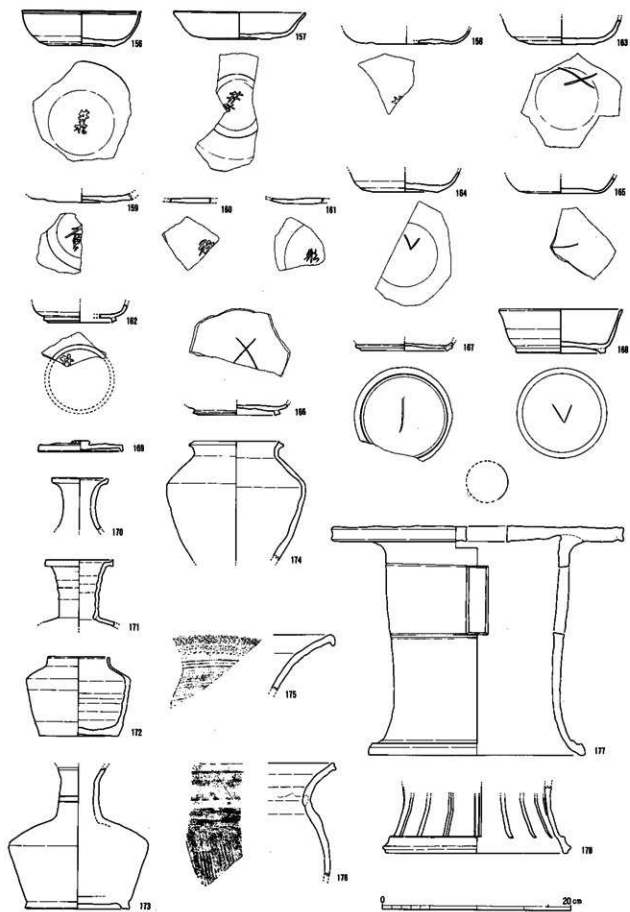
壺(180)の口縁部は直線気味に外反し、端部は内側に肥厚し丸く納まる。

甕(181~192)は頸部から口縁部の形状により大きく甕Aから甕Bに分類した。

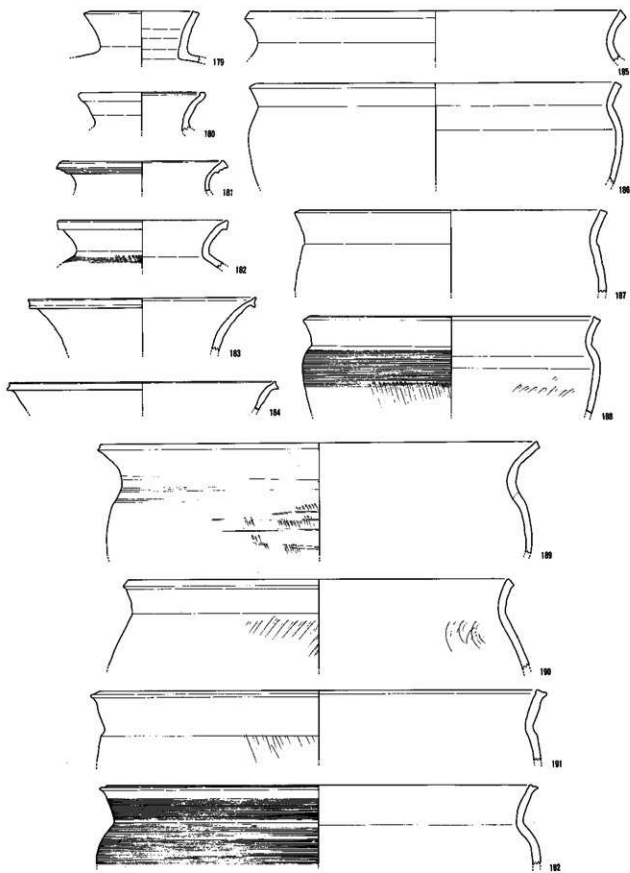
甕A(181~184)の口縁部は斜め上方へ外反し、口縁端部は縁帯気味の面をなす。縁帯部に凸線を巡らす181、口縁端部が上下に肥厚し、凹面をもつ183・184がある。

甕B(185~192)は直線的にの延びた口縁部とさほど張り出さない肩部をもつものである。口縁端部の断面はコの字状を呈し、端部に面をもつ。体部をロクロナデする187、タタキ成形を施す190・191、タタキ成形後、カキメを施す188・189・192がある。

緑釉陶器(193・197)皿(193)は口径12.5cm、器高2.5cmを測る素地である。体部は直線的に延び、口縁端部は外反する。見込み凹線が一条巡る。高台はためて低く、内端に凹線が巡る。推定産地は近江産で、型式は猿投窯編年の折戸53号窯式期、都城出土土師器編年の平安京Ⅲ一古に併行しよう。



第38图 SD31出土遺物実測図4 (1:4)



第39圖 S D31出土遺物実測圖 5 (1 : 4)

深碗(197)は高台径9.0cmを測る。体部は内湾する。高台はやや高めで、端面が凹む。推定産地は美濃、若しくは近江産で型式は猿投窯編年の折戸53号窯式期、都城出土土師器編年の平安京Ⅲ-古に併行しよう。

灰釉陶器(194~196・198・200)の体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。194は口径10.6cm、器高3.3cmを測る三日月高台をもつ小碗である。内面に灰釉が認められる。196・198は三日月高台をもつ碗である。施釉は、漬け掛けである。200は高台径6.6cmを測る皿である。内面に灰釉が認められる。底部外面に墨痕が見られる。

195は口径12.6cm、器高4.1cmを測るいわゆる灰釉山茶碗の小碗である。

山茶碗(199)は口径17cm、器高5.0cmを測る。体部は平坦な底部から緩く内湾気味に立ち上がり、口縁端部は弱く外反する。高台端部には楔状痕が明瞭に残存する。藤澤編年第4型式古段階に相当する。

製塩土器(201)は口縁部片である。口縁部が尖るように終わり、外面に不明瞭であるが、指頭圧痕が見られる。

土製品(202・203)は土錘である。202は円柱形を呈し、孔径0.3cm、5.7gを測る。203は紡錘形を呈し、孔径0.4cm、20.1gを測る。

土製品(204)は輪羽口である。口縁端部に鉄滓が

付着する。

石製品(205~208) 砥石(205)は砂岩である。表裏面を利用する。

管玉(206) 碧玉製で長さ2.72cm、径1.70cm重さ1.2gを測る。

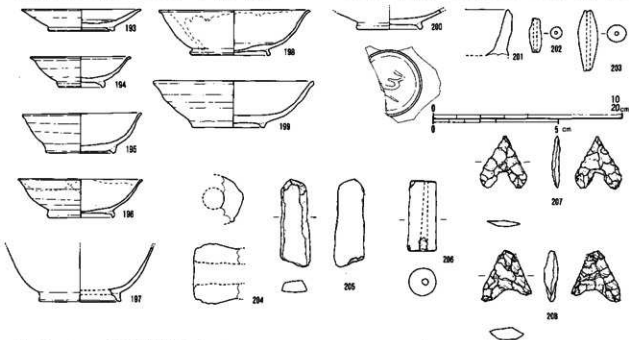
石鎌(207・208) 凹基無茎式である。207はサスカイト製である。側縁は直線的なもので、脚部は先細りせず、やや角張るものである。挟りは概ね逆「U」字状である。表面に素材面を僅かに残す。208はチャートである。脚部はあまり先細りせず丸みをもつもので、左右非対称である。先端部を僅かに欠く。

SD32

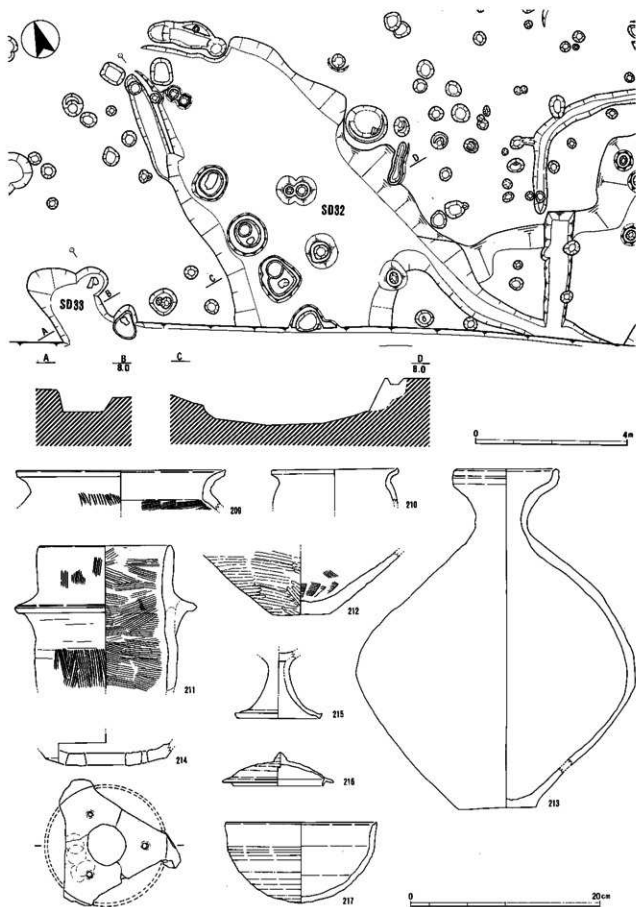
概要 A地区南端の1次検出面より20cm程掘削して検出した。北から南方向へ流れ始める溝で、長さ9m以上、最大幅6m、検出面からの深さは1.0m~1.2mを測る。さらに調査区外へ延びる。

遺物出土状況 調査当初は、各堆積単位毎の分層発掘を試みたが、雨天による出水や制約によって、層位に従った厳密な取り上げは行っていない。ただ、発掘時の所見では、古い時期の遺物と新しい時期の遺物が混在して出土していた。

出土遺物 土師器壺(209・210)は「く」の字の屈曲する口頸部をもつものである。209は口径22cmを測る。口縁端部は断面方形を呈し、端部外面に面を



第40図 SD31出土遺物実測図6(193~205; 1: 4、206~208; 2: 3)



第41图 SD32·33实测图(1:100)、SD32出土遗物实测图(1:4)

もつ。体部外面にナメハケ、内面にヨコハケ調整される。210は口径13cmを測る。口縁端部は上方に肥厚し、端部外面に面をもつ。

土管(211)は底のない、鈎付き円筒状の土器である。口径13.8cm、鈎径19.2cmを測る。上部をジョイント部とすれば、給排水用の土管が想定される。体部外面は縦方向にハケとナデによる調整、内面は横方向のハケ調整で成形される。

弥生土器(212・213) 212は底径6.0cmを測る外面にミガキ、内面にハケ調整が施される。213は細頸壺である。口縁端部は受口状を呈し、端部外面に凹線が2条巡る。

須恵器(214~217) 甑(214)は底径12.9cmを測る底部片である。三方向に漏鉢状の孔と中心の円孔を囲んで、三方に小円孔をもつ。

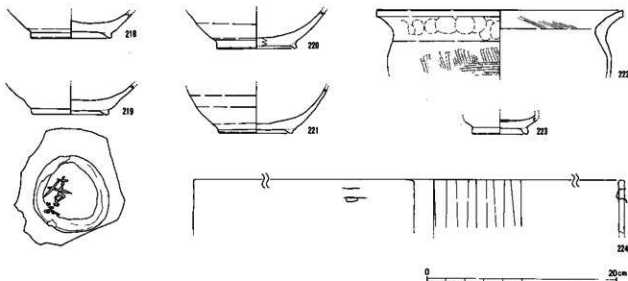
高杯(215)は脚径9.2cmを測る。脚端部を斜め上方に積み上げ、外端面は傾斜する。

蓋(216)は内面にかえりが付くものである。天井部に乳頭状のつまみが付き、かえりの稜が口縁端部より下に出る蓋である。

鉢(217)は口径16cm、器高9.0cmを測る。口縁部を体部の境に沈線が2条巡る。

SD33

概要 A地区南端で検出した。北から南方向へ流れ始める溝で、長さ2m以上、最大幅1.5m、検出面からの深さは40cm~60cmを測る。さらに調査区外へ延びる。



第42図 SD33出土遺物実測図(1:4)

出土遺物 土師器(222)は口径26.1cmを測る甕の口縁部である。口頸部は「く」に字に屈曲し、口縁端部はやや角張って、端部外面に面をもつ。

山茶碗(218~221)のうち、219は底部外面に「属器」の墨書が、220・221には切殻痕が確認できる。藤澤編年第4型式から第5型式に相当する。

緑釉陶器(223)は、底径6.0cm測る耳皿で、太めの三日月高台をもつ。見込みに凹線が巡る。美濃産で、型式は都城出土土師器編年の平安京III-古に相当する。

木製品(224)は曲物の上半部片である。

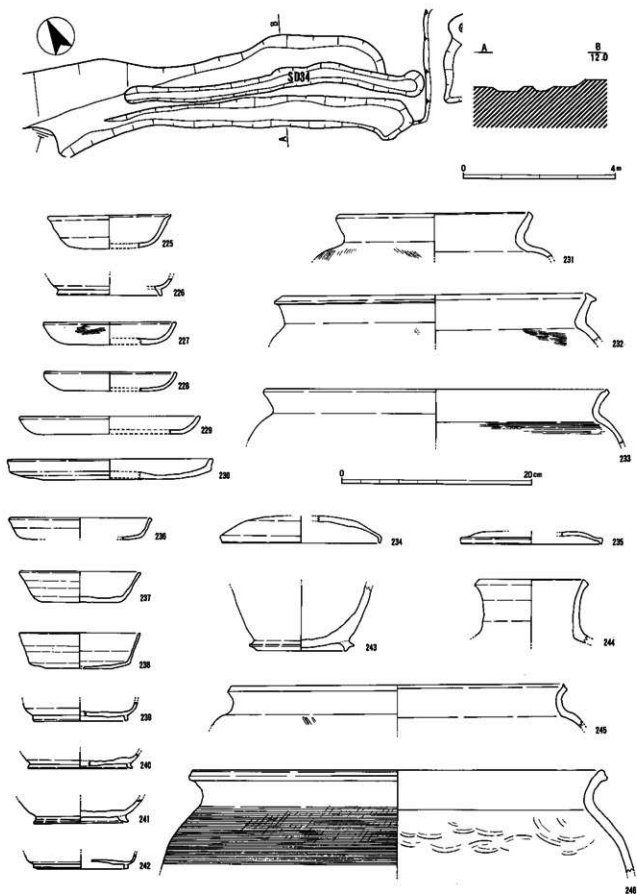
SD34

概要 A地区北東付近で検出した。東から西方向へ流れる溝で、長さ8.0m、最大幅80cm、検出面からの深さは10cm~30cmを測る。

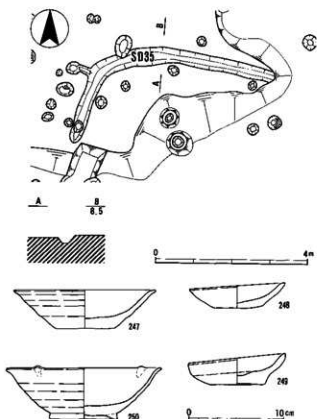
遺物出土状況 出土遺物は溝の規模に比べ多いが、小片のみで完形品はない。これは、SD34が平行する近世以降の溝に切られて検出されていることや、北斜面からの流れ込みも含まれているためと思われる。

出土遺物 土師器(225~233) 杯(225)は、やや平坦な底部から体部が斜め上方に延び、口縁端部が外反するものである。碗(226)は高台径11cmを測る。

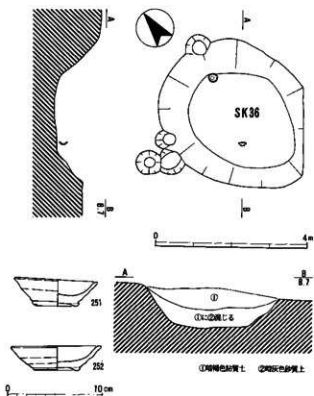
皿(227~230)のうち、口縁端部が内側に肥厚して丸く納まる227・228、口縁端部の上側に面をもつ229、平坦な底部からやや反りあがって体部に至り短く延びる230がある。



第43图 SD34实测图 (1 : 100)、出土遗物实测图 (1 : 4)



第44図 S D 35実測図(1:100)、出土遺物実測図(1:4)



第45図 S K 36実測図、土層断面図(1:100)
出土遺物実測図(1:4)

甕(231~233)は口径20.8~36.4cmを測る。口頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部を上方に引き出す231・233、口縁端部が上下に肥厚し、端部外面に面をもつ232がある。

須恵器(234~246) 杯蓋(234・235)は内側にかえりを有しないものである。天井部から傘状に広がり口縁端部を内側に折り曲げる234、全体的に扁平なもので、天井部からやや丸みを見せながら延び、口縁端部を折り曲げる235がある。

杯身(237~242)には無台杯(237・238)と、有台杯(239~242)がある。237は平坦な底部から斜上方へ直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く納める。底部外面には粘土ひも痕、板状圧痕が見られる。238の器壁は薄く、糸切り後ロクロケズりする。

有台杯(239~242)は高台径10~11cmを測る。内端接地高台をもつ239・242、「ハ」の字状に踏ん張る外端接地高台をもつ240・241がある。

皿(236)は口径15cmを測る。平坦な底部から、やや外反して口縁端部上面に面をもつ。底部外面はヘラケズリされる。

長頸瓶(243)は高台径11cmを測る底部片である。高台は「ハ」の字状に踏ん張る。

瓶(244)は口径11cmを測る。口頸部は直立気味に延び口縁部は外反する。端部は肥厚して外面に斜行する面をもつ。

甕(245・246)の口頸部はやや丸みをもちながら外反する。口縁端部をつまみ上げ、端部に面をもつ245と、端部に凹線をもつ246がある。246の体部外面は平行タキ後、カキメが施され、内面には同心円状のアテ具痕が見られる。

S D 35

概要 A地区の南東付近で検出した。「L」字状を呈する溝で、長さ6.5m以上、最大幅50cm、検出面からの深さは15cm~20cmを測る。

出土遺物 土師器(247~249)はロクロ成形によるものである。

碗(247)の底部外面には回転糸切痕が見られ、直線的に外傾する体部にはロクロ目が見られる。

皿(248・249)は口径10~10.3cmを測る。249の底部は厚く、回転糸切痕が明瞭に残る。

山茶碗(250)は口径16.5cm、器高5.5cmを測る。

底部は厚く、やや丸みをもって体部が立ち上がり、口縁部は外反する。四方に輪花をもつ。藤澤編年第三型式から第四型式に相当する。

SK36

概要 B地区の北東端で検出した。ブロンはほぼ円形で、直径3.5mを測る。検出面からの深さは中央部分で1.0mである。埋土は上下2層に分かれ、上層は暗褐色粘質土、下層は暗褐色粘質土と暗灰色砂質土の混合土である。

遺物出土状況 上層で山茶碗の底部片が1片と、下層で山茶碗の小碗(251・252)が完形品で出土した。
出土遺物 山茶碗(251・252)は口径8.8cm、9.6cmを測る小碗である。藤澤編年第四型式に相当する。

(4) 包含層出土遺物

土師器(253~260) 皿(253)はロクロ成形の小皿である。直線的に外傾する体部にはロクロ目が明瞭に残る。底部外面には糸切痕が残る。杯(254)の体部は内湾して立ち上がるが、途中から一転して外反し口縁部に至る。口縁部はヨコナデし、口縁部下半はユビオサエで調整される。器壁は薄く胎土は密である。

黒色土器(255)は底径8.2cmを測る碗である。外面の調整は不明瞭であるが、内面にはヘラミガキ調整が施されている。内面のみ黒化する。

高杯(256)の脚部内面には強いヨコナデにより凹面をもつ。

壺(257~260)は口径15~20.2cmを測る。口縁部はヨコナデ、体部はハケ調整が施される。257の口頸部は「く」の字に屈曲しやや肩の張る体部をもつ。258~260の口頸部はやや丸みをもちつつ外反し、肩は張らないものである。

須恵器(261~273) 杯蓋(261・262・264)のうち261は口径11.4cm、器高4.8cmを測る。丸みをもった天井部は、そのまま口縁部に至り、端部はやや外反し細く尖る。天井部外面はヘラ切り後ナデ調整する。262は内横面に段をもつ。天井部外面の1/3はロクロケズリされる。

264はボタン状のつまみをもつ蓋である。平坦な天井部からやや内湾させた後口縁部に至り、端部を弱く屈曲させる。

杯(263・265・266)のうち、杯H(263)は受部をやや短く内傾させる。底部外面の2/3はロクロケズリされる。杯(265・266)のうち、265は無台杯身であり、266は有台杯身である。共に口径14cmを測る。265の底部内面には、不定方向にナデ調整が施される。

高杯(267)は口径12cmを測る高杯の杯部で、脚部を欠損する。体部と口縁部の境には、沈線が巡る。底部外面はロクロケズリ、内面は不定方向にナデ調整される。

椀(268)は、やや肩の張る体部に1条の沈線が巡り、体部に貼り付けの注口が見られる。体部下半はロクロケズリされる。

壺(269)は口径8.2cm、器高3.7cmを測る短頸壺である。扁平な体部をもち、口頸部は短く上方に延びて納まる。

瓶(270)の底部外面には「二」のヘラ記号が見られる。

瓶(271)は底径11cmで、体部が直線的に斜め上方に延びる。体部には沈線が施され、断面方形で環状の把手がつく。

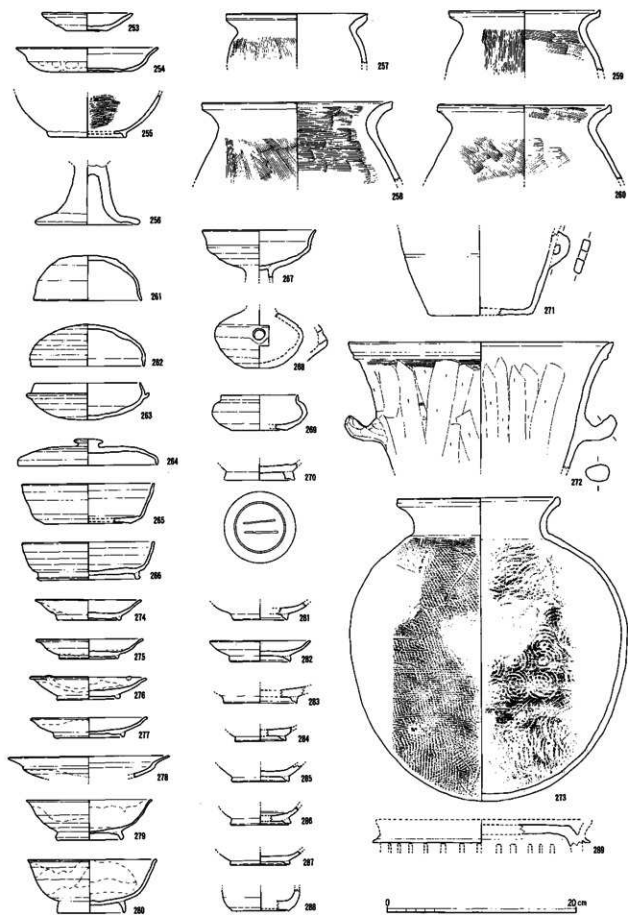
甔(272)は口縁端部を肥厚させて外面に縁帯をつくる。体部外面には断面楕円形の把手がつき、内面は下から上へヘラケズリされる。

甔(273)は口径17.2cm、体径29.3cm、器高32.1cmを測る。口頸部はやや丸みをもちつつ外反し、口縁端部は肥厚する。球形の体部の外面は平行タキ後カキメが施され、内面には同心円状のアテ具痕が見られる。

円面硯(289)の陸部推定径は23cmである。長方形の透かしをもつと考えられる。

灰軸陶器(274~280) 皿(274~277)は、口径11.2~12.4cm、器高2.1~2.7cmを測る。体部全体に僅かに丸みをもつか、直線的に開くものである。高台は三日月高台の様相を残すが、端部は潰れや、軸着による剝離のため不明瞭なものもある。施軸は口縁部を中心に潰け掛けされる。276は四輪花をもつ輪花皿である。278は口径17.0cmの段皿である。

碗(279)は口径13.2cm、器高4.3cmを測る。体部の張りはやや弱く、三日月高台が貼付される。深碗(280)は口径13.6cm、器高5.9cmを測る碗である。



第46图 包舍层出土遗物实测图1 (1:4)

体部下半に丸みをもち、細帯で高い高台が付く。

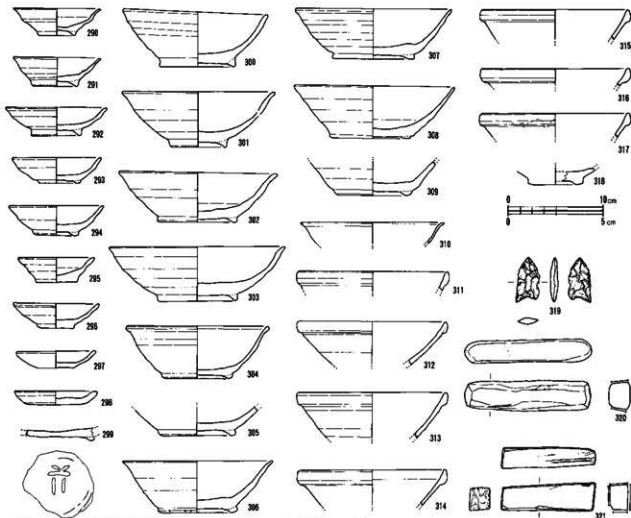
緑釉陶器(281~288) 281は底径6.4cmを測る碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、高台は根太で端面の凹むものである。猿投窯編年の折戸53号窯式期、都城出土土器編年の平安京Ⅱ一新に併行しよう。282は口径11cm、器高2.3cmを測る皿である。体部は内湾気味に外傾し、口縁部は直線的に延びて納まる。傾斜面化した高台が付く。猿投窯編年の折戸53号窯式期、都城出土土器編年の平安京Ⅲ一古に併行しよう。283は底径7.8cmを測る碗である。体部は内湾し、傾斜面化した高台が付く。猿投窯編年の折戸53号窯式期、都城出土土器編年の平安京Ⅱ一新~Ⅲ一古に併行しよう。284は底径5.5cmを測る碗、若しくは皿である。細目で端面が凹む高台をもつ。底部内面の見込みに凹線が施される。猿投窯編年の折戸53号窯式期、都城出土土器編年の平安京Ⅲ一古に併行しよう。285は底径6.2cmを測る碗である。

根太の変形長角高台をもつ。見込みに細い凹線が施される。猿投窯編年の折戸53号窯式期、都城出土土器編年の平安京Ⅱ一新~Ⅲ一古に併行しよう。286・287は底径7.0cm・6.4cmを測る碗である。根太で端面が凹む高台をもつ。見込みに凹線がめぐる。286の底部外面には爪状凹痕が見られる。猿投窯編年の折戸53号窯式期、都城出土土器編年の平安京Ⅱ一新~Ⅲ一古に併行しよう。288は底径6.1cmを測る。体部内面は、へら状の工具によってロクロナデされる。無高台である。

山茶碗(290~309) 小碗(290~296)は高台を有する290~294があり、295~297は無高台である。

290は口径9.2cm、器高2.9cmを測る。断面逆三角形の高台をもち、口縁部は外反する。藤澤編年第3型式に相当する。291~294は藤澤編年第4型式、295~297は藤澤編年第5型式に相当する。

小皿(298)は口径8.8cm、底径6.0cm、器高1.8



第47図 包含層出土遺物実測図2(319のみ1:2、他は1:4)

cmを測る。藤澤編年第6型式以降に相当しよう。

碗(299~309) 299は碗の底部片である。外面に墨痕が見られるが、判読は不能である。

碗(300・301)は体部下方に丸みをもち、口縁部は緩やかに外反する。藤澤編年第3型式に相当する。302は藤澤編年第4型式に相当する。303の高台端部には割痕が明瞭に残る。藤澤編年第4型式~第5型式に相当する。304はやや薄い底部をもち、口縁端部に面をもつ。藤澤編年第5型式~第6型式に相当する。305~309は藤澤編年第5型式に相当する。305~307の見込みには凹面が巡る。

磁器(310~318)は白磁碗である。310は口縁部を外反させ端部を水平にするものである。推定口径15.1

cmを測る。森田・横田編年の碗V-4類に相当する。311~317は口縁部を玉縁にするもので、口径16cm前後を測る。森田・横田編年の碗IV-1類に相当する。318は内反りの削りだし高台である。底径6.0cmを測る。森田・横田編年の碗IV-1類に相当する。時期は、12世紀中葉前後であらう。

石製品(319~321) 石鎌(319)は凹基無茎式のサスカイト製である。側縁は上部で屈曲し、直線的に基部に至るものである。脚部の形態は尖鋭で、基部の挟りが奥のみ丸くなる。挟りの深さは浅い。表面に割痕が見られる。

砥石(320・321)のうち、砂岩で表・裏、二面を利用する320と、頁岩で四方面を利用する321がある。

(註)

- ① 相崎彰一 『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ』愛知県教育委員会 1983年
- ② 『古代の土器1 郡城の土器集成』古代の土器研究会 1992年
以下、藤輪陶器の編年については②を使用
- ③ 藤澤良祐 『瀬戸古窯跡群Ⅰ』『瀬戸市民俗資料館研究紀要Ⅰ』1982年
以下、山茶碗の編年については同書を使用
- ④ 高宮歴史博物館 榎村寛之氏、文化課系史編さん担当 小林 秀氏のご教示による。
- ⑤ 藤輪陶器については財団法人京都市埋蔵文化財研究所 平尾政幸氏ほかの方々のご教示を得た。
- ⑥ 横田賢次郎・森田勉 『太宰府出土の中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として』『九州歴史資料館研究論集』
4 九州歴史資料館

IV 遺構・遺物のまとめと考察

調査の結果、高井A遺跡は奈良時代から平安時代初期と、平安時代末期から鎌倉時代初期を中心とする集落跡であることが分かった。

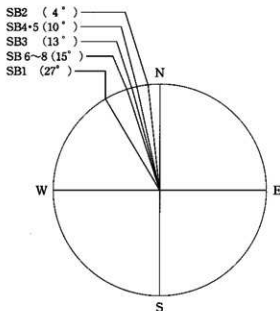
遺構は弥生時代から平安時代まで存続する落ち込みとも考えられる自然流路と、奈良時代から平安時代初期、平安時代末期から鎌倉時代初期の掘立柱建物群、溝、土坑である。

また、遺物では地域性や特殊性を見せる多種多様の遺物の他、「井於」と記された墨書土器が3点出土したことは注目される。

以下、今回の調査で明らかになったことを、調査資料に基づいて簡単に触れまとめたい。

1. 弥生時代の遺物

弥生土器はS D30出土の11~14とS D32出土の212・213がある。12~14・212は口縁部に2条の凹線が施される受口状口縁部をもつ細頸壺で概ね、第IV-2様式に比定できる。11は破片であるため確定的な記述とは言い難いが、その赤褐色の焼成、頸部の押圧突起は弥生時代I期-1~3のいわゆる「巫流遠賀川式壺」に似る。なお、中ノ川流域で確認できる弥生時代の諸遺跡は中期でも後半に入ってからとされており、破片ではあるが、非常に興味深い資料



第48図 掘立柱建物棟方向

である。

調査区において遺構は確認されていないが、当遺跡の北東に位置する高井B遺跡では、弥生時代の土坑が3基検出され、その100m北の拜原遺跡でも弥生時代に属する石蔵が1点出土している。また、1.5km程北の丘陵上の南谷遺跡では弥生時代後期前半の竪穴住居や溝が確認されている。上記のことから、当遺跡周辺にも南谷遺跡のような高地性を匂わす集落が存在した可能性が窺い知れる。したがって、溝から出土した土器が流れ込みと考えれば、これらを使用した集団の居住区は、北東の高井B遺跡や北西の丘陵上に想定されよう。

2. 掘立柱建物について

(1) 飛鳥・奈良時代~平安時代初期(第49図②)

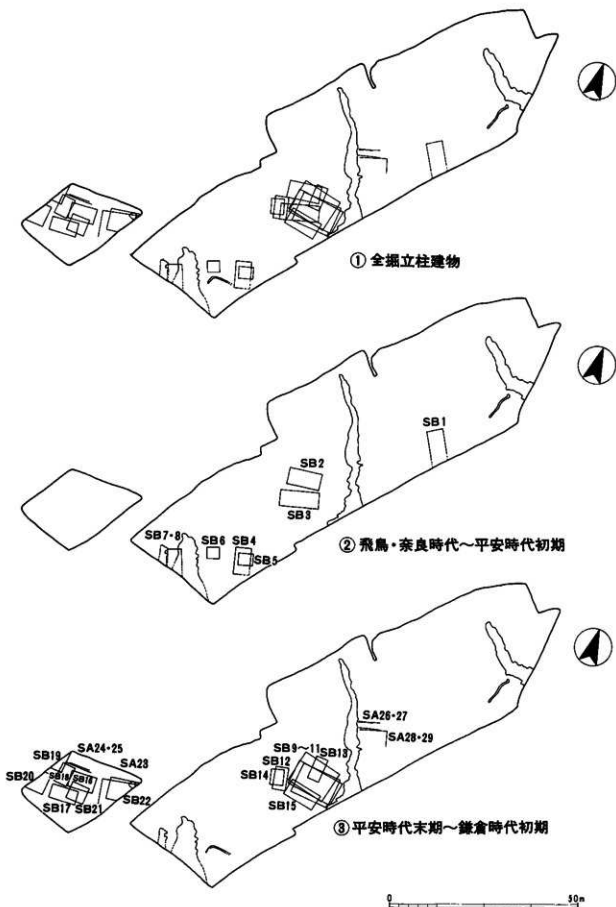
SB1~8の8棟が検出された。

建物方向は東辺を基準として分類すれば、北からの振れが27°のA群(SB1)、振れが4°~15°に収まるB群(SB2~8)に大別できる。B群は北からの振れが西へ5°に収まるB i (SB2)、10°に収まるB ii 群(SB4・5)、13°~15°に収まるB iii 群(SB3・6~8)にさらに細分できる。(第48図)

B群のうち、SB2・3は4×2間・5×2間と大型であり、主屋建物であろう。規模も同程度で、近接しており建て替えも想定できる

SB4とSB5は、重複するため同時期の存在はありえない。

また、建物方向は緩斜面上に占地する住居で地形的な制約を受けるためか、建物の長辺は等高線の走る方向に沿っており、床面の傾斜角度は上段のSB1付近で2°~4°、中段のSB2・3付近で5°前後である。下段のSB4~8付近では7°~10°と急になり、斜面での住居設営にあたっての床面積の確保と平面プランとの関係は、極めて重要であったと考えられる。しかし、SB4は長辺が等高線の走る方向に沿って直交しており、高低差は1.5mある。当然、主屋建物とは考え難く、SB2・3の付属建



第49図 時代別掘立柱建物配置図 (1 : 1,000)

SB No	規 模				柱間寸法 (m)		棟 方 向		時 代	出 土 遺 物
	間 敷 (形式)	桁 行 (m)	梁行 (m)	床面積 (㎡)	桁 行	梁 行	方 向	方 位		
1	4以上×2 (側柱)	7.8 以上	4.2	32.76 以上	2.0+1.9+2.1 2.1+1.8+1.8+2.1	2.1等間	南北 (棟)	N27° W	奈良後期 ～平安初期	土師器・製塩土器・須恵器 柱根
2	4×2 (側柱)	8.7	4.5	39.15	1.8+2.1+2.4+2.4	2.1+2.4	東西 (棟)	E 4° N	奈良後期 ～平安初期	須恵器・土師器
3	5×2 (側柱)	8.4	4.2	35.28	2.1等間	2.1等間	東西 (棟)	E13° N	奈良後期 ～平安初期	須恵器・土師器
4	4×2 (側柱)	7.2	4.2	30.24	1.8等間	2.1等間	南北 (棟)	N10° E	飛鳥 ～平安初期	土師器・須恵器・柱根
5	2×2 (総柱)	3.9	3.6	14.04	1.8+2.1	1.8等間	東西 (棟)	E10° N	飛鳥 ～平安初期	土師器
6	2×2 (総柱)	3.3	3.0	9.90	1.65等間	1.5等間	東西 (棟)	E15° N	飛鳥 ～平安初期	土師器・須恵器
7	3以上×2 (側柱)	4.2 以上	4.0	16.80 以上	1.5+1.2+1.5	4.0	南東 (棟)	N15° W	奈良以降	須恵器・土師器
8	3以上×1 (側柱)	3.3 以上	4.0	13.20 以上	1.8+1.5	1.9+2.1	南東 (棟)	N15° W	奈良以降	須恵器・土師器
9	5×4 (側柱)	10.5	8.7	91.35	2.1等間	2.1+2.4+ 2.4+1.8	東西 (棟)	E15° S	平安末期 ～鎌倉初期	土師器・須恵器・灰輪陶器 黒色土器・製塩土器・山茶碗
10	6×3 (総柱)	12.6	6.6	83.16	1.8+2.4+2.4+2.4 +2.1+1.5	2.4+2.1+ 2.1	東西 (棟)	E10° S	平安末期 ～鎌倉初期	土師器・須恵器・灰輪陶器
11	5×4 (総柱)	10.5	8.1	85.05	2.1等間	2.4+1.8+ 1.8+2.1	東西 (棟)	E 7° S	平安末期 ～鎌倉初期	土師器・須恵器・製塩土器 瓦・土師・灰輪陶器
12	3×2 (側柱)	6.0	3.4	20.40	2.4+2.1+1.5	1.8+1.6	南北 (棟)	N 9° W	平安末期 ～鎌倉初期	土師器・須恵器・製塩土器 灰輪陶器
13	3×2 (側柱)	6.3	3.3	20.79	2.4+1.8+2.1	1.8+1.5	南北 (棟)	N 9° E	平安末期 ～鎌倉初期	須恵器・土師器・山茶碗
14	2×2 (総柱)	4.2	3.5	14.70	2.1等間	1.8+1.7	南北 (棟)	N12° W	平安末期 ～鎌倉初期	須恵器・土師器・灰輪陶器 製塩土器
15	4×2 (側柱)	8.7	4.5	39.15	2.1+2.1+2.1+2.4	2.1+2.4	東西 (棟)	E12° S	平安末期 ～鎌倉初期	須恵器・土師器・鉄滓
16	4×3 (側柱)	6.9	4.2	28.98	1.8+1.5+1.5+2.1	1.5+1.2+ 1.5	東西 (棟)	E-W	平安末期 ～鎌倉初期	須恵器・土師器・山茶碗
17	4×2 (側柱)	7.2	3.6	25.92	1.8等間	1.8等間	東西 (棟)	E-W	平安末期 ～鎌倉初期	
18	3×2 (側柱)	5.4	3.6	19.44	1.8等間	1.8等間	南北 (棟)	N 7° E		
19	2以上× 1以上 (総柱)	3.0 以上	1.5 以上	4.50 以上	1.5等間	1.5等間	南北 (棟)	N 7° E		
20	4×2以上 (側柱)	5.7	3.6 以上	20.52 以上	1.2+1.5+1.5+1.5	1.8等間	南北 (棟)	N 7° E		
21	2×2 (側柱)	4.8	4.5	21.60	2.4等間	2.25等間	東西 (棟)	E 6° N	平安末期 ～鎌倉初期	須恵器・土師器・山茶碗
22	3以上×3 (側柱)	6.6 以上	5.7 以上	37.62 以上	2.1+2.1+2.4	1.8+2.1+ 1.8	東西 (棟)	E 5° S		須恵器・土師器

第4表 掘立柱建物一覽

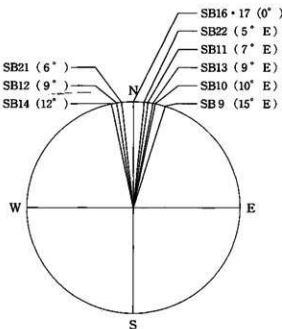
物と想定できる。SB5・6は2×2間の総柱建物であり倉庫であろう。

SB6とSB7・8は同方向を向く建物で同一の建物群を構成するものと考えられ、相互の密接な関係を思わせる。SB7・8は建て替えが想定されるが、建物型式の問題に関しても、桁行の柱間が狭いことや当遺跡の掘立柱建物の中では異質であり、興味深い点が多い。

ところで当遺跡は舌状に延びる丘陵裾部にあり、調査区はその北西の際に位置する。集落形成期の造成による削平も考えられるが、当然遺跡はSB1の東へ広がる想定できる。さらに、谷地形によってできたSD30・31はそれぞれ東と南に分流し、SD30・A群・SD31・B群という配置となり、A群(SB1)を挟むような居住区域の区画として利用されたのではなかろうか。こういった地形を考慮に入れば、棟方向に関するA群(SB1)とB群(SB2～8)の棟方向の分別は地形に合った極めて自然選択的であったと推定できると共に、SD30・31によって区画された屋敷地A群、B群の存在が考えられるであろう。

(2) 平安時代末期～鎌倉時代初期(第49図③)

SB9～22の14棟が検出された。なお、時期不明であるが、柱列(SA28・29)はSB13・15と同一の建物方向をしめす。



第50図 掘立柱建物棟方向2

建物方位の東辺に基準にしてみると、北からの振れが東へ0°～15°に収まるA群(SB9～11・13・15～20・22)、振れが西へ6°～12°に収まるB群(SB12・14・21、SA28・29)に大別できる。(第50図)

A群のうち、SB9～11は少なくとも3回の建て替えが考えられる主屋建物であろう。建物の南側は遺構密度が薄く、作業場的な前庭の存在も想定できる。また、ほぼ同じ位置に再築されていることや建物の規模等において継続性が強く、血縁的要素の強い屋敷が窺い知れることから、この地が比較的安定した支配下に置かれていたものと考えられる。

SB13・15はSB9～11と重複するが、その前後関係は不明である。

SB12・14は小型の建物で倉庫と想定できよう。また、SB12とSA29、SB14とSA28の建物方向は同一方向であり、相互に密接な関係を思わせる。なお、SA28・29を掘立柱建物と想定すれば、同一建物群とも考えられる。

SB18～20は、同一方向の建物群で、相互に密接な関係を思わせる。ただし、SB19・20は調査区外へ渡るため居住区画等、詳細は不明瞭である。またSB18とSB19は重複するため同時期の存在はありえない。

この時期の集落形成期における居住設営は、斜面からの堆積や、造成による削平を鑑みて、床面積の確保が容易にできていたと推測すれば、建物方向は直接的に、地形の制約や屋敷地の区画に関係するのではなく、集落の居住形態における、より規制の強い計画性と機能性を考慮した結果の反映と見れよう。

また、調査区における遺構密度を概観してみた場合、遺構はSB9～15とSB16～22付近に極めて集中しており、それ以外は希薄である。さらに、包含層遺物の地区別出土状況でも、SB9～15とSB16～22付近を中心に密集して分布あり、掘立柱建物によって構成された屋敷地の様相が窺い知れる。

3. SD30・31出土の土器

SD30・31から出土した土器は図示した分だけで189点を数え、遺物総数の約2/3を占める。出土遺

物は奈良時代から平安時代に相当するものが多い。SD30・31出土の遺物は純粋な一括資料とはいえないが、概ね分量が揃った器種がまとまって出土しており、ある程度土器の流れが明らかになってきたので、各遺構出土の主な遺物を列記し、以下のようまとめた。

(1) SD30出土遺物

土師器

杯は、口縁部が外反し、端部はやや内湾気味のものがあり、斎宮編年の奈良後期から平安初期に相当すると考えられる。皿は、奈良時代の様相を残すタイプで、口縁端部を肥厚させ内側に丸く納める。斎宮編年の平安初期に相当すると考えられる。高杯は脚部に8面の面取りが施され、斎宮編年の奈良中期から奈良後期に相当すると考えられる。壺は、小型で体部が球体のもの、体部に比べ口縁部の内側が肥厚するものがある。調整は体部外面を縦方向か、斜め方向にハケ調整するものと、内面は横方向にハケ調整するものと、ヘラケズリ、若しくはナデ調整するものがある。30を除きその他は、口縁部片のみの出土であるため確定するには無理が生じるが斎宮編年では概ね飛鳥時代から奈良前期、奈良中期から後期、奈良後期から平安初期に大別できる。

須恵器

杯は、古墳時代の伝統的な様相を残す杯Hも若干みられたが、そのほとんどは贗宝珠つまみが付き、かえりのないものや、有台杯であり、猿投窯編年では、岩崎17号窯式から高蔵寺2号窯式までに相当すると考えられ、飛鳥時代から奈良中期までに収まるものであろう。高杯は、透かしを穿つものと、穿たぬものがあり、猿投窯編年では岩崎17号窯式から岩崎41号窯式までに相当するものと、鳴海NN-32号窯式から折戸10号窯式に相当するものが見られる。瓶には、猿投窯編年の東山50号窯式に相当する横瓶と、岩崎17号窯式から岩崎41号窯式までに相当する平瓶が見られる。鉢は口縁部に縁帯をもつもので、猿投窯編年の岩崎17号窯式から高蔵寺2号窯式に相当すると考えられる。壺は、基部から緩く外反し、長めの口縁部をもつもの、短めの口縁部が弱く屈曲するものがある。猿投編年では岩崎17号窯式から鳴海NN32号窯式に相当すると考えられる。

施釉陶器

緑釉陶器は猿投編年では折戸53号窯式から井ヶ谷78号窯式、都城出土土師器編年の平安京Ⅲ-1古に併行する。

(2) SD31出土遺物

土師器

杯は、器壁がやや厚い斎宮編年の奈良前期から中期に相当できるもの、底径が小さく長めの口縁部が外方へ開く平安初期に相当できるものが見られる。碗は平らな底部から内湾気味に延び、口縁端部をヨコナデするもの、体部内面に粗い暗文が見られるものがある。斎宮編年の奈良前期から奈良中期と、平安初期に相当すると考えられるものに大別できる。皿は概ね、口縁端部を内側に丸く納めるもので、奈良前期から後期に相当すると考えられる。壺は体部に比べ口縁部の内側が肥厚するもの、やや長めの口縁部が「く」の字に強く屈曲するものがある。調整は体部外面を縦方向か、斜め方向にハケ調整するもの、内面は横方向にハケ調整するものと、ヘラケズリ、若しくはナデ調整するものがある。斎宮編年では飛鳥から奈良前期、中期から後期、後期から平安前Ⅱ-1古に相当すると考えられるものと大別できる。

須恵器

杯は、猿投窯編年の東山50号窯式から岩崎17号窯式、岩崎41号窯式から高蔵寺2号窯式、高蔵寺2号窯式から岩崎25号窯式、折戸10号窯式から井ヶ谷78号窯式に相当するものに大別できるが、岩崎41号窯式から岩崎25号窯式に相当すると考えられるものが多いようである。壺には猿投窯編年の岩崎41号窯式から高蔵寺2号窯式に相当する短頸壺、岩崎17号窯式、岩崎17号窯式に相当する長頸壺が見られる。壺はやや強く外反するものと、短い口頸部が弱く屈曲するものがある。猿投窯編年では岩崎17号窯式から鳴海NN32号窯式に相当すると考えられる。

また、不明土製品は猿投窯編年の岩崎17号窯式ころから見られる土製品にも似ており、非常に興味深いものであるが、具体的な検討はさらなる資料の充実を待ちたい。

施釉陶器

灰釉陶器は猿投窯編年の折戸53号窯式から東山72

窯式に相当すると考えられる。緑釉陶器は猿投窯編年の折戸53号窯式、都城出土土師器編年では平安京Ⅲ-古に併行する。

山茶碗

藤澤編年の第4型式-古段階に相当すると考えられる碗がある。

上述の資料からSD30・31出土土師の時期を概観し、実年代を与えれば下記ようになる。

土師器は斎宮編年の飛鳥から平安前Ⅱ-古となり7世紀初頭から9世紀半ばに比定できる。(SD30・31)

須恵器は猿投窯編年の岩崎41号窯式から井ヶ谷78号窯式となり、7世紀末から9世紀第1四半期に比定できる。(SD30・31)

施釉陶器は猿投窯編年の折戸53号窯式から東山谷72号窯式となり、10世紀初頭から10世紀末迄に比定できる。(SD31)

山茶碗は藤澤編年の第4型式-古段階で12世紀前半頃に比定できる。(SD31)

SD30・31出土の土器は上記の点から、掘立柱建物の時期に合致するものであり、ある時期に廃棄されたと推定できる。したがって、SD30・31は堆積と流出を繰り返しながら、集落形成期には廃棄場として利用されていたと推定できよう。

○墨書土器文獻一覽

1. 柚井遺跡 (桑名郡多度町)
鈴木敏雄『三重県考古誌考I 桑名郡多度町柚井貝塚誌考 全』
(『三重県郷土資料叢書33』1971)
2. 杉屋内遺跡 (松阪市深長町)
森川常厚ほか『杉屋内遺跡』(『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告I』
-本文編-三重県教育委員会、1989.3)
3. 森脇遺跡 [1次 (上野市教育委員会調査)] (上野市市部)
前川依久雄・田中秀和『昭和63年度(第1次)森脇遺跡発掘調査報告』(上野市遺跡調査会、1995.3)
4. 森脇遺跡 [2次 (上野市教育委員会調査)] (上野市市部)
前川依久雄『平成元年度(第2次)森脇遺跡発掘調査報告』(上野市遺跡調査会、1990.3)
5. 森脇遺跡 [1・2次 (三重県教育委員会文化課・三重県埋蔵文化財センター調査)] (上野市市部)
森川常厚『森脇遺跡(現地説明会資料)』(三重県教育委員会、1988)
森川常厚『森脇(第2次)遺跡(現地説明会資料)』(三重県教育委員会、1989)
6. 『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』(三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター1993.3)
7. 三重県宮崎調査事務所編1986「第67次調査」『史跡宮崎跡』
(三重県教育委員会
三重県宮崎調査事務所1986.3)
8. 三重県宮崎調査事務所編1987「第72次調査」『史跡宮崎跡』
(三重県教育委員会
三重県宮崎調査事務所1987.3)
9. 三重県宮崎調査事務所編1987「第73次調査」『史跡宮崎跡』
(三重県教育委員会
三重県宮崎調査事務所1987.3)
10. 三重県宮崎調査事務所編1990「第84次調査」『史跡宮崎跡』
(三重県教育委員会
三重県宮崎調査事務所1990.3)

4. 「井於」と記された墨書土器

SD30・31出土の墨書土器には須恵器杯の底部外面に「井於」と記されたものが2点、蓋の口縁部内面に「井於」と記されたものが1点、杯の底部外面に「井」と記されたものが1点、杯・皿の底部外面に「井□」記されたものが1点ある。猿投窯編年では高蔵寺2号窯式から岩崎25号窯式に相当すると考えられる。「井」という墨書は全国的に平安時代になって数多く見られるようであるが、三重県では「井」と記した墨書の事例は奈良時代のものが最も古く、当遺跡以外では斎宮跡、森脇遺跡に見られる。斎宮跡は包含層から須恵器2点が出土しており、このうち杯の底部外面に記されたものが1点、蓋の外面に記されたものが1点ある。森脇遺跡では井戸から須恵器杯の底部外面に記されたものが1点ある。

集落跡でしばしば見つかる墨書土器の性格は、個人名、地名、吉祥句等があげられる。「井」は吉祥句ではないが呪術に使われたのではないかと、いわれている墨書である。当遺跡の「井」を「井戸」の井とするならば、湧き水に対する呪術的な要素が窺える。さらに「於」には「生まれる」という意味があり、「井於」=「水が生まれる」と考えられ、湧き水を想定させる。さらに、水に対する恐敬の念は色濃くなる。また、井於郷という地名の由来から

遺跡名	器種(数)	器形	出土遺構	時代	釈文	位置	文献番号
袖井遺跡	灰釉陶器 (1)	碗		平安時代	「井上」	底部外面	1
杉垣内遺跡	土師器 (1)	杯身	包含層	奈良時代後期 ～平安時代前期	「井尻」	体部外面 ～底部外面	2
森脇遺跡 (1次)	須恵器 (1)	杯蓋	包含層	奈良時代	「大井」	蓋外面	3
市教委調査	須恵器 (1)	杯身		奈良時代	「大井」?	底部外面	3
	須恵器 (3)	杯身	溝	奈良時代	「大井」?	底部外面	3
	須恵器 (3)	杯身	包含層	奈良時代	「大井」	底部外面	3
	須恵器 (1)	杯身	包含層	奈良時代	「大井」	体部外面	3
	須恵器 (1)	杯蓋	Pit	奈良時代	「大井」 「千」重ね書き	蓋外面	4
森脇遺跡 (2次)	須恵器 (1)	杯身	包含層	奈良時代	「大井」	底部外面	4
森脇遺跡 (1次)	須恵器 (1)	杯身	包含層	奈良時代 ～平安時代	「大井」	底部外面	5
	須恵器 (1)	杯蓋	Pit	奈良時代前期 ～奈良時代中期	「大井」	蓋外面	5
	須恵器 (1)	杯蓋	包含層	奈良時代前期 ～奈良時代中期	「大井」	蓋外面	5
	須恵器 (1)	杯身	井戸	奈良時代	「井」	底部外面	5
	須恵器 (1)	杯身	Pit	飛鳥時代 ～奈良時代前期	「大井」	体部外面 ～底部外面	5
森脇文化 センター	須恵器 (1)	杯蓋	井戸	奈良時代	「大井」	蓋外面	5
	須恵器 (1)	杯蓋	溝 (自然流路)	奈良時代	「井」	蓋内面	6
	須恵器 (1)	杯身	包含層	奈良時代	「井」	底部外面	7
	須恵器 (1)	杯身	包含層	平安時代前期	「井」	底部外面	8
	須恵器 (1)	杯蓋	包含層	奈良時代	「井」	蓋外面	9
84次調査	土師器 (1)	杯身	溝	平安時代前期	「井」	底部外面	10
	土師器 (1)	杯身	溝	平安時代前期	「井」	底部外面	10
	土師器 (1)	杯身	溝	平安時代前期	「井」	底部外面	10
高井A遺跡	須恵器 (2)	杯身	溝 (自然流路)	奈良時代	「井於」	底部外面	
	須恵器 (1)	杯蓋	溝 (自然流路)	奈良時代	「井於」	蓋内面	
	須恵器 (1)	杯身	溝 (自然流路)	奈良時代	「井口」	底部外面	
	須恵器 (1)	皿	溝 (自然流路)	奈良時代	「井口」	底部外面	
	須恵器 (1)	杯身	溝 (自然流路)	奈良時代	「井」	底部外面	

第5表 皇雷土器一覧

「井於」を「いのえ」と判読でき、人名説も考えられるが、一般的に墨書土器の使用場所と廃棄場所は、関係が深いとされており、「井」の墨書が井戸、または溝から出土した例は、県内の遺跡においては森脇遺跡の「井」、「大井」の墨書、蔵田遺跡の「井」の墨書、斎宮跡の第84次調査の「井」の墨書^⑩が挙げられる。高井A遺跡でも溝からの出土であることから、ここでは水に対する呪術的な意味で投機されたと推定したい。なお、「井」の文字の入った墨書を斎宮跡出土の墨書土器一覽と、三重県下出土の墨書土器一覽を参照し、管見にふれたもののみ第5表に示した。

5. 包含層出土遺物

包含層出土遺物の器種別総数は、図示したものを含め土師器8,099点、須恵器5,353点、灰釉陶器386点、緑釉陶器18点、山茶碗1,809点、白磁9点、青磁1点、弥生土器25点、黒色土器132点、瓦10点土錘3点、砥石2点、石鎌2点であった。ただし、図示できない遺物については、細片を1点として数えたものである。(第6表)

遺物整理時の所見では、斎宮偏年の平安後I～IIに比定できる土師器・鍋や、猿投編年^⑪の東山50号窯式に比定できる体部と口縁部の間に稜をもつ須恵器・杯蓋や、岩崎17号窯式に比定できるかえりの極めて短い蓋も見られた。

また、調査時の所見から調査区の中段、下段においてはかなり厚い堆積が認められおり、遺跡の保存状態は良いと考えられる。そこで、掘立柱建物の

変遷を包含層遺物から概観してみると、概ねその分布から符合することが分り、掘立柱建物の変遷の傍証となると考えられる。(第51図)

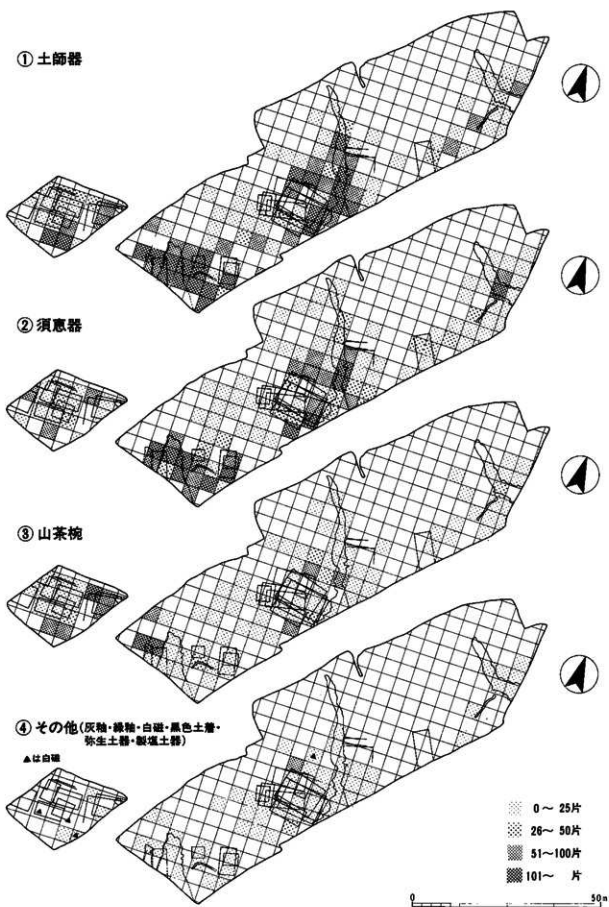
土師器		須恵器		山茶碗	
器形	数量	器形	数量	器形	数量
碗	11	杯	1056	碗	1751
皿	76	盤	1	小碗	41
杯	64	高杯	51	不明	17
高杯	13	甕	2756	合計	1809
甕	2352	壺	1		
鍋	21	瓶	20	その他	
飯	11	飯	3	器種	数量
羽釜	18	越	3	白磁	9
不明	5533	鉢	27	青磁	1
合計	8099	不明	1435	黠埴	132
		合計	5353	黠埴	25
				瓦	10
				土錘	3
				砥石	2
				石鎌	2
				合計	184

緑釉陶器		灰釉陶器	
器形	数量	器形	数量
碗	7	碗	364
皿	1	皿	15
碗 or 皿	10	瓶類	7
合計	18	合計	386

第6表 器種別遺物数量

(註)

- ⑩ 上村安生「壺形土器を中心とした凹線紋出現前後の土器について」『研究紀要第四号』三重県埋蔵文化財センター 1995年
 ⑪ 小宮文裕ほか『南谷遺跡・相生遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1995年
 ⑫ 『三重県斎宮跡調査事務所年報1984 史跡斎宮跡発掘調査概報』三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所
 ⑬ 榎村寛之『黙りから覚めた文字たち—斎宮の墨書土器—』斎宮歴史博物館 1997年
 ⑭ 『三重県埋蔵文化財年報19』三重県教育委員会 1989年
 ⑮ 斎宮歴史博物館 榎村寛之氏のご教示による。
 ⑯ 文化課史編さん担当 小林 秀氏のご教示による。
 ⑰ 米山浩之「N. 蔵田遺跡」『鞍馬道23号中野遺跡埋蔵文化財発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター 1997年
 ⑱ ⑳に同じ
 ㉑ 久保勝正「三重県下縄文時代初期石器群の一様相—志那白山町八幡遺跡の石器群」『斎宮歴史博物館研究紀要—』斎宮歴史博物館 1992
 ㉒ ㉑に同じ



第51図 包含層遺物数量分布 (1 : 1,000)

No.	登録番号 (R No.)	遺 蹟 区 出 土 位 置	種 類 (器 種)	法 基 (cm)		観 察 事 項 成形・調査技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存 度	備 考
				口 径 (cm)	器 高						
1	085-02	SB1P1h (B-T8)	底面磨 風	(9.4)		体 部 ロクロナデ	SPB5/1 青灰	やや粗	良	底面片	
2	085-06	SB3P1h (C-B24)	滑肉+彫 土	長 4.7 幅 0.75 重 14.2g		天舟部 外口ロケズリ2/3内口 ナデ 口縁部 ロクロナデ	10YR5/3 浅黄	並	並	ほぼ完全	
3	095-01	SB7P1h (C-H19)	原形磨 研	13.2		天舟部 外口ロケズリ2/3内口 ナデ 口縁部 ロクロナデ	10BG5/1 青灰	やや粗	並	1/5	内面磨付番
4	085-05	SB8P1h (C-B25)	灰釉陶器 皿	14.2	2.9	口縁部 ロクロナデ	10Y7/1 灰白	～1mm 網	良	端部1/3 縁部-底面1/4	裏面 内面使用成
5	006-10	SB9P1h (D-C2)	輪削陶器 碗の口縁	(6.5)		内 面 ミダキ・ロクロナデ	5Y8/3 淡黄	並	並	底面片	輪削0.5GY7/6 外周3又トナシ成
6	085-04	SB9P1h (D-B2)	土磨 皿	12.2	2.5	口縁部 ヨコナデ 底 部 ユビオサエ・ナデ	2.5Y8/3 淡黄	やや粗	良	1/4	
7	065-01	SB9P1h (C-C25)	磨挽土製品 増焼	15.7	5.5	不明瞭	2.5Y8/2 灰白	～3mm 砂粒含	軟	4/5	断面 紙分付番
8	096-01	SB10P1h (D-C2)	磨挽土器 皿	15.0	6.0	外 面 ユビオサエ 内 面 ヨコハケ	10YR8/4 浅黄緑	～4mm 砂粒含	やや粗	1/10	
9	094-03	SB10P1h (C-C25)	瓦 平瓦	長11.1 幅 9.2	厚2.2		10Y8/1 灰白	磨	軟		
10	094-02	SA22P1h (C-F14)	山形陶 碗	17.0	5.0	口縁部 ロクロナデ 底 部 内面ミダキ 外面微状灰度	N8/ 灰白	磨	良	1/2	内面磨挽 微焼
11	087-06	SD29 (B-N9)	赤生土器 蓋			風化により不明瞭	7.5YR8/4 こぶし黄	～2mm 砂粒多 含やや粗	軟	体面片	
12	045-02	SD29 (B-P11)	赤生土器 網罟蓋	11.3		口縁部・体部外面 クシノ刺状灰 口縁部 ヨコナデ 裏面内面ヨコハケ ナデ	2.5Y7/3 並	～2mm 砂粒含	並	口縁部 ～底面	
13	047-02	SD29 (6磨)	赤生土器 網罟蓋	13.0		風化により不明瞭	10YR8/1 灰白	並	並	口縁部のみ	
14	045-03	SD29 (B-N10)	赤生土器 広口壺	14.7		風化により不明瞭	10YR8/3 浅黄緑	～7mm 小石含	並	口縁部1/2	
15	045-05	SD29 (C-G19)	土磨 碗	11.0		風化により不明瞭	10YR8/2 灰白	～2mm 砂粒含 やや粗	並	1/2	口縁部外面に黒 あり
16	044-02	SD29 (B-P11)	土磨 杯身	13.9	3.6	口縁部 ヨコナデ 底 部 外面ユビオサエのちナゲ内面 ナデ	7.5YR7/2 灰白	～2mm 砂粒含	並	2/3	
17	043-04	SD29 (B-R10)	土磨 杯身	15.2	3.3	風化により不明瞭	7.5YR 明焼灰	～1mm 砂粒含 やや粗	並	口縁部1/3 体部完全	
18	043-03	SD29 (B-R10)	土磨 皿	13.6	2.0 ～2.3	口縁部 ヨコナデヘラミダキ 底 部 外面ヘラミダキ内面網罟状陰文 ユビオサエ・ケズリ	7.5YR8/4 浅黄緑	並	良	ほぼ完全	
19	045-04	SD29 (6磨)	土磨 高杯	16.0	2.6	風化により不明瞭	10YR7/3 こぶし黄	～1mm 砂粒含	並	1/2強	
20	047-05	SD29 (6磨)	土磨 高杯	(14.0)		脚 部 外面ケズリのちナゲ 内面ナゲ	10YR8/3 浅黄緑	～6mm 小石含	並	断面片	
21	067-03	SD29 (B-P10)	土磨 壺			口縁部 ヨコナデ 底 部 ハケメ	10YR7/1 灰白	やや粗	並	口縁部片	
22	048-01	SD29 (B-R10)	土磨 壺	23.6		口縁部 ヨコナデ 体 部 外面ヨコハケのちナゲメハケ 内 面 ヨコハケのちナゲ	10YR8/3 浅黄緑	～7mm 小石多 含やや粗	やや粗	口縁部片	
23	044-05	SD29 (6磨)	土磨 壺	23.0		口縁部 ヨコナデユビオサエ 体 部 外面ナゲメハケ6mm 内 面 ヨコハケのちナゲ	2.5Y8/4 淡黄	～4mm 砂粒含	並	良	口縁部片
24	067-02	SD29 (4磨)	土磨 壺	19.5		口縁部 外面ヨコナデ 内面ヨコハケ 体 部 外面ナゲメハケ	2.5Y8/2 灰白	～3mm 砂粒多 含やや粗	並	口縁部1/3	
25	049-01	SD29 (B-P11)	土磨 壺	26.6		口縁部 外面ヨコナデ内面ヨコナデ メハケ 体部外面ナゲメハケ 6mm/内面ヨコハケ7mm/6mm	5Y8/1 灰白	～3mm 砂粒含	並	口縁部片	
26	049-02	SD29 (B-P10)	土磨 壺	35.8		口縁部 ヨコナデ 体 部 外面ハケメ 内面ヨコハケの ちナゲ	10YR8/3 浅黄緑	～3mm 砂粒含	並	1/5	
27	070-01	SD29 (6磨)	土磨 罎	31.3	23.0	口縁部 ヨコナデ 体 部 外面ケチナゲ5～6mm/cm 内面ナゲ・オサエ	10YR8/2 灰白	～6mm 小石多 含やや粗	並	3/4	
28	046-05	SD29 (B-Q10)	土磨 壺	13.0		口縁部 ヨコナデ 体 部 外面ハケメ	10YR8/2 淡黄	～2mm 砂粒含	並	口縁部片	
29	047-04	SD29 (6磨)	土磨 壺	16.4		口縁部 タナハケのちヨコナデ 体 部 外面ケチナゲ内面ケズリ成	5Y8/1 灰白	～1mm 砂粒含	並	口縁部片	
30	069-01	SD29	土磨 壺	15.4	16.1 (体厚16.8)	口縁部 ヨコナデ 体 部 外面ハケメ7mm/内面工具 ナゲ	2.5Y8/3 淡黄	～3.5mm 砂 粒含やや粗	並	2/3	

第7表 出土遺物観察表I

No	登録番号 (R No)	遺構 区 出土位置	種類 (器種)	法量 (cm)		観察事項 成形・調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
				口径	器高						
31	044-04	SD29 (B-P11)	須恵部 円蓋	10.3	3.4	口縁部 ロクロナデ 天井部 外面へう切のちみ割 内面ロクロナデ	10G5/1 青灰	～7mm 小石 含有やね	良	住び実存	※あり
32	046-06	SD29 (B-Q11)	須恵部 円蓋	11.0		口縁部 ロクロナデ 天井部 外面へう切のちみ割 内面乱ナデ	5B6/1 青灰	並	良	1/3	
33	004-01	SD29 (B-Q11)	須恵部 円蓋	14.2	2.3	口縁部 ロクロナデ 天井部 外面ロクロナズリ2/3 内面ロクロナデ	7.5Y7/1 灰白	並	良	3/4	内面に黒着痕
34	044-05	SD29 (B-Q10)	須恵部 杯	9.6	3.1	口縁部 ロクロナデ 底 面へう切のちみ割 内面乱ナデ	10G4/1 滑青灰	～3mm 砂粒 含有	並	住び実存	
35	046-02	SD29 (B-P11)	須恵部 杯	11.6	3.5	口縁部 ロクロナデ 体 部 外面ロクロナズリ 内面ロクロナデ	8.0Y5/1 赤褐色	～6mm 小石 含有	良	1/3	
36	043-05	SD29 (B-P11)	須恵部 杯	11.8	4.6	ロクロナデ	8.0Y5/1 赤褐色	～1mm 砂粒 含有	良	1/5	
37	047-03	SD29 (B-Q11)	須恵部 杯	(9.2)		底 部 外面ロクロナズリ 内面ロクロナデ	5P26/1 青灰	並	良	底部1/3	
38	001-01	SD29 (B-Q10)	須恵部 蓋	20.9	3.3	口縁部 ロクロナデ 底 部 ロクロナズリ	5Y7/1 灰白	～3mm 砂粒 含有	良	1/2	底部外面に黒着痕
39	004-06	SD29 (6層)	須恵部 杯	12.0	3.8 ～4.4	体 部 ロクロナデ 底 部 糸切痕	5Y6/1 灰	～2mm 砂粒 含有	良	4/5	底部外面に黒着痕
40	043-02	SD29 (B-Q10)	須恵部 杯	(9.2)		底 部 外面ロクロナズリ糸切痕 内 面 ロクロナデ	5Y8/1 灰白	やや粗	軟	底部のみ	底部外面にへう記号
41	002-01	SD29	須恵部 杯	14.1	4.7	体 部 ロクロナデ底部糸切痕 内 面 中心に鋭いナデ	5Y8/1 灰白	～3mm 砂粒 含有	良	1/2	底部外面に黒着痕
42	044-06	SD29 (B-O10)	須恵部 高杯	9.4	10.7	ロクロナデ 脚 部 内面しぼり	5B6/1 青灰	～1mm 砂粒 多含有	良	口縁部 脚部と1/2	平面に自然剥
43	046-04	SD29 (B-O10)	須恵部 高杯	(8.8)		ロクロナデ	10GY7/1 明緑灰	並	並	脚部1/3	
44	044-01	SD29 (4層)	須恵部 高杯	(7.6)		ロクロナデ 脚 部 内面しぼり	10B6/1 青灰	並	良	2/3	
45	043-06	SD29 (B-P11)	須恵部 高杯	(10.6)		ロクロナデ 脚 部 内面しぼり	10B26/1 青灰	並	良	脚部のみ	
46	044-03	SD29	須恵部 平皿	7.8	16.5 (体径16.0)	口縁部 ロクロナデ 体 部 1/2ロクロナズリ・ロクロナデ	10G6/1 青灰	～4mm 砂粒 含有	良	4/5	
47	045-01	SD29 (B-P11)	須恵部 鉢	17.1	11.3	口縁部・体部ロクロナデ 底 部 外面ロクロナズリ	5B4/1 滑青灰	～6mm 小石 含有	良	2/3	
48	006-02	SD29 (B-O10)	緑釉陶器 碗	(7.6)		体 部 ロクロナデ 底 部 糸切痕	7.5YR5/6 黄褐色	並	良	底部のみ	体部2.5GY5/6黒緑 2.5Y7/6赤褐色に赤 黒緑着痕あり
49	063-01	SD29 (5層・6層)	須恵部 鉢	12.7	27.3	口縁部 ココナデ 体 部 外面ハケ及びクサキ 内面アケ丸	8.0Y5/1 赤褐色	～4mm 砂粒 含有	良	住び実存	口縁～体部に自然剥 が付着する
50	067-01	SD29 (4層)	須恵部 甕	28.0		口縁部 丹塗漆状・カキメ・沈 着 内面ロクロナデ	N6/ 灰	密	良	口縁部片部 厚弁	
51	066-01	SD29 (6層)	須恵部 甕	23.0		口縁部 ロクロナデ 体 部 外面タコハケ 内面同心円のアケ丸	N7/ 灰白	密	良	口縁部1/2	※あり
52	048-02	SD29 (東前南北Tr)	須恵部 甕	18.6		口縁部 ロクロナデ 体 部 外面ロクロナデ 内面同心円のアケ丸	N8/1 灰白	並	良	口縁部片	
53	067-04	SD29 (B-P10)	須恵部 甕	23.0		ロクロナデ	N6/ 灰	密	良	口縁部片	
54	047-01	SD29 (B-R10)	須恵部 甕	25.4 (体径25.6)		ロクロナデ	N6/ 灰	密	良	口縁部片	
55	066-02	SD29 (B-O10)	須恵部 甕	41.0		カキメ	2.5Y8/2 灰白	やや粗	並	口縁部片	胎土含有あり
56	079-02	SD29 (B-N9)	ヤコウト 石罫	丸:90 丸:60	罫:10 罫:5g	風化により不明瞭				先端石端部 欠か	※基礎層F1304 ◎
57	079-01	SD29	ヤコウト 石罫	丸:50 丸:30	罫:66 罫:6g					先端切れ	※基礎層A2305 ◎
58	079-03	SD29 (B-N9)	下呂石 石罫	丸:41 丸:30	罫:15 罫:1g	風化により不明瞭					
59	064-01	SD29	飛石 粘着部	丸:25 丸:15	罫:22g						
60	027-02	SD30 (B-Y3)	土師部 甕	12.8	3.6	口縁部～杯部1/2ココナデ・ユビオナ ズリ	2.5Y8/2 灰白	～2mm 砂粒 含有	軟	1/4	

第8表 出土遺物観察表2

No.	登録番号 (R No.)	遺 蹟 区 出 上 位 置	種 類 (器 種)	法 量 (cm)		観 察 事 項 成形・調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存 度	備 考
				項 目	高						
61	008-03	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	13.2	2.6 ~4.4	口縁部-杯部 内面ナゲ 外面 ヨコナゲ1/3・ユビオサエ	7.5Y8/1 灰白	~1mm 砂粒 含ま	軟	2/3	
62	027-06	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	13.8	2.9	風化により不明瞭	7.5YR6/6 黄	~1mm 砂粒 含ま	硬	1/6	
63	027-05	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	12.8	3.0	口縁部 ヨコナゲ 体 部 ユビオサエ	10YR8/1 灰白	~1mm 砂粒 含ま	良	1/5	
64	036-03	SD30 (B-W3)	土師器 甕	16.0		外 部 不明瞭ではあるがヤキ痕が すかに残る 底 部 内面同様に焼文が確認できる	7.5YR8/4 黄黄緑	~1mm 砂粒 含ま	良	1/3	
65	027-04	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	12.8	3.6	風化により不明瞭	2.5Y8/2 灰白	~2mm 砂粒 含ま	軟	1/4	
66	014-06	SD30 (B-U2)	土師器 甕	19.0	5.0 ~5.5	口縁部 ヨコナゲ 体 部 内面 焼文	5YR7/1 灰白	~1mm 砂粒 含ま	硬	4/5強	
67	037-02	SD30 (B-V2)	土師器 甕	15.0	2.0	底 部 外面1/4ヤキ	5YR7/6 黄	~2mm 砂粒 含ま	良	1/6	
68	037-03	SD30 (D-A3)	土師器 甕	18.0	2.7	風化により不明瞭	5YR6/6 黄	~2mm 砂粒 含ま	差	1/5	
69	027-03	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	21.0	3.0	口縁部 1/2以上ヨコナゲ	10YR8/4 黄黄緑	~1mm 砂粒 含ま	良	1/6	
70	037-01	SD30 (D-B1)	土師器 甕	22.5	2.0	風化により不明瞭	5YR7/6 黄	~2mm 砂粒 含ま	良	口縁部片	
71	030-03	SD30 (D-W3)	土師器 甕	11.0		口縁部 ヨコナゲ 体 部 外面メダリのちナゲ	5YR7/6 黄	~1mm 砂粒 含ま	良	口縁部片	
72	028-04	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	15.0		口縁部 外面ヨコナゲ内面ヨコハケの ちヨコナゲ 体 部 外面タハハ内面工具ナゲ	8YR8/1弱 8YR8/1強	~1mm 砂粒 含ま	差	口縁部片	保存書
73	035-01	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	16.0		口縁部 ヨコナゲ 体 部 外面タハハ 内面へう状工具ナゲか	5YR7/6強	~2mm 砂粒 含ま	差	口縁部片	
74	035-02	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	15.0		口縁部 ヨコナゲ 体 部 内面ヨコハケ	7.5YR8/4 黄黄緑	~2mm 砂粒 含ま	良	口縁部片	
75	030-02	SD30 (B-U2)	土師器 甕	16.0		風化により不明瞭	7.5YR8/3 黄黄緑	~2mm 砂粒 多含ま	差	口縁部片	
76	030-01	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	15.0		口縁部 外面ヨコナゲ 内面ヨコハケの ちヨコナゲ 体 部 外面タハハ内面ヨコハケ	7.5YR8/4 黄黄緑	~1mm 砂粒 含ま	差	1/5	保存書
77	030-06	SD30 (D-A3)	土師器 甕	23.0		口縁部 ヨコナゲ 体 部 内面ハケ	7.5YR8/4 黄黄緑	~2mm 砂粒 含ま	良	口縁部片	
78	031-01	SD30	土師器 甕	22.0		口縁部 ヨコナゲ 体 部 ナメハケのちナゲ	8YR8/1弱 8YR8/1強	差	良	口縁部片	
79	035-04	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	23.0		口縁部 ヨコナゲ 体 部 ナメハケのちナゲ	2.5Y8/4 灰黄	~2mm 砂粒 含ま	差	口縁部片	
80	028-03	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	18.0		風化により不明瞭	7.5YR7/8 黄黄緑	~2mm 砂粒 含ま	差	口縁部片	
81	028-01	SD30 (B-X3)	土師器 甕	18.0		風化により不明瞭	10YR7/6 黄黄緑	~4mm 砂粒 含ま	差	口縁部片	
82	035-03	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	21.0		口縁部 ヨコハケのちヨコナゲ 体 部 内面ヨコハケ	10YR7/3 にぶい黄緑	~3mm 砂粒 含ま	差	口縁部片	
83	029-03	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	22.0		口縁部 外面ナメハケのちヨコナゲ4 本/cm 内面ヨコハケのちヨコナゲ4本/cm 体 部 外面ナメハケ4本/cm	7.5YR8/4 黄黄緑	~1mm 砂粒 含ま	差	口縁部片	
84	028-05	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	23.0		口縁部 内面ヨコナゲ 体 部 内面ヨコハケ8本/cm	7.5YR8/3 黄黄緑	~2mm 砂粒 含ま	良	口縁部片	
85	038-03	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	34.0		口縁部 外面ヨコナゲ 内面ナメハケ のちヨコナゲ 体 部 外面ナメハケ 内面ヨコハケ のちナゲ	7.5YR8/3 黄黄緑	差	良	口縁部片	
86	031-03	SD30 (B-W3)	土師器 甕	26.0		体 部 内面ヨコハケのちナゲか にぶい黄緑	10YR7/4 にぶい黄緑	~2mm 砂粒 多含ま	差	口縁部片	
87	034-02	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	26.6		口縁部 外面ヨコナゲ 内面ハケが若干残る	7.5YR8/6 黄黄緑	~1mm 砂粒 含ま	良	口縁部片	
88	038-02	SD30	土師器 甕	28.0		口縁部 外面ユビオサコナゲ 内面ハケのちヨコナゲ 体 部 外面ナメハケタハハ 内面ヨコハケのちナゲ	10YR8/1 にぶい黄緑	~1mm 砂粒 含ま	差	口縁部片	
89	032-01	SD30 (B-Y2)	土師器 甕	27.0		口縁部 外面ヨコナゲ 内面ナメハケのちヨコナゲ 体 部 外面ナメハケのちナゲ5~6本/ cm 内面ヨコハケのちナゲ	7.5YR8/3 黄黄緑	~2mm 砂粒 含ま	良	口縁部片	
90	036-01	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	26.0		口縁部 ヨコナゲ外面外面ナメハケの ちナゲ7本/cm 内面ヨコハケのちナゲ7本/cm	7.5YR8/3 黄黄緑	~2mm 砂粒 多含ま	良	口縁部片	

第9表 出土遺物観察表3

No.	登録番号 (R No.)	遺跡 地区 出土位置	種類 (器種)	法量 (cm)		観察事項 成形・調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
				口径	高さ						
91	036-04	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	30.0		口縁部 外面ヨコナデ 内面ヨコナデのちナデ	7.5YR8/6 黄灰	～3mm 砂粒多量 並	並	口縁部片	
92	033-01	SD30	土師器 甕	26.0		口縁部 外面ヨコナデ 内面不明なハメハ 体 部 外面ナメハのちナデか 内面ヨコナデ	8.1YR8/1 8.1YR8/4 黄灰	～2mm 砂粒多量 並	並	口縁部片	
93	037-04	SD30 (B-W3)	土師器 甕	28.0		口縁部 ヲコナデ 体 部 外面ナメハのちナデ 内面ヨコナデのちナデ	10YR8/2 灰白	～5mm 小石多量 中程度	並	口縁部片	
94	031-02	SD30 (B-Y2)	土師器 甕	36.0		口縁部 外面ヨコナデ 内面ヨコナデのちヨコナデ 体 部 外面ナメハ 内面ヨコナデのちナデ	7.5YR8/3 黄灰	～2mm 砂粒 並	並	口縁部片	
95	032-02	SD30 (B-W3)	土師器 甕	31.0		口縁部 外面ヨコナデ 内面ヨコナデのちヨコナデ 体 部 外面ナメハのちナデ3本/cm 内面不明	7.5YR7/4 にぶい黄	～3mm 砂粒多量 中程度	並	口縁部片	
96	035-05	SD30 (B-Y2)	土師器 甕	32.0		口縁部 ヲコナデ 体 部 外面ナメハ 内面ヨコナデのちナデ5本/cm	7.5YR8/3 黄灰	～2mm 砂粒多量 中程度	並	口縁部片	
97	034-03	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	32.0		口縁部 外面ヨコナデ 体 部 外面ナメハ 内面ヨコナデ	7.5YR8/4 黄灰	～10mm 小石多量 中程度	並	口縁部片	
98	038-01	SD30 (B-V2)	土師器 甕	33.0		口縁部 外面・内面ヨコナデ 体 部 外面ナメハ7.5本/cmのちナデ 内面ヨコナデ5本/cmのちナデ	7.5YR8/6 黄灰	～2mm 砂粒多量 並	並	口縁部片	
99	039-01	SD30 (D-B1)	土師器 甕	26.0		風化より不明瞭	7.5YR8/6 黄灰	～1mm 砂粒多量 並	並	口縁部片	
100	029-01	SD30 (B-X3)	土師器 甕	36.0		口縁部 ヲコナデ 体 部 外面ナメハ 内面ヨコナデ	10YR8/3 黄灰	～6mm 小石多量 中程度	並	口縁部片	
101	030-04	SD30 (D-A3)	土師器 甕	26.0		風化より不明瞭	7.5YR8/4 黄灰	中程度	並	口縁部片	
102	028-02	SD30 (B-Y2)	土師器 甕	21.0		体 部 内面へう状工具によるナデか	10YR7/6 明黄	～4mm 砂粒 並	並	口縁部片	
103	030-05	SD30 (B-U2)	土師器 甕	21.0		口縁部 外面ヨコナデ 内面ヨコナデのちヨコナデ	7.5YR7/6 黄	並	並	口縁部片	
104	029-02	SD30 (B-X3)	土師器 甕	23.6		風化より不明瞭	2.5YR/3 灰白	～7mm 小石 並	並	口縁部片	
105	036-02	SD30 (B-Y3)	土師器 甕	23.0		体 部 外面ヨコナデのちヨコナデ 内面ヨコナデのちヨコナデ	7.5YR8/3 黄灰	並	並	口縁部片	
106	013-04	SD30 (B-Y2)	須恵器 杯蓋	9.5	3.0	杯 部 外面ロクケメズ1/3のクロナ デ 内面ロクロナデ	10B6/1 青灰	～3mm 砂粒 並	並	3/4	
107	019-01	SD30 (B-W3)	須恵器 杯蓋	13.0	3.9	口縁部 内外面 ロクロナデ 天井部 外面へう切のちナデか 内面不定方向ナデ	5B6/1 青灰	～1mm 砂粒 並	並	2/3	
108	014-04	SD30 (B-U2)	須恵器 杯蓋	13.4	2.6	口縁部 内外面ロクロナデ 天井部 外面ロクケメズ4/5 内面ロクロナデ	5Y7/1 灰白	～1mm 砂粒 並	並	3/4	
109	013-06	SD30 (B-X3)	須恵器 杯蓋	13.0	2.2	口縁部 内外面ロクロナデ 天井部 外面ロクケメズ2/3 内面ロクロナデ	10B6/1 青灰	並	並	2/3	並あり
110	015-05	SD30	須恵器 杯蓋	13.4	2.6	口縁部 内外面ロクロナデ 天井部 外面ロクケメズ1/2 内面ロクロナデ	10B6/1 青灰	～2mm 砂粒多量 並	並	1/2	
111	014-01	SD30 (B-W2)	須恵器 杯蓋	13.9	3.0	口縁部 内外面ロクロナデ 天井部 外面ロクケメズ3/4のクロナ デクロナデ	5B7/1 明青灰	～5mm 小石 並	並	1/2	
112	014-02	SD30 (B-W3)	須恵器 杯蓋	14.2		口縁部 内外面ロクロナデ 天井部 外面ロクケメズ2/3のクロナ デクロナデ	5B7/1 明青灰	～3mm 砂粒 並	並	2/3	並あり
113	013-05	SD30	須恵器 杯蓋	13.7	2.5	口縁部 内外面ロクロナデ 天井部 外面ロクケメズ4/5のクロナ デクロナデ	10B7/1 明青灰	並	並	2/5	外面に自然熱
114	015-01	SD30 (B-Y3)	須恵器 杯蓋	14.0	2.7	口縁部 内外面ロクロナデ 天井部 外面ロクケメズ1/2のクロナ デ 内面ロクロナデ	5B7/1 青灰	並	並	1/2	
115	014-05	SD30 (B-V1)	須恵器 杯蓋	14.4	2.4	口縁部 内外面ロクロナデ 天井部 外面ロクケメズ2/3 内面ロクロナデ	10Y7/1 灰白	並	並	3/4	外面に自然熱
116	016-03	SD30	須恵器 杯蓋	14.8	2.4	口縁部 内外面ロクロナデ 天井部 外面ロクケメズ1/2 内面ロクロナデ	10YR5/2 灰黄	～4mm 砂粒 並	並	1/4	残きぶくれ並あり
117	008-06	SD30 (D-A3)	須恵器 杯蓋	14.6	2.9	口縁部 内外面ロクロナデ 天井部 外面ロクケメズ2/3のクロナ デクロナデ	5B6/1 青灰	～5mm 小石 並	並	ほぼ完存	
118	004-04	SD30 (B-Y3)	須恵器 杯蓋	14.4	3.8	口縁部 内外面ロクロナデ 天井部 外面ロクケメズ3/4のクロナ デクロナデ	10YR2/2 灰白	並	並	1/2	外面に黒層あり
119	015-06	SD30 (D-B1)	須恵器 杯蓋	17.3	約3.5	口縁部 内外面ロクロナデ 天井部 外面ロクケメズ1/2のクロナ デクロナデ	5B6/1 青灰	～2mm 砂粒 並	並	1/4	外面に自然熱並あり
120	015-02	SD30 (B-Y3)	須恵器 杯蓋	17.4	4.6	口縁部 内外面ロクロナデ 天井部 外面ロクケメズ2/3のクロナ デクロナデ	5G6/1 緑灰	～3mm 砂粒 並	並	2/5	

第10表 出土遺物観察表4

No	登録番号 (R No)	遺地 地区 出土位置	種類 (器種)	法量 (cm)	観察事項		色調	胎土	焼成	残存度	備考
					成形・調整技法の特徴						
121	014-03	SD30 (B-U2)	須恵器 杯蓋	17.1	2.5	口縁部 内外面ロクロナデ 大井部 外蓋ロクロナズリ1/2のクロナ デ 内蓋ナデ	2.5Y6/4 淡青	～3mm 砂粒含 混	良	2/3	
122	015-03	SD30 (B-V3)	須恵器 杯蓋	20.0	3.6	口縁部 内外面ロクロナデ 大井部 内蓋ロクロナズリ2/3のクロナ デ 内蓋ロクロナデ	2.5Y6/2 灰青	～3mm 砂粒含 混	良	1/4	
123	015-04	SD30	須恵器 杯蓋	20.0	3.5	口縁部 内外面ロクロナデ 大井部 外蓋ロクロナズリ1/2のクロナ デ 内蓋ロクロナデ	S87/1 暗青灰	～4mm 砂粒含 混	良	1/5	外面に自然物がかか る
124	016-02	SD30 (B-W3)	須恵器 杯蓋	23.4	3.7	口縁部 内外面ロクロナデ 大井部 外蓋ロクロナズリ2/3のクロナ デ 内蓋ロクロナデ	SBG6/1 青灰	混	良	1/4	
125	040-05	SD30 (B-V2)	須恵器 杯	11.0		口縁部 ロクロナデ 底 蓋 外蓋へう切のちナデ 内蓋ロクロナデ	10BG5/1 青灰	～2mm 砂粒含 混	良	1/3	
126	013-02	SD30 (B-X3)	須恵器 杯	12.0	3.1	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 外蓋上縁内面内蓋ロクロナデ	7.SR7/1 明赤灰	～4mm 砂粒含 混	差	2/3	残すぶくれ
127	024-01	SD30 (B-Y3)	須恵器 杯	11.6	3.7	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 外面糸切のちロクロナズリか 内蓋ロクロナデ	SBG7/1 明青灰	混	良	2/3	
128	022-03	SD30 (B-V2)	須恵器 杯	11.4	4.5	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 ロクロナズリ	10G6/1 緑灰	混	良	1/6	
129	022-02	SD30 (B-V2)	須恵器 杯	12.4	3.8	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 ロクロナズリ	10BG6/1 青灰	～4mm 砂粒含 混	良	1/5	
130	001-02	SD30 (B-X3)	須恵器 杯	12.3	4.2	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 ロクロナズリ	2.5Y6/3 赤灰	混	良	ほぼ完全	底部外面に墨付着
131	013-03	SD30 (B-X3)	須恵器 杯	14.0	4.4	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 ロクロナズリ	10G7/1 明緑灰	～2mm 砂粒含 混	良	1/3	ツメ痕
132	098-02	SD30	須恵器 皿	15.9		口縁部 ロクロナデ底縁外蓋ナズリ	7.5Y7/1 灰白	混	良	1/10	
133	041-03	SD30 (B-W3)	須恵器 杯	11.0	4.2	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 外面糸切のちロクロナズリ のクロナデ	10BG5/1 青灰	～2mm 砂粒含 混	良	1/5	
134	098-01	SD30	須恵器 杯	12.9	4.1	ロクロナデ 底 蓋 外蓋ロクロナズリ	N6/ 灰	中中混	良	1/6	
135	013-01	SD30 (B-X3)	須恵器 杯	12.4	4.4	ロクロナデ 底 蓋 外蓋ナズリのちナデか	10G7/1 明緑灰	～2mm 砂粒含 混	良	1/3	ツメ痕
136	024-04	SD30 (B-V2)	須恵器 杯	12.7	3.8 ～4.1	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 糸切のちロクロナズリ	SBG7/1 明青灰	混	良	2/3	墨あり
137	022-01	SD30 (B-X3)	須恵器 杯	12.6	4.6	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 糸切	2.5Y6/4 淡青	混	差	1/2弱	
138	024-06	SD30 (B-U2)	須恵器 杯	13.6	4.7	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 外面糸切のちロクロナズリ	SBG7/1 明青灰	混	良	2/3	
139	026-02	SD30 (B-V2)	須恵器 杯	13.6	4.5	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 外面糸切のち不定方向ナズリ	SBG5/1 青灰	～2mm 砂粒含 混	良	口縁部1/3 底部完全	口縁部に自然物
140	024-05	SD30 (B-X3)	須恵器 杯	14.0	4.6	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 外蓋工具ナデ	2.5GY6/1 オリーブ灰	～1mm 砂粒含 混	良	口縁部1/4 底部完全	内面に自然物
141	041-01	SD30 (B-V2)	須恵器 杯	13.6	4.9	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 外蓋ロクロナズリのちナデ	5YR8/3 成泥	～5mm 小石含 混	良	1/4弱	
142	040-06	SD30 (B-Y2)	須恵器 杯	(9.2)		底 蓋 外面糸切のちロクロナズリ のクロナデ 内蓋ロクロナデ	7.5GY7/1 明緑灰	～3mm 砂粒含 混	良	底部完全	ツメ痕
143	024-03	SD30 (B-V2)	須恵器 杯	14.4	4.8	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 糸切のち不定方向ナズリ	10Y8/1 灰白	中中混	差	1/2	
144	040-05	SD30 (B-U2)	須恵器 杯	(9.4)		底 蓋 外蓋ロクロナズリのちロクロ ナデ糸切 内蓋ロクロナデ	S87/1 明赤灰	～2mm 砂粒含 混	良	底部完全	
145	040-01	SD30 (B-U2)	須恵器 杯	(9.5)		底 蓋 外蓋ロクロナズリのちロクロ ナデ糸切 内蓋ロクロナデ	8BG6/1 S130/1+ 1	～1mm 砂粒含 混	良	底部完全	
146	040-02	SD30 (B-U2)	須恵器 杯	(10.0)		底 蓋 外蓋ロクロナズリのちロクロ ナデ 内蓋ロクロナデ	4.2BG18 S130/1 S130/1 等	～9mm 小石含 混	良	底部完全	
147	008-04	SD30 (D-A3)	須恵器 杯	14.0	4.0	口縁部 内面ロクロナデ 底 蓋 外面糸切のちロクロナズリ	2.5GY7/1 オリーブ灰	混	良	3/4	
148	024-02	SD30 (B-U2)	須恵器 杯	15.4	4.1	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 外蓋へう切のちロクロ ナデ 内蓋ナデ	10GY6/1 緑灰	～5mm 小石含 混	差	2/3	
149	042-03	SD30	須恵器 杯	16.0	4.2	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 外蓋ロクロナズリのちロクロ ナデ 内蓋ナデ	SB4/1 暗青灰	～5mm 小石含 混	差	1/3	
150	004-03	SD30 (B-Y3)	須恵器 杯	12.4	4.0	口縁部 ロクロナデ 底 蓋 糸切のちロクロナデ	5Y6/1 灰	～6mm 小石含 混	良	口縁部1/3 底部完全	

第11表 出土遺物観察表5

No.	登録番号 (R No.)	遺跡 区 附土位置	種類 (部 種)	法量 (cm)		観察事項 形状・調査技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存 度	備 考
				口径(直)	器 高						
151	042-02	SD30	灰地器 杯	13.0	4.0	口縁部 ロクロナデ 底 部 外面ロクロナデのちロクロナ デ	5B7/1 灰白	並	良	1/5	
152	041-02	SD30 (B-Y3)	灰地器 杯	13.6	4.3	口縁部 ロクロナデ 底 部 外面ロクロナデのちロクロナ デ 内面ロクロナデ	5B07/1 明青灰	並	良	1/4	
153	026-03	SD30 (B-Y3)	灰地器 杯	16.6	4.8	口縁部 ロクロナデ 底 部 外面糸切のちロクロナデ	2.5Y8/6 黄	～1mm 砂粒含 並	並	1/3	
154	042-01	SD30 (D-A3)	灰地器 杯	22.4	5.2	口縁部 ロクロナデ 底 部 外面ロクロナデのち内面ロク ロナデ	5Y08/1 灰白	やや粗	並	1/8	
155	041-04	SD30 (B-V2B-W3)	灰地器 盤	26.4	5.3	口縁部 ロクロナデ 底 部 外面ロクロナデ 底 部 外面ロクロナデのちロクロナ デ 内面瓦ナデ	10B05/1 青灰	並	並	1/3	
156	001-03	SD30 (B-W2)	灰地器 杯	12.6	3.7	口縁部 ロクロナデ 底 部 外面糸切のちロクロナデ	5Y7/2 灰白	密	良	口縁部1/6 底部完存	底面外面に墨書痕
157	002-02	SD30 (B-Y3)	灰地器 杯	14.0	2.9	底 部 外面ズリ・糸切痕 内面ロクロナデ	5YK7/3 にぶい黄	～4mm 砂粒多 並	良	1/3	底面外面に墨書痕
158	002-04	SD30 (B-Y3)	灰地器 杯			底 部 外面ズリ・糸切痕 内面ロクロナデ	5YK7/3 にぶい黄	～5mm 小石含 密	良	底部片	底面外面に墨書痕
159	002-03	SD30 (D-A3)	灰地器 杯			底 部 外面ズリ・糸切痕 内面ロクロナデ	5YK7/3 にぶい黄	～1mm 砂粒含 密	良	底部片	底面外面に墨書痕
160	003-03	SD30 (B-Y3)	灰地器 杯			底 部 ロクロナデ	2.5Y8/1 灰白	並	並	底部片	底面外面に墨書痕
161	003-02	SD30 (B-Y3)	灰地器 杯			底 部 ロクロナデ	2.5Y7/1 灰白	並	並	底部片	底面外面に墨書痕
162	003-01	SD30 (B-Y3)	灰地器 杯	17.6		底 部 ロクロナデ	2.5Y7/1 灰白	密	良	底部片	底面外面に墨書痕
163	022-06	SD30 (B-V2)	灰地器 杯			底 部 外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	5Y6/2 灰ナリ黄	密	良	底部片	底面外面にへり記号
164	022-04	SD30 (B-V2)	灰地器 杯			底 部 外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	5B6/1 青灰	密	良	底部片	底面外面にへり記号
165	039-04	SD30 (B-Y2)	灰地器 杯			底 部 外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・ユビオオエ	2.5G7/1 黄ナリ黄	密	良	底部片	底面外面にへり記号
166	039-05	SD30 (B-V3)	灰地器 杯	9.2		底 部 外面糸切痕 内面ロクロナデ	7.5Y6/1 灰	～1mm 砂粒含 並	良	底部1/3	底面内面にへり記号
167	039-02	SD30 (B-Y2)	灰地器 杯	11.3		底 部 外面ロクロナデ・糸切痕 内面ロクロナデ	5B06/1 青灰	～5mm 砂粒含 並	良	底部のみ	底面外面にへり記号
168	009-04	SD30 (D-A3)	灰地器 杯	13.1	4.7	ロクロナデ 底 部 外面糸切のちロクロナデ	10Y7/1 灰白	密	並	口縁部1/2 底部完存	底面外面にへり記号
169	016-01	SD30	灰地器短頸 甕の蓋	9.0	1.2	口縁部 ロクロナデ 天月部 外面ロクロナデのちロクロナ デ 内面ロクロナデ	5B06/1 青灰	～2mm 砂粒含 密	良	1/4	内面に墨付転写痕 あり
170	019-04	SD30 (D-A3)	灰地器 丸蓋	6.0		ロクロナデ	5YR5/6 明赤黄	密	良	蓋部のみ	
171	022-05	SD30 (B-Y3)	灰地器 丸蓋	7.2		口縁部～底面ロクロナデ	10Y4/1 暗緑灰	～7mm 小石含 密	良	蓋部のみ	
172	010-02	SD30 (B-Y3)	灰地器 短頸甕	6.5	8.5	口縁部～体部ロクロナデ 底 部 へり切のちナデ	5B7/1 暗青灰	～2mm 砂粒含 並	良	2/3	焼きむらあり
173	010-01	SD30 (D-B4)	灰地器 丸蓋	11.0		ロクロナデ	5YR4/2 灰黄	密	良	口縁部のみ 欠損	
174	026-04	SD30 (B-V2)	灰地器 蓋	10.0		ロクロナデ	10D06/1 青灰	～6mm 小石含 密	良	1/3	
175	072-03	SD30 (B-V2)	灰地器 蓋			口縁部～底面状況丈・3本沈線	N5/ 灰	密	良	口縁部片	
176	072-01	SD30	灰地器 蓋			口縁部 ロクロナデ 底 部 外面タタキのち工具ナデ	N7/ 灰	密	良	口縁部片	
177	059-01	SD30 (B-X3)	灰地器 不明	23.0	24.3	外 面 ロクロナデ・ロクロナデ 内 面 ロクロナデ・ナデ	N8/1 灰白	並	やや粗	1/2	
178	017-02	SD30 (B-W3)	灰地器 円筒	20.0		ロクロナデ	5D03/1 暗青灰	密	良	脚部片	
179	027-01	SD30 (B-V2)	灰地器 丸蓋	12.2		口縁部 ロクロナデ 底 部 外面ハナデ	7.5YR8/2 灰白	やや粗	並	口縁部のみ	
180	023-03	SD30 (B-X3)	灰地器 蓋	13.4		口縁部 ロクロナデ	10D04/1 暗青灰	密	良	口縁部片	

第12表 出土遺物観察表6

No.	登録番号 (R No)	遺地 地区 出土位置	種類 (器種)	注量 (cm)		観察事項 成形・調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考	
				口径	器高							
181	023-01	SD30 (B-Y1)	灰磁器 壺	18.0		口縁部 ロクロナデ	10B06/1 青灰	～4mm 砂粒含 量	良	口縁部片		
182	023-02	SD30 (B-Y3)	灰磁器 壺	18.0		口縁部 ロクロナデ 体部 外面平行タタキのちカキメ	7.5Y8/3 淡黄	等	並	口縁部片		
183	025-01	SD30 (B-Y3)	灰磁器 壺	24.0		口縁部 ロクロナデ	5YR4/4 にぶい青黄	～5mm 小石多含 量	良	口縁部片	口縁部に自然釉	
184	026-01	SD30 (B-Y3)	灰磁器 壺	28.5		口縁部 ロクロナデ	10G7/1 粗緑灰	密	良	口縁部片		
185	025-02	SD30 (B-Y3)	灰磁器 壺	40.4		口縁部 ロクロナデ	5B65/1 青灰	～1mm 砂粒含 量	良	口縁部片		
186	023-04	SD30 (B-Y3)	灰磁器 壺	36.4		口縁部 ロクロナデ	5B67/1 明青灰	並	並	口縁部片		
187	033-02	SD30 (B-Y3)	灰磁器 壺	33.0		口縁部 ロクロナデ	10Y28/1 灰白	並	軟	口縁部片		
188	019-03	SD30 (B-Y3)	灰磁器 壺	31.4		口縁部 ロクロナデ 体部 外面平行タタキのちカキメ 内面アケ灰	5B7/1 明青灰	密	良	口縁部片		
189	021-02	SD30 (B-Y3)	灰磁器 壺	46.6		口縁部 ロクロナデ 体部 外面平行タタキのちカキメのち ナデ 内面アケ灰	5B6/1	密	並	口縁部片		
190	021-01	SD30 (B-Y3)	灰磁器 壺	40.0		口縁部 ロクロナデ 体部 外面平行タタキのちナデ 内面アケ灰	10B06/1 青灰	～1mm 砂粒含 量	良	口縁部片		
191	020-02	SD30 (B-Y2)	灰磁器 壺	48.2		口縁部 ロクロナデ 体部 外面タタキ	2.5Y8/1 灰白	～1mm 砂粒含 量	軟	口縁部片		
192	020-01	SD30 (B-Y3)	灰磁器 壺	46.0		口縁部部 カキメ	5B7/1 明青灰	密	良	口縁部片	外面に自然釉	
193	006-01	SD30 (B-Y3)	緑釉陶器 皿	12.5	2.5	口縁部部 ロクロナデ 底部 糸切のちロクロナデ	10B07/1 緑青灰	～4mm 砂粒含 量	良	完好	釉は割傷	
194	009-03	SD30 (B-Y3)	灰釉陶器 皿	10.6	3.3	ロクロナデ	10Y8/1 灰白	密	良	3/4	釉調 10Y 7/2 灰白 筋あり 内面 ハケ塗 り	
195	008-01	SD30 (B-Y3)	灰釉陶器 筒	12.6	4.1 ～4.3	口縁部一部部 ロクロナデ 底部 外面糸切のちナデ 内面ナデ	10Y8/1 灰白	密	並	2/3		
196	008-02	SD30 (B-Y3)	灰釉陶器 筒	13.2	4.2	口縁部一部部 ロクロナデ 底部 外面糸切のちナデ 内面ナデ	10Y7/1 灰白	密	良	完好	釉掛け 釉調 7.5Y8/1 10Y7/2 灰白	
197	006-05	SD30 (B-Y3)	緑釉陶器 筒	(9.0)		体部 ロクロナデ	2.5Y8/4 淡黄	密	並	1/4	釉調 2.5Y4/4	
198	008-05	SD30 (B-Y3)	灰釉陶器 筒	16.0	4.8	体部 ロクロナデ 底部 糸切	10Y7/1 灰白	密	良	ほぼ完好	裏面ツケ掛け	
199	019-02	SD30 (B-Y2)	山系陶 筒	17.0	5.0	体部 ロクロナデ 底部 糸切	5Y8/3 密	～1mm 砂粒含 量	良	2/3	割傷	
200	005-01	SD30 (B-Y3)	灰釉陶器 壺	(6.6)		ロクロナデ 底部 外面ロクロメツリのちロクロ ナデ	N8/1 灰白	密	良	底面1/3	釉調 2.5Y7/1 明 青灰	
201	058-01	SD30 (B-Y2)	製土器			風化により不明瞭	5YR7/6	～3mm 砂粒多含 量	並	体部片		
202	057-02	SD30 (B-Y2)	土器	口径 20.7 底径 10.3 高さ 9.5g			7.5YR7/8 にぶい黄	～1mm 砂粒含 量	並	ほぼ完好		
203	057-01	SD30 (B-Y2)	土器	口径 16.4 底径 10.0 高さ 9.2g			2.5Y8/1 灰白	～1mm 砂粒含 量	並	ほぼ完好	残すむらあり	
204	057-05	SD30 (B-Y2)	土製品 樋口				2.5Y7/1 灰白	やや粗	並	1/3		
205	080-01	SD30	砂岩 磁石	口径 10.3 高さ 10.0g							表面を片断	
206	080-02	SD30 (B-Y2)	碧玉 管玉	口径 10.7 高さ 1.1g							ほぼ完好	
207	080-03	SD30 (B-Y2)	オスロイト 石鏝	口径 10.0 高さ 10.23 重さ 6.4g							完好	凹部高さA5h
208	080-04	SD30 (B-Y2)	チャート 石鏝	口径 11.59 高さ 10.30 重さ 11.3g							先端部折れ	凹部高さA2h
209	018-01	SD31 (C-H20)	土師器 壺	22.0		口縁部 ロクロナデ 体部 外面ナメハケ5本/cm 内面ヨコハケ7本/cm	7.5Y8/2 灰白	密	良	口縁部片		
210	012-02	SD31 (C-H20)	土師器 壺	13.0		風化により不明瞭	2.5Y8/1 淡黄	粗	並	口縁部片		

第13表 出土遺物観察表7

No	登録番号 (R No)	遺 構 地 区 出 上 位置	備 類 (器 機)	法量 (cm)		観 察 事 項		色 調	胎 土	焼 成	残 存 度	備 考
				口径	器 高	成 形	調整技法の特徴					
211	065-02	SD31	上埴黄土管	13.8	フノ径 19.2	外 面 ハケメ・ナデ 内 面 ハケメ	2.5YR/2 灰白	～1mm 砂粒含 やや密	軟	1/3割		
212	065-01	SD31	弥生土埴 管	(8.0)		体 部 外面ヘラミガキ 内面ハケメ 底 部 外面ナデ内面ハケメ	2.5YR/2 灰白	～3mm 砂粒含 密	硬	底面のみ	外面一經黒染あり	
213	077-01	SD31	弥生土埴 管	11.3	36.0	風化により不明瞭	2.5YR/3 淡黄	～5mm 小石含 やや密	硬	ほぼ完全	体部～底面に黒染あり	
214	054-01	SD31	須恵器 甕	(12.9)		底 部 外面ロクロケズリ・ユビオサエ 内面ヘラ加工によるナデ	10BG7/1 明黄灰	～2mm 砂粒含 密	硬	底面のみ		
215	012-03	SD31	須恵器 高杯	(9.2)		ロクロナデ 脚 部 内面しげり	5D6/1 青灰	～2mm 砂粒含 密	良	脚部2/3		
216	053-02	SD31 (C-H20)	須恵器 杯蓋	11.8	3.6	ロクロ製 ロクロナデ 天弁部 外面1/3ロクロケズリ・ロクロ ナデ 内面ロクロナデ・ナデ	10BG6/1 青灰	～3mm 砂粒含 密	硬	2/3		
217	053-04	SD31 (C-H20)	須恵器 杯	16.0	9.0	ロクロ製 ロクロナデ 体 部 外面ロクロケズリ・ナデ 内面ナデ	5BG7/1 明黄灰	～1mm 砂粒含 密	硬	1/4		
218	078-03	SD32 (C-H18)	山系陶 甕	(8.6)		底 部 糸切のちナデ 内面ロクロナデ	5GY8/1 灰白	やや密	良	底面のみ	比較的丁寧な高台	
219	005-02	SD32 (C-H18)	山系陶 甕	(8.2)		体 部 ロクロナデ 底 部 ナデ	2.5Y7/2 灰黄	密	硬	底面のみ	底面外面に曇染候	
220	078-02	SD32 (C-H18)	山系陶 甕	(8.6)		底 部 糸切のちナデ磨し 内面 ロクロナデ	NB/ 灰白	～1mm 砂粒含 やや密	硬	底面1/2	比較的丁寧な高台陶 甕	
221	078-04	SD32 (C-H18)	山系陶 甕	(8.0)		ロクロナデ	NB/ 灰白	やや密	良	底面のみ	初底	
222	046-07	SD32	土師器 甕	26.1		口縁部 外面コナダユビオサエ 内面ナデハケのちコナダ 体 部 タケハケ・ヨコハケ	2.5YR7/3 淡黄	～3mm 砂粒含 密	良	口縁体部片		
223	006-04	SD32 (C-H18)	埴輪陶器 写瓶	(6.0)		体 部 ロクロナデか 底 部 糸切のちナデか	5GY7/1 黄々灰	密	良	底面～体部	輪周10GY5/4	
224	097-01	SD32 (C-H18)	土師器 甕								上部のみ	
225	093-05	SD33 (B-V12)	土師器 杯	15.0		コナダ 体部～底面外面ユビオサエ	10YR8/3 淡黄	密	良	口縁体部片		
226	093-06	SD33 (B-V12)	土師器 杯	(11.0)		風化により不明瞭	10YR/3 淡黄	密	硬	底面片		
227	093-02	SD33 (B-V12)	土師器 甕	14.0		1ガキが若干確認できる	2.5YR5/8 黄	密	良	口縁体部片		
228	093-01	SD33 (B-V12)	土師器 甕	14.0		風化により不明瞭	7.5YR8/4 淡黄	密	硬	口縁体部片		
229	093-04	SD33 (B-V12)	土師器 甕	19.0		風化により不明瞭	10YR8/4 淡黄	密	良	口縁体部片		
230	093-07	SD33 (B-V12)	土師器 甕	21.5		ロクロ製 コナダ 底 部 外面ケズリ・ナデ	5YR7/6 黄	～1mm 砂粒含 密	硬	1/8		
231	011-05	SD33 (B-V12)	土師器 甕	20.8		口縁部 コナダ 体 部 外面ハケメ	7.5YR8/8 黄	密	良	口縁体部片		
232	011-04	SD33 (B-V12)	土師器 甕	30.8		ロクロ製 コナダ 体 部 内面ハケメ	10YR8/4 淡黄	～1mm 砂粒多含 密	硬	口縁体部片		
233	012-04	SD33 (B-V12)	土師器 甕	36.4		体 部 内面コハケ	10YR7/3 黄	～1mm 砂粒含 密	良	口縁体部片		
234	091-02	SD33	須恵器 杯蓋	16.5		ロクロナデ 天弁部 外面ロクロケズリ2/3のちロク ロナデ	5BG6/1 青灰	～1mm 砂粒含 密	良	口縁体部片		
235	091-01	SD33	須恵器 杯蓋	15.0		ロクロナデ 天弁部 外面ロクロケズリ1/2のちロク ロナデ	5BG7/3 青灰	密	良	口縁体部片		
236	092-07	SD33	須恵器 甕	15.0		ロクロナデ 底 部 外面ケズリ	5B7/1 明黄灰	密	硬	口縁体部片		
237	011-02	SD33 (B-V12)	須恵器 杯	12.4	3.3	口縁部 ロクロナデ 底 部 外面筋十口も模範状拉版	5B7/1 明黄灰	～5mm 小石含 密	硬	1/3		
238	011-01	SD33 (B-V12)	須恵器 杯	12.8	3.6	口縁部 ロクロナデ 底 部 ロクロケズリ	10BG7/1 明黄灰	密	良	1/3	外面に自然蝕	
239	092-04	SD33	須恵器 杯	(10.0)		体 部 ロクロナデ 底 部 外面ロクロケズリ 内面ロクロナデ	2.5GY8/1 オリーブ灰	～2mm 砂粒含 密	良	底面片		
240	092-02	SD33	須恵器 杯	(11.0)		体 部 ロクロナデ 底 部 外面ヘラ切のちロクロナデ 内面ロクロナデのちナデ	5B7/1 明黄灰	～3mm 砂粒含 やや密	硬	底面片		

第14表 出土遺物観察表 8

No	登録番号 (R No)	遺 蹟 区 出土位置	種 類 (器 種)	法 量 (cm)		観 察 事 項 成形・調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存 度	備 考		
				口徑(直徑)	器 高								
241	092-01	SD33	須恵部 鉢	(10.0)		体 部 ロクロナデ 底 部 外面へり切 内面ロクロナデ	S54/1 暗青灰	～5mm 小石含 やや密	良	底部分			
242	092-03	SD33	須恵部 鉢	(10.0)		体 部 ロクロナデ 底 部 外面糸切肌 内面ロクロナデ	10BG7/1 明青灰	密	良	底部分			
243	091-03	SD33	須恵部 片断類	(11.0)		ロクロナデ	SDG4/1 暗青灰	～4mm 砂粒含	良	底部分			
244	091-04	SD33	須恵部 瓶	(11.0)		ロクロナデ	SDG7/1 明青灰	密	良	口縁部分			
245	011-06	SD33 (B-V12)	須恵部 鉢	35.0		口縁部 ロクロナデ 体 部 外面ハケのちナデ	10BG6/1 青灰	～5mm 小石含	良	口縁体部分			
246	017-01	SD33 (B-V12)	須恵部 鉢	44.0		口縁部 ロクロナデ 体 部 外面タタキのちナメ 内面河 心門のアタ具のちロクロナデ	SDG5/1 青灰	～4mm 砂粒含	良	口縁体部分			
247	053-01	SD34	土師部 瓶	15.0	4.0	ロクロナデ	2.5Y8/3 灰黄	～3mm 砂粒含	良	ほぼ完存	状態悪く不明瞭		
248	099-01	SD34	土師部 皿	10.0	2.0 ～2.7	風化により不明瞭	10YR8/2 灰白	～3mm 砂粒多含	良	完存	状態悪く不明瞭		
249	099-02	SD34	土師部 皿	10.3	2.3 ～3.3	ロクロナデ 糸切肌	10YR5/1 薄灰	密	良	完存	逆あり		
250	053-03	SD34	山家焼 茶碗	16.4	5.5	ロクロナデ 糸切肌	SDG7/1 明青灰	密	良	口縁部3/4 底部完存	内面に自然磨耗台は 丁寧なつくり		
251	062-02	SK35 (C-F15)	山家焼 小鉢	8.8	2.6 ～3.1	ロクロナデ 底 部 外面糸切のちナデ磨し	ロクロナデ 底 部 外面糸切のちナデ磨し	ロクロナデ 底 部 外面糸切のちナデ磨し	2.5Y8/1 灰白	～1mm 砂粒含	密	完存	内面に使用痕向磨跡 状態あり
252	062-01	SK35 (C-F15)	山家焼 小鉢	9.6	2.6	ロクロナデ 底 部 外面糸切のちナデ磨し	ロクロナデ 底 部 外面糸切のちナデ磨し	ロクロナデ 底 部 外面糸切のちナデ磨し	2.5Y8/1 灰白	～1mm 砂粒含	密	完存	内面に使用痕向磨跡 状態あり
253	084-02	包含層 (C-H12)	土師部 小皿	9.8	1.9	ロクロナデ 糸切肌	ロクロナデ 糸切肌	2.5Y8/2 やや密	やや密	中や軟	1/3		
254	074-04	包含層 (C-120)	土師部 杯身	15.0	2.6	ロクロナデ 体部～底面ナデ・ユビオサエ	5YR8/4 灰黄	～3mm 砂粒含 やや密	密	1/8			
255	087-01	包含層 (D-1)	黒色土師 瓶	(8.2)		体 部 内面1/3 外壁ナメリ	5YR8/3 灰黄	密	1/8		内面黒褐色10YR3/1		
256	086-02	包含層 (C-122)	土師部 高杯	(11.0)		脚 部 ケズリ 胴部部 ココナデ	7.5YR8/4 灰黄緑	密	密	脚部分			
257	073-02	包含層 (C-122)	土師部 瓶	15.0		口縁部 ココナデ 体 部 外面タタハケのちナデ 内面ヨコハケのちナデ	2.5Y7/2 明赤灰	やや密	良	口縁部3/8			
258	074-02	包含層 (C-122)	土師部 瓶	30.2		口縁部 外壁ヨコナデ 内面ヨコハケ 体 部 外面タタハケ 内面ヨコハケ	2.5Y8/2 灰黄	～1mm 砂粒含 やや密	密	口縁部1/4			
259	073-03	包含層 (C-122)	土師部 瓶	16.1		口縁部 ココナデ 体 部 外面タタハケ 内面ヨコハケ	10YK5/1 灰白	～1.5mm 砂粒含 やや密	密	口縁部1/8			
260	074-01	包含層 (C-H20)	土師部 瓶	18.5		口縁部 外壁ヨコナデ 内面ヨコハケのちナデ 体 部 外面タタハケ 内面ヨコハケのちナデ	10YR8/1 灰白	～2mm 砂粒含	良	口縁部1/4			
261	051-06	包含層 (C-F10)	須恵部 杯蓋	11.4	4.8	口縁部 ロクロナデ 天井部 外面へり切のちナデ 内面ロクロナデ	10BG5/1 青灰	～2mm 砂粒含	密	2/3			
262	050-05	南園北T (C-119)	須恵部 杯蓋	12.0	4.5	口縁部 ロクロナデ 天井部 外面ロクロナメリ1/3 内面ロクロナデ	SD5/1 青灰	密	良	3/5			
263	084-03	包含層下層 (C-H23)	須恵部 鉢	11.2	3.9	口縁部 ロクロナデ 体 部 外面ロクロナメリ2/3	SD5/1 青灰	密	良	1/3			
264	051-05	包含層 (C-122)	須恵部 杯蓋	14.9	2.9	口縁部 ロクロナデ 天井部 外面ロクロナメリ2/3 内面ナデ	10BG5/1 青灰	～3mm 砂粒含	密	ほぼ完存			
265	051-01	西ヶ丘ジャン (B-Y3)	須恵部 鉢	14.0	4.2	ロクロナデ 底 部 外面ロクロナメリ	2.5YR7/3 灰赤黄	密	良	1/3			
266	051-02	包含層下層 (C-123)	須恵部 鉢	14.0	4.0	口縁部 ロクロナデ 底 部 外面ロクロナメリのちロクロナ デ 内面乱ナデ	10BG4/1 暗青灰	～5mm 小石含	良	2/3			
267	052-03	包含層 (C-G19)	須恵部 高杯	13.0		口縁部 ロクロナデ 底 部 外面ロクロナメリ 内面乱ナデ	10BG7/1 明青灰	～7mm 小石含	密	1/4程度のみ			
268	052-01	包含層 (C-H18)	須恵部 皿	(体径9.3)		体 部 ロクロナデ・ロクロナメリ	10BG7/1 明青灰	～7mm 小石含	密	体部完存			
269	084-01	包含層 (C-112)	須恵部 皿	8.2	3.7	口縁部 ロクロナデ 体 部 ケズリ底部糸切肌	5K6/1 青灰	やや密	良	1/3			
270	052-02	包含層 (B-X3)	須恵部 皿	(7.4)		ロクロナデ	7.5YR6/1 灰黄	密	良	底部のみ	底部外面へり切号		

第15表 出土遺物観察表9

No	登録番号 (R No)	遺構 地区 出土位置	種類 (器種)	法量 (cm)		観察事項	色調	胎土	焼成	残存度	備考
				口径(φ)	器高						
271	086-01	包含層 (C-H19)	須恵器 甕	(11.0)		体 底 ロクロナデ 底 底 外面板状底ナデ	N8/7 灰白	並	良	体部1/2底 部3/3	
272	084-04	包含層 (C-I22)	須恵器 甕	28.0		口縁部 ロクロナデ 体 底 工具ナデ	SBS/1 青灰	並	良	口縁部1/7	
273	068-01	麻布北西Tr (C-J21)	須恵器 甕	17.2 (29.3)	32.1	口縁部 ロクロナデ 体 底 外面タタキ 内面同心円の穴ナデ	N8/N7/ 7.5Y/6	並	良	口縁部1/4 体部3/4	
274	030-01	包含層 (A-Y25)	須恵器 甕	11.2	2.7	ロクロナデ 底 底 糸切のちロクロナデ	N8/1 灰	並	良	4/3	見込みに重焼痕 内面施釉釉10Y8/2 灰白
275	060-01	包含層 (A-Y25)	須恵器 甕	11.2	2.1	ロクロナデ 底 底 糸切のちロクロナデ	N8/1 灰	並	良	完存	重焼痕ツケ掛け 釉調7.5Y/5(210Y/2 灰白)
276	060-02	赤トナリ層 (A-Y25)	須恵器 甕	12.3	2.2	ロクロナデ 底 底 糸切のちロクロナデ	N8/1 灰	並	良	完存	重焼痕ツケ掛け 釉調10Y8/6(明黄緑 7.5Y/5(3灰ナリ)並
277	030-02	包含層 (A-Y25)	須恵器 甕	12.4	2.1	ロクロナデ 底 底 糸切のちロクロナデ	N8/1 灰	並	良	2/5	ツケ掛け 底付着 釉調7.5Y/6(灰白)
278	086-03	包含層 (D-38-CD)	須恵器 甕	17.0		ロクロナデ	N8/ 灰	並	良	口縁部1/6	ツケ掛け 釉調7.5Y/6(灰白)
279	030-06	赤トナリ層 (A-Y25)	須恵器 甕	13.2	4.3	ロクロナデ 底 底 糸切のちロクロナデ	N7/1 灰	密	良	2/3	ツケ掛け 釉調7.5Y/6(灰白 10Y/1+ナリ)並
280	061-03	赤トナリ層 (A-Y25)	須恵器 甕	13.6	5.7 ~5.9	ロクロナデ 底 底 外面ロクロナデ ツケ	7.5Y/7/ 灰白	密	良	2/3	ツケ掛け 釉調7.5Y/6(3ナリ)並
281	006-11	包含層 (C-H18)	須恵器 甕	(6.4)		ロクロナデ	10Y/8/ 灰白	密	並	底底片	重焼痕 剥離多い 釉調5Y/6
282	006-03	包含層 (D-46-1Y)	須恵器 甕	11.1 (6.6)	2.3	ロクロナデ 糸切底	2.5Y/8/ 黄灰	密	並	1/2弱	三又トナリ 釉調7.5Y/6
283	007-02	包含層 (C-H18)	須恵器 甕	(7.8)		ロクロナデ 底 底 外面ロクロナデ	10Y/7/ 灰白	密	並	底底片	釉調2.5G/2 (後に変色)
284	007-03	包含層 (D-B3)	須恵器 甕	(5.5)		ロクロナデ	2.5Y/8/ 黄灰	並	並	底底片	見込みに凹線あり 釉調5Y/6
285	006-12	包含層 (C-E24)	須恵器 甕	(6.2)		ロクロナデ 底 底 外面ロクロナデ	10Y/7/ 灰白	密	並	底底片	重焼痕 見込みに 凹線 釉調7.5Y/7/8
286	006-08	包含層 (B-X5)	須恵器 甕	(7.0)		ロクロナデ 底 底 外面ロクロナデ	SBS/6/ 青灰	並	良	底底片	ツケ掛け 見込みに 凹線あり
287	006-06	包含層 (D-B3)	須恵器 甕	(6.4)		ロクロナデ 底 底 外面ロクロナデ	SBS/6/ 青灰	中や密	良	底底片	見込みに凹線あり 釉調5Y/6
288	007-01	包含層 (C-K24)	須恵器 甕	(6.1)		体 底 外面ロクロナデ 内面へう工具ロクロナデ 底 底 ロクロナデ	5Y/2 灰白	密	並	底底片	
289	058-02	包含層 (C-E21)	須恵器 内面	23.0		内面ロクロナデ	N8/1 灰白	並	良	底底片1/5	
290	030-04	包含層 (G2 10層)	山系陶 小甕	9.2	2.9	口縁部 ロクロナデ 底 底 糸切のちナデ消し	10Y/7/ 灰白	並	並	2/3	高台部や中やナ ツケ
291	083-03	包含層 (C-H17)	山系陶 小甕	9.2	5.1	口縁部 ロクロナデ 底 底 糸切底	N8/ 灰白	並	良	口縁部1/5 底底片	重焼痕 釉調 口縁部に自然釉
292	082-04	包含層 (B-Y2)	山系陶 小甕	10.6	3.0	口縁部 ロクロナデ 底 底 糸切のちナデ消し	2.5Y/6/ 灰白	中や密	良	口縁部1/3 底底片	釉調
293	083-01	包含層 (C-H17)	山系陶 小甕	9.4	2.6	ロクロナデ	N8/ 灰白	並	良	口縁部1/6 底底片	釉調
294	074-03	包含層 (C-F14)	山系陶 小甕	10.0	3.2	口縁部 ロクロナデ 底 底 糸切のちナデ消し	5Y/1 灰白	並	良	口縁部1/6 底底片	
295	082-03	包含層 (B-Y2)	山系陶 小甕	8.0	2.8	口縁部 ロクロナデ 底 底 外面糸切底 内面ロクロナデ	2.5Y/8/ 灰白	中や密	良	口縁部1/3 底底片	
296	083-02	包含層 (C-I12)	山系陶 小甕	9.0	2.6	口縁部 ロクロナデ 底 底 へう切か	N8/ 灰白	中や密	並	口縁部1/6 底底片	
297	082-06	包含層 (B-Y2)	山系陶 小甕	8.4	1.8	口縁部 ロクロナデ 底 底 糸切のちナデ消し	N8/ 灰白	密	良	口縁部1/6 底底片	
298	082-05	包含層 (B-Y2)	山系陶 小甕	8.8	1.5	口縁部 ロクロナデ 底 底 糸切底	N8/ 灰白	密	並	口縁部1/3 底底片	
299	004-05	包含層 (C-H18)	山系陶 甕			底 底 糸切底内面ロクロナデのち一定 方向のナデ	SBS/7/ 黄灰	並	並	底底片	底底面に重焼痕
300	030-03	包含層 (南東斜面下)	山系陶 甕	15.4	5.6 ~6.1	口縁部 ロクロナデ 底 底 糸切のちナデ消し	10Y/6/ 灰白	並	並	2/3	高台部は比較的丁 なつくり重焼痕

第16表 出土遺物観察表10

No	登録番号 (R No)	遺構 区 出土位置	種類 (器種)	法量 (cm)		観察事項 成形・調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考	
				口径	器高							
301	082-01	包含層 (C-H22)	山茶碗 碗	16.2	5.9	口縁部 ロクロナデ 底 部 糸切のみロクロナデ	N8/ 灰白	～6mm 小石含 書	良	1/2	高台は比較的丁寧な 焼成口縁部に自然物	
302	061-02	包含層 (C-E15)	山茶碗 碗	16.5	5.2 ～5.4	口縁部 ロクロナデ 底 部 糸切のみナデ直し	7.5Y7/1 灰白	書	良	ほぼ完好	内面に自然物底面外 面中心にユビオサエ	
303	051-04	包含層 (B-Y3)	山茶碗 碗	18.6	5.8	口縁部 ロクロナデ 底 部 糸切のみナデ直し	7.5Y8/1 灰白	～1mm 砂粒含 やや書	良	2/3	焼成	
304	051-03	包含層 (C-I11)	山茶碗 碗	15.2	5.6	口縁部 ロクロナデ 底 部 糸切のみ内面ナゲ2本	10BG7/1 明黄灰	～1.5mm 砂粒含 書	並	2/3	高台はやや厚でひび 割れる	
305	082-07	包含層 (C-I18)	山茶碗 碗	(8.2)		口縁部 ナ 底 部 糸切のみ	N8/ 灰白	書	良	底面のみ	内面使用痕焼成時 痕か	
306	082-02	包含層 (C-G14)	山茶碗 碗	15.9	5.5	口縁部 ロクロナデ 底 部 糸切のみナデ直し	N8/ 灰白	やや書	良	口縁部1/3 底面完好	内面使用痕焼成時 痕ややつぶれる	
307	083-04	包含層 (C-H17)	山茶碗 碗	16.4	5.4	口縁部 ロクロナデ 底 部 糸切のみ	N7/ 灰白	～2mm 砂粒含 やや書	良	口縁部2/5 底面完好	底面に自然物 痕	
308	061-01	包含層 (南原前面)	山茶碗 碗	16.8	5.6	口縁部 ロクロナデ 底 部 糸切のみ	N8/ 灰白	書	良	4/5	高台はつぶれひび割 れる並あり	
309	082-08	包含層 (C-H12)	山茶碗 碗	(8.6)		口縁部 ロクロナデ 底 部 糸切のみ	N8/ 灰白	書	並	底面のみ	内面に使用痕焼成時 痕	
310	086-07	包含層 (G110層)	白磁 碗	15.1		ロクロナデ	7.5Y8/1 灰白	並	良	口縁部片	焼調10Y8/2灰白	
311	086-04	包含層 (南原前面T)	白磁 碗	16.0		ロクロナデ	5Y8/2 灰白	並	良	口縁部片	焼調10Y8/2灰白	
312	056-03	包含層 (南原前面)	白磁 碗	6.0		ロクロナデ	7.5Y8/1 灰白	並	並	口縁部片	焼調7.5Y8/2灰白	
313	056-01	包含層 (C-H17-18)	白磁 碗	16.0		ロクロナデ 体 部 外周ロクロナデリ	10Y8/1 灰白	並	並	口縁部片	焼調10Y8/2灰白	
314	086-05	包含層 (G2 10層)	白磁 碗	15.8		ロクロナデ 体 部 外周ロクロナデリ	5GY8/1 灰白	書	良	口縁部片	焼調2.5GY8/1灰白	
315	087-02	包含層 (C-H10)	白磁 碗	16.0		ロクロナデ 体 部 外周ロクロナデリ	5GY8/1 灰白	書	良	口縁部片	焼調2.5GY8/1灰白	
316	087-03	包含層 (C-H12)	白磁 碗	16.0		ロクロナデ	5GY8/1 灰白	書	良	口縁部片	焼調2.5GY8/1灰白	
317	086-06	包含層 (C-F13)	白磁 碗	16.0		ロクロナデ	5Y8/2 灰白	並	良	口縁部片	焼調10Y8/2灰白	
318	056-02	包含層 (C-H18)	白磁 碗	(6.0)		ロクロナデ 底 部 外周ケズリか	10Y8/1 灰白	並	並	底面片	焼調10Y8/2灰白	
319	081-01	包含層 (B-O11)	ヤスカイト 石碗	縦:39 横:40 高:39							ほぼ完成	片蓋無蓋D4a
320	081-04	包含層 (南原前面T)	砂岩 磁石	縦:9 横:8 高:6								表裏二面を利用
321	081-02	包含層 (D-B2)	砂岩 磁石	縦:4 横:6 高:6								四方面を利用

第17表 出土遺物観察表11

付 8 工区の範囲確認調査

第2回の協定変更(平成5年9月7日付け)に伴い8工区内にある遺跡の範囲確認調査を平成5年度に実施した。8工区には6遺跡が所在するが、このうち六太A遺跡と河崎遺跡について平成5年11月15日～24日に、天堤古墳・内垣内遺跡・山王遺跡・丸市遺跡について平成6年1月18日～20日に範囲確認調査を実施した。調査方法は、天堤古墳についてはトレンチ調査、他の5遺跡については4m×4mの試掘坑による。

調査の結果、六太A遺跡では現地表から1m以上で古式土師器を多量に含む層があり、溝状遺構が想定されるとともに、出土遺物も弥生時代後期から中世に至るまで多量に出土したことから、本調査が必要と判断した。しかし、他の5遺跡では、遺構は検出されず、遺物もごく僅かであることから本調査の必要なしとした。

山王遺跡は、平成7～8年度に津市教育委員会によって調査され、中勢道路用地のすぐ西の丘陵斜面から古墳時代～中世にわたる多量の遺物が出土した。



第53図 六太A遺跡試掘坑位置図 (1:5,000)



第52図 8工区内遺跡位置図 (1:50,000)

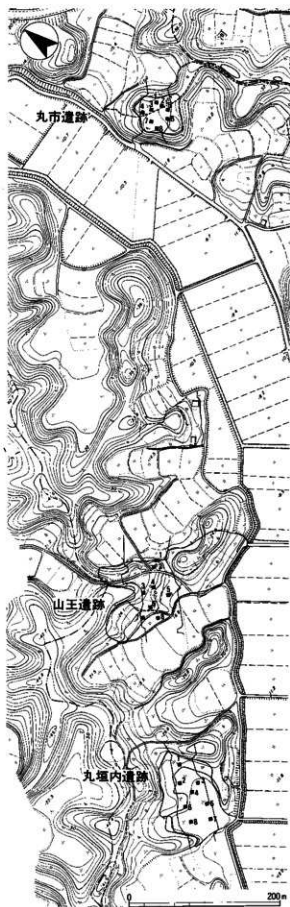
(国土地理院1:25,000 複本・白子)

番号	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	現状	種類	時代	概	要
18	丸市遺跡	安芸郡河芸町南黒田字丸市		山林 畑	散布地	中世	野のような平坦地が認められたが、試掘の結果遺構はなく、少量の近世陶器片が出土。	
19	山王遺跡	安芸郡河芸町南黒田字山王		山林 畑	散布地	古墳～中世	丘陵斜面に立地。試掘の結果、少量の須恵系陶器片が出土したが、明確な遺構なし。	
20	内垣内遺跡	安芸郡河芸町南黒田字内垣内		山林 畑	散布地	古墳～奈良	丘陵斜面及び河筋に立地。試掘の結果、明確な遺構・遺物とも確認されなかった。	
21	天堤古墳	津市大牟陸合町字天堤		山林	古墳	古墳	丘陵尾根に立地。試掘の結果、自然地形と判明。	
22	河崎遺跡	津市大牟陸合町字河崎		畑 水田	散布地	鎌倉以降	河川段丘上に立地。試掘の結果、遺構・遺物とも確認されなかった。	
23	六太A遺跡	津市大里窪田町字花村	13,220	畑 水田	散布地	弥生以降	中・近世の遺構・遺物のほか、谷状の落ち込みから多量の弥生～古墳時代の土師器が出土。	

第18表 中勢道路(8工区内)遺跡概況



第54図 川崎遺跡・天堤古墳試験掘坑位置図 (1:5,000)



第55図 内堀内・山王・丸市遺跡試験掘坑位置図 (1:5,000)

写 真 图 版



調査前風景 (南から)



調査前風景 (東から)



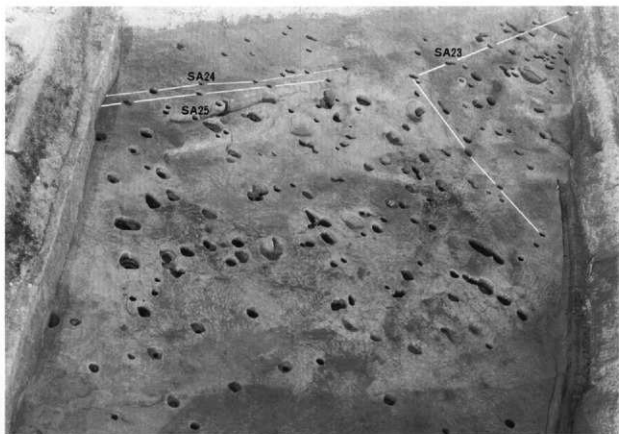
調査区遠景（南東から）



調査区全景（垂直）

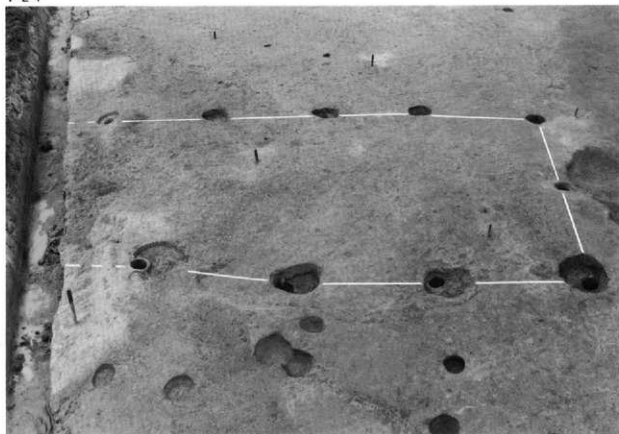


A地区全景（南から）



B地区全景、SA23～25（南西から）

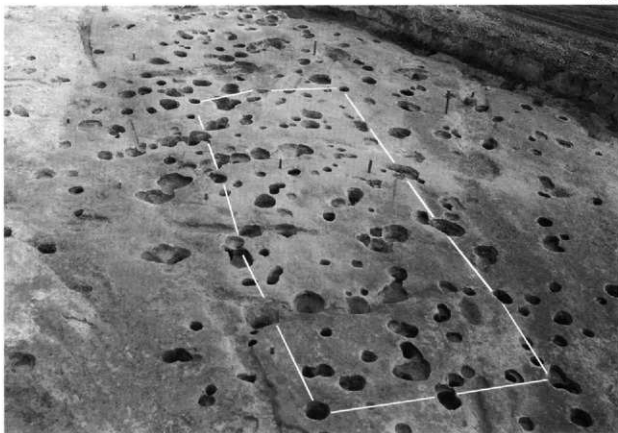
PL 4



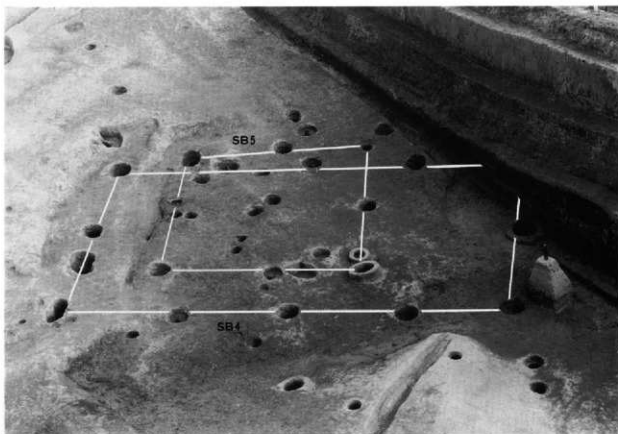
SB 1 (北東から)



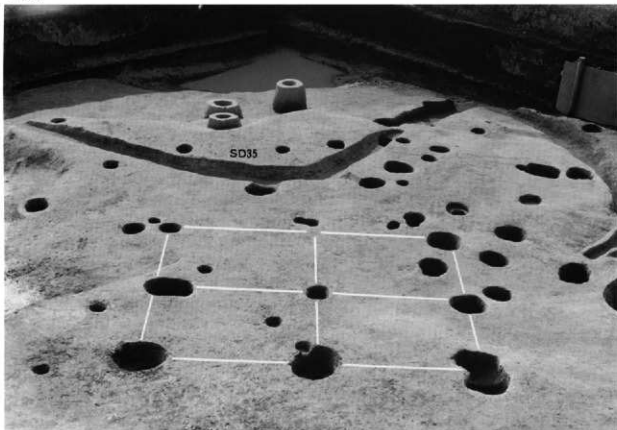
SB 2 (西から)



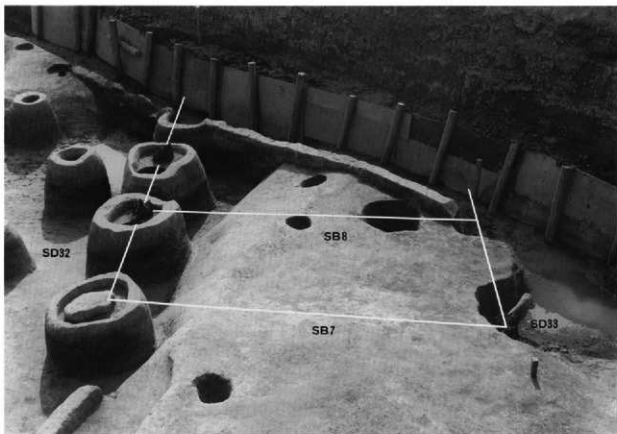
SB 3 (西から)



SB 4・5 (西から)



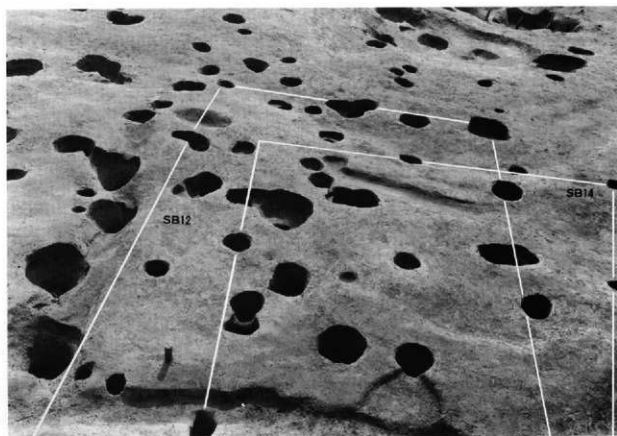
SB 6、SD35 (北から)



SB7・8、SD32・33 (北から)

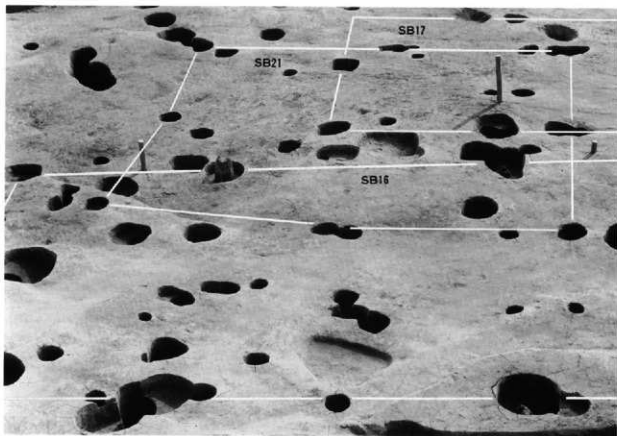


SB 9 ~ 11・13・15 (北から)

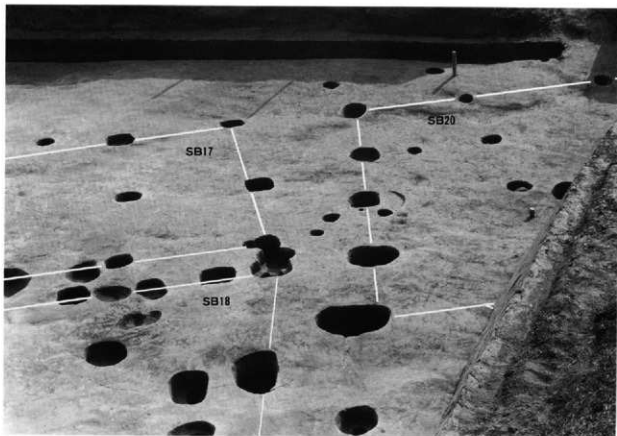


SB12・14 (北から)

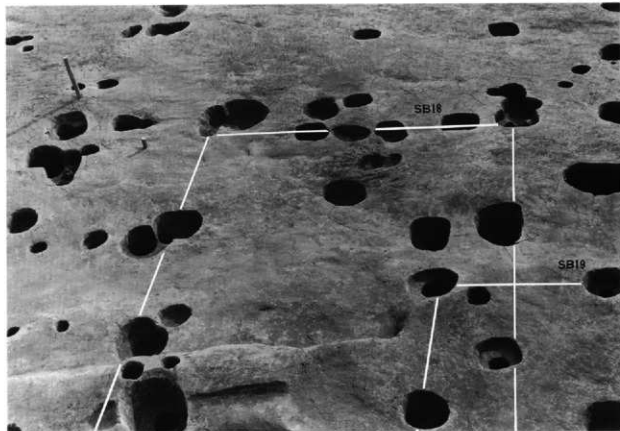
P L 8



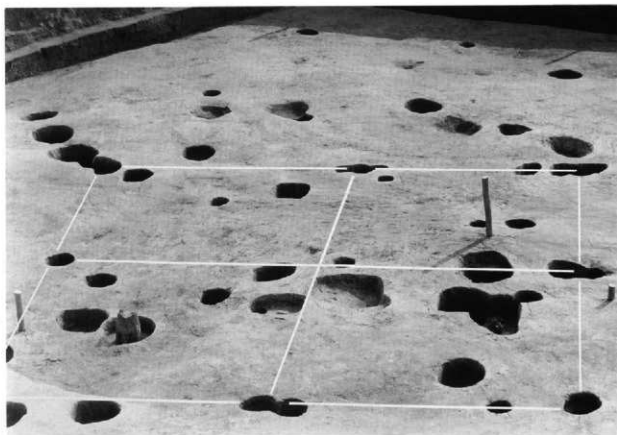
S B 16・17・21 (北から)



S B 17・18・20 (北から)



SB18・19 (北から)

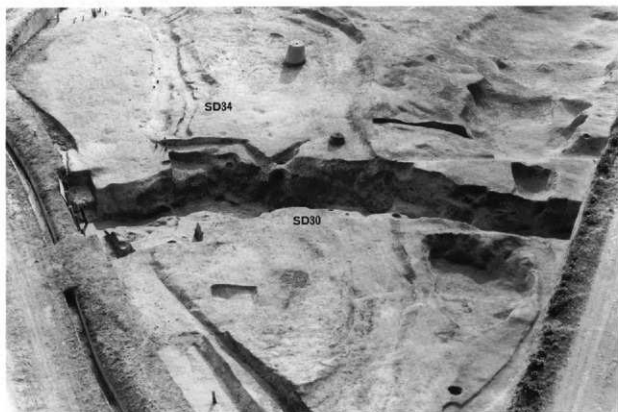


SB21 (北から)

P L 10



SB22、SK36（北から）



SD30・34（北東から）



SD31、SA26~29 (南西から)



8年度調査区全景 (北東から)



出土遺物 1



31



34



36



42



33



41



46



47



49



48



61



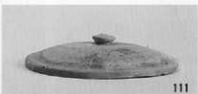
66



106



110



111



117



130



138



147



155



156



169



168



173



177



172



197



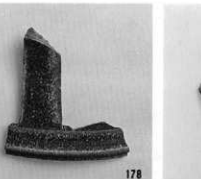
202

203

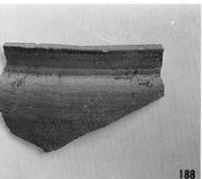
204



157



178



188



193



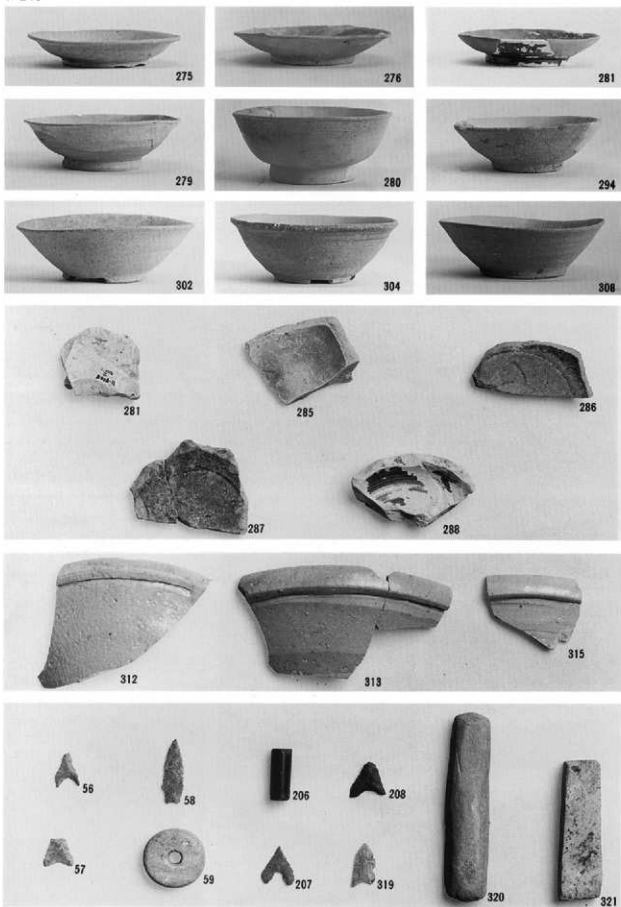
196



198



出土遺物 4



出土遺物 5

報告書抄録

ふりがな	いんげんこくりにじゅうばんごうちゅうりゅうりょうこうくわんせつしぎょうにともなうたけいせいほくつりょうけつこく							
書名	一般国道23号中勢道路(6工区)建設事業に伴う高井A遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	115-8							
編著者名	筒井昭仁							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	西暦1998年12月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高井A遺跡	三重県鈴鹿市 徳田町字高井	24207	575	34° 49' 41"	136° 32' 19"	19950905 ～ 19960306 19960513 ～ 19960523	4,100 450	一般国道23号中勢道路建設事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
高井A遺跡	集落跡	奈良時代～平安時代	掘立柱建物・溝	須恵器・灰輪陶器・緑輪陶器・山茶碗		「井於(施)」と墨書された須恵器5点(いずれも奈良時代) 円筒形須恵器		

平成 10(1998) 年 12 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 4 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 115 8

一般国道 23 号中勢道路 (6 工区) 建設事業に伴う

高井 A 遺跡発掘調査報告

1998. 12

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 副 オリエンタル印刷株式会社